
白蒼月夢幻譚～二つ月の二つ世界（種シリーズ?）

汐井サラサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白蒼月夢幻譚〜二つ月の二つ世界（種シリーズ？）

【Nコード】

N7482W

【作者名】

汐井サラサ

【あらすじ】

種シリーズ第四弾。

剣と魔法と素養の異世界シル・メシアで永住権を獲得し結婚したマシロのその後のお話。

メインではないので特に指定は掛けませんが、微エロは標準装備なのでいちゃらぶっているのが苦手な方はご注意ください。

▼登場人物紹介的なもの（前書き）

今更ですが、人物紹介。知っている人は知っている。知らない人は覚えてね。良かったら第四段スタートの準備運動的に楽しみくだ
さい。

▼登場人物紹介的なもの

■ 月見里真白 やまなしましろ

シル・メシアに落ちて永住決定した上に、結婚までしてしまった。
順応能力マックスの主人公。

基本的に前向きだけど、旦那様関係のことになると若干病み気味。
なんでもかんでも受け入れる体制だけは整っている。来るもの拒まず去るものは場合により、蹴りくらいは入るかも……。

■ ブラック（ルインシル＝ミア）

シル・メシア唯一独占職。種屋の店主。黒猫耳尻尾付きの獣族。
マシロの旦那様。奥様同様、相手のことになると猛烈に病み中。
そして、大抵一人で突っ走る（そのせいで奥さんが病んでる気がしないでもない）

天下無敵で、暗殺業も健在です。
なので、やっぱり命に対して価値を見出すことが出来ない。空回りが大得意っ。

■ ルカ

種屋候補生として、蒼月教団に在籍。
現在はマシロの薬剤店の手伝いをしている。白猫耳尻尾付きの獣族。

店長さんに対して淡い恋心を抱き中。そのうち、嫉妬パワーで薬剤店を崩壊すると思う。思春期真っ只中の少年。

■ エミル（エミリオ）

シル・メシア王家。三王の筆頭。
常に穏やかで誰にでも優しく賢王と名高いけれど、マシロが大好き過ぎて、マシロが絡むと大暴走する。（周知の事実『王陛下は白

月の姫に囚われ中』）結構、周りに迷惑をかけているが、人徳か諦めか、誰もそのことを責めたりしない得な性格の持ち主。

■ カナイ（本名不明）

エミル専属の魔術師。

魔術系の素養が特出していて、現在シル・メシアにて並ぶものは居ないほどの使い手。……なのに、性格がちょっと残念なので、常に貧乏くじを引いている。

エミルが王位継承した時点で、あれほど嫌っていた王宮職につき主に魔法具関係を管轄している。平和協定が結ばれている関係上、攻撃的な魔法は必要とされず、魔力が余って仕方ないので、エネルギーとされている。（その辺も微妙に残念すぎる逸材）

比較的地味とされる容姿の割りに、派手なことが好きで大技を使いたいのに使う先がなく、暇つぶしにアルファに雷を落としてみたりして遊んでいる。↑有能な部下に恵まれたため割と暇。

マシロのことは大切に思っているものの、世話焼きな性格のためマシロに『お父さん』と認識されいつまでも訂正されないため、もうその枠に満足しつつある。

■ アルファ（アルファアルファ）

エミル専属の騎士。

王様専属師団の総括をやっていて実は忙しい、はず……。

天賦の才を持つといわれるほどの剣技を極めているものの、今は平和なので、大抵は型試合総舐め。ギルド名簿から抹消していないのを良いことに、こっそり大きな（危険度の高い）依頼が入ったら回すように根回しするくらい、アウトドア派（違うだろ）天真爛漫で細かいことは気にしないおらかなタイプ。

マシロのことは大好きだけど、ご主人様が大好きなので、出来るだけ隠している。決して既婚者相手だからではない。

■ シゼ（シルゼハイト）

エミル専属の薬師。

幼少の頃より面倒を見てもらっているせいもあり、エミルが大好き。常に、エミル様第一。エミル様エミル様エミル様、なはずなのに気が付いたら、マシロに首根っこつかまれて王宮から引っ張り出されている。

根っからの引き籠もり体質なので、本当に勘弁して欲しいと思っているのだけれど、口に出していつているつもりなのだけど、どうしても分かってもらえず。今日もずるずる……。エミル様の許可が下りているのなら仕方ないと、諦めモード入っても認めない基本ツン。几帳面で折り目正しい性格も災いして、素行があまり宜しくないルカと折り合いが悪い。

■ ラウ＝ウィル

三王に通じる宰相閣下。

のはずなのに、エミル最前でエミルのところにはかり嫌がらせのように仕事を回している。本人曰く「愛故に」らしいから仕方ない。常にマイペース。自分の好きにしか生きられない。ある意味不器用な人物でもある。

最近は一王中、一人だけ独身であるエミルにかこつけて、自身もそれ相応の姫と婚姻関係を持つよう迫られていて、苛々中。当たる先は……もちろん、エミリオ陛下。

■ メネル&ナルシル

エミルの異母妹とその息子（男の娘）

バツイチ子持ちのお姫様。星詠み素養を強く持ち王宮専属の占星術師として活躍中。連れ子のナルシルは実はメネルの双子の妹の子ども。亡き妹に代わり面倒を見ている。

■ レニ&レムミラス

マリル教会司祭と、蒼月財団々長。

実は兄弟。対照的な信仰を持ち相容れない。けれど、根っこの根っこのほっそい根っこ辺りくらいは繋がっていて、一応お互いを気にはしている。

兄の、レムミラスは冷酷無比を体言化したような冷たい容貌で、常に周りを威嚇しているような指導者。

弟のレニは温厚。陽だまりの園という孤児院も管理している関係上子ども好き。しかし、真面目過ぎるところがあるため、暴走したこともある。

■ ハクア & amp ; シラハ

白銀狼の夫婦。聖獣指定を受け、国の保護下にあるはずの獣。

ハクアは、マシロと主従関係を結んでいるため王都に在住。因みにマリル教会で厄介になっている。

人と変わらないくらいの知能と、ずば抜けた魔力戦闘能力を持っている、ハズだが活かされる場所がないことと、主人激ラブで何かを見失い気味なので、本来の姿はよく分からない。

■ ハスミ & amp ; キサキ

三王の残り二人。エミルの異母兄と異母姉。

両方既婚者。英雄然としたハスミには四人の妻あり（一人増えましたが）男装の麗人キサキには一人の夫がいる。本来、決め事は三人で締結することとなっているが、二人とも好戦的な部分をエミルにことごとく見抜かれて、案を切り捨てられまくったため「最終決定件は、エミルにある。頑張れ」とほぼ可愛い（そう本人たちは思っている）異母弟に丸投げだったりもする。

他多数、でお送りします。

良かったら最後までお付き合いいただけると嬉しいです。

第一話：白猫と私（1）

白い月青い月二つ月

貴方の夢見る夢世界。もう一つの別の世界。

月が夢見ることあれば、それはきつともう一つの現実世界……

……サアアアアア

剣と魔法と素養の世界。二つ月の浮かぶ異世界シル・メシア。生まれ育った世界が故郷となり。有り得ないものばかりしかなかったこの世界がホームグラウンドになった。

そして、その世界の王都の一角で今日も閑古鳥が鳴いている薬剤店を切り盛りするのが、私、やまなしましろ月見里真白こと、マシロだ。ここでは姓を名乗ることがまずないから、ヤマナシという姓を捨てたも等しい。

「なあ、店長。こんなに必要ないだろ？」

「店番はどうしたの？」

裏にある温室の——主に薬草類——世話をしていると、ひよつこり顔を出したルカが意地の悪い台詞を投げ掛けてくる。これはいつものことだ。だから、私は振り返ることもなく、そう告げる。ルカは「どうせ誰もこねえよ」と失礼極まりない事実をいいながら——そう、事実だ。哀しいけど——大きな欠伸を隠そうともしない。

「必要ないっていても、あるんだから、まだ枯らせちゃ駄目でしょう？ 収穫の頃合いになれば乾燥庫に移すから良いの」

「で、それでも捌けなきゃ、マリル教会や、辺境の町で破格で配るのか？」

多少呆れたようにそういったルカに私は、はあと大きく溜息を吐き肩を竦める。

「――……ルカって結構見てるよね。ブラックでさえ口出ししないんだから、貴方もしないの」

因みにこのルカという少年――今年で幾つになるのだろう、多分、十四歳？　くらいのはずだ――は、元の世界では有り得ない猫耳、尻尾付。色は白。黒いのは私の……まあ、今は良い。

「なあ、これ枯れてるんじゃない？」

私がぼんやりしていれば、勝手に温室を物色し、今日私が直々に仕入れたものにけちをつけている。けれどそれは、そういわれても仕方のない品だった。私はのんびりと歩み寄ってルカの手元を覗き込む。

「分からないけど、表通りの生花店で処分に困ってたみたいなの。だから、貰ってきたんだけど」

「……本当に、なんでもかんでも拾ってくるよな」
「拾ったんじゃないよ。貰ったんだって！」

いや、力説の場所がちょっとずれていることは私でも分かる。分かるけど、もう、そつとして置いてもらって良いと思う。

「なんか凄く珍しいものでこの一鉢しかはいらなかったとか。でも見た目も大して派手じゃないし認知度も低くて、売れなかったみた

いで……」

ちよつと可哀想だと思つたのだ。

確かに見た目枯れているように見える。でもまだ生花なのだそう
だ。茶色の葉に花……瑞々しさにかける姿では枯れていると判断さ
れても仕方ない。

あまり乱暴に触れては、葉や花が散つてしまいそうで、鉢植えの
まま置くことにした。それに今はまだでも、そう長持ちしそうにも
なかったし……。

「ふーん……」

しげしげとそれを眺めていたル力に、私は、触らないでよ。と注
意して、後片付けを始めた。がたがたと片付けたあとも、まだ眺め
ているル力に再び歩み寄る。ねえ、と肩を叩けばびくりつと尻尾が
逆立った。

「そんなに珍しい？」

「え、ああ、いや。そうじゃなくて、なんか見たことあるような、
いやでも……こんなんじゃないかな……なんか引つかかって
気持ち悪いと思って」

「ブラツクにでも聞いてみたら？ きつと直ぐ分かるよ」

にこりとそういえば、ル力は苦虫を噛み潰したような表情を隠そ
うともせず「嫌だ」と語気を強めた。

「絶対あの人に聞いたら鼻で笑われる。絶対聞かない。聞くくらい
なら知らなくて良い。どうせ、直ぐ枯れるだろ」

あーあ、退屈ーつとぶんぶん腕を振り回して、ル力は私の頭をこ

ずっと叩いてから温室を出て行った。

もう、可愛くないんだから。

ふう、と叩かれて乱れた髪を梳き整えながら私もそのあとを追いつけた。

私の毎日は、平穩そのものだ。

一日の大半を、この店と、家の用事で費やし、のんびりと過ごす。一応形としては結婚もしているのだけれど、それまでとそれからあまり吃驚するほどの変化は私にはない。

ただ、あまり大きな声ではいえないけれど、以前にも増してお客さんは減ってしまった。沢山お客さんが来てくれる日でも三人とか四人程度。誰も来ないほうが多い。

それでも店を畳まないのは、畏怖を感じながらもここしか頼る人が居ない人たちがいることと、それなりにこの店に必要性があるからだ。色んな意味で。

「ちよっ！ このチビっ！ 店ん中走るなっていつてんだろっ！」

店舗部分に近づくと、ルカの怒声が聞こえる。

「にゃんこさんっ！」

「おれは猫じゃねーっ！！」

「にゃんこさんにゃんこさんにゃんこさーんっ」

……完全に遊ばれている。

私が「どうかした？」と声を掛ける前に直ぐに状況は飲み込めた。騒がしいお客さんは、ナルシルだ。ということは保護者であるメネルも一緒だろう。

「いらつしゃい、メネル」

ひょっこりと裏から顔を出せば、ルカとナルシルのやりとりをにこにこ眺めていたメネルを発見して微笑む。私が声を掛けた麗人は、光を紡いだような美しい金色の髪をさらりと揺らして「こんにちは」と笑い私のところまで歩み寄ってくる。

「今日はどうしたの？」

私は、猫とネズミの追い掛けっこを横目にしながら、カウンター裏に掛けてあるエプロンを取って身に付ける。

「マリル教会からの帰りなのよ。ナルシルが貴方に会いたいと騒ぐから、迷惑かと思ったんだけど、連絡も取らずに立ち寄らせてもらったわ」

にっこりとそういつてくれたメネルに「そうなんだ」と、私が答えるより先に「マシロはっけーん」とナルシルに飛びつかれた。

文字通り飛びつかれた。

げふつと息を詰める。子どもの勢いは侮れない。

私は体勢を整えると、ナルシルを抱き上げる。ナルシルはメネルの双子の妹アセアの実子であるが、未婚であり秘密裏に出産させられたため、孤児院：陽だまりの園へ暫らくの間預けられていた子だ。それをメネルが王宮に戻る際に引き取ったのだけど、容姿だけでいえばメネルとアセアがそっくりであったのと同じように、ナルシルもとても良く似ていて親子として育っている二人としてはとても良いことだと思う。

「ナルシル、なんか益々女の子っぽくなってない？」

「だって、女の子の方が可愛いと思うわ」

そうか、この髪を両サイドの高い位置で縛ったりしているのは、メネルの趣味なのか。深く気にしてなかったけど、このふわふわな洋服は女の子の、だよ、ね。うん。

「ナル可愛い？」

私の腕の中で、こてんつと首を傾げると、さらりと光を結い上げたような金糸が揺れる。美少年ではなく美少女だ。じっと見上げてくる愛くるしい瞳。小動物的だ。そして、私は小動物が大好きですつ。

「……可愛いっ！」

ぎゅむっ！

ええ、ええっ！

もう可愛いに決まっているじゃないですかっ！

可愛いよっ。性別なんてどうでも良いよ。似合ってるよっ！

ちよつと興奮気味に抱き締めたら、メネルに「でしよう？」と微笑まれた。そんな私たちを冷めた目で見たル力は「おれ、茶でも淹れてくる」と若干やつれた感じで奥に引っ込んでいった。

第二話：白猫と私（2）

メネルは呆れたように笑いを溢し、隅っこに置いてあるテーブルに着いた。私がナルシルを降ろせば、ナルシルはメネルの傍に寄ることなく「にゃんこさーんっ」とルカのほうへと走り去る。どうにもこうにも気に入られてしまっているようだ。

その後姿を見送って

「ナルシル、元氣そうだね？」

と微笑ましい気持ちになり同時に安堵する。

「ええ、今のところ王宮医も大丈夫だといってくれているわ」

今も元気に駆けていったナルシルは、心臓に病を抱えている。だから、あまり無理が押せる身体ではない。小さな子にそんな説明しても分かるわけもなく、自分の身体のギリギリまで酷使してしまうので目が離せない。

「マシロはあの子、いつまで置いておくの？」

メネルはルカがミニキッチンのある裏から、かちやかちやとお茶の準備を整える音を点て始めるまで待つて静かに口を開く。そんなの考えるまでもない。答えは決まっている。

「ずっとだよ。特に期限なんて決めてない。ルカが他に行きたければそれでも構わないけれど、でも、出来ればここに居て欲しいかな？」

「居させてるんじゃないくて、居て欲しいのね」

マシロらしいわ。とメネルは笑みを深める。

そんな風にいわれるとなんかむず痒いけれど、実際ル力はとても役に立ってくれているし——一番に私の伽的なものとして——今更私の意志で蒼月教団に突き返すつもりもないし、追い出すなんて持つての他だ。

「私はル力のこと好きだし、離れるなんて考えられない」

—— …… カシャンッ！

いった途端、奥から食器の割れる派手な音がした。

「大丈夫ー？ ル力。怪我してなーい？」

私が呼びかけると「うるさいっ！」と怒鳴られた。うるさいとはなんだ。人が折角心配しているのにと、眉を寄せれば、メネルがくすくすと笑っている。

「そうそう、それにね、あれで結構ブラックと仲が良いんだよ」

「良くねーよっ！！」

かしやんっ！ と、今度はいつの間に来たのか、私の隣に立っていたル力はそう怒鳴って、私の前に多少乱暴にティーカップを置く。あの振動で、紅茶が零れていないのが不思議だ。

「急に出てこないでよ。広い店じゃないんだから、ちゃんと歩きなさいっ。それから、何度もいうけど、お茶はお客様から出すの」

「そんなの、どっちでも良いだろっ！」

「良くないよー、ル力。マナーくらい身につけてるでしょう？ ま

だなら、もつと徹底的にブラックにでも躑けてもらえば？」

つんつとそういった私にル力は齒噛みしそうな表情で「やり直せば良いんだろっ！」とカップに手を掛けたから、とりあえず掴まえた。

「勿体無いから、今日はこれで良い」

「っだよ！」

ぷりぷりと怒り露わに踵を返すル力の背に「ありがとう」と付け加えれば「んー」とそっけない返事が返ってくる。その周りをまたナルシルがうろついている。その様子を見ていたメネルがもう我慢出来ないばかりに噴出した。

「本当、仲良しなのね。何しろ貴方に危害を加えた獣族でしょう？
最初は心配していたし、今でも少し気がかりなのだけど、ふふ、
なんだか、家族みたい」

「――……家族だよ」

「え？」

「ル力は家族だよ」

きよとんつとするメネルに繰り返せば、ほわりと胸の辺りが暖かくなる。

ル力は私の家族だ。

この世界に血縁者の居ない私からすれば、そう考えるのはとても自然なことだった。だから迷いなく応えることが出来る。

そんな私を暫らく感慨深げに見詰めていたメネルは、ふつと瞳を細めると「そっか」と優しく微笑んでくれる。宗教画みたいに綺麗で清廉とした姿は流石お姫様だ。

「つと、そういえば、どうしてマリル教会？」

ルカの淹れてくれた既に適温とはいいい難い紅茶に口をつけつつそういった私に、メネルは「時々行くの」と話してくれた。

「週に一度か二度。司祭が“星詠み”をもっと深く学びたいということで、大聖堂から依頼を受けたのよ」

ほら、私暇人でしょう？ と続けて笑ったメネルに苦笑する。

本人の評価がどうであれ、メネルは、国の歴を預かる特別職に就ける数少ない占星術師だ。まあ、その時期以外は暇なのだと、重ねていたけれど。

「普通ならそんな話お断りするのだけど、ナルシルも一緒に構わないというし、あそこには面倒見の良い子どもたちが多いから」
「陽だまりの園の子達だよ。私も時々健診に行くけど、そんな話聞いたことなかった」

別に他意はなくそういった私が、拗ねたとも思ったのかメネルは「ごめんなさいね」と先に謝罪した。

「私は知っていたわ。大抵、シゼを王宮から引つ張り出して行くときでしょう？」

「ちょ、と、待って、もしかして、それ、王宮で有名？」

恐る恐る問い掛ければ、メネルは「ええ」と迷うことなく頷いた。なるほど、だから、回数を重ねることにシゼの諦めが悪くなるのか。さっさと諦めて、仕事の一部に組み込んでくれれば良いものをシゼは相変わらずケチだ。

「それに、レニ司祭の口からも良く聞くから」

「は、何で？」

「え、だって、星の話以外に共通点といえばナルシルのことと、貴方の知り合いであることくらいですもの。話題に上がっても仕方ないと思うわ」

—— …… し、仕方ないか、なあ？

「陰口なんかは叩いてないわよ？」

「そんな心配はしてないよ」

真剣に否定してくるメネルが可愛かった。そんなこと私は微塵も思っていなかったんだけどね？ 笑いつつ、ちらと掛け時計に視線を送る。もう直ぐ夕時だ。

「何か予定があった？」

「え？ あ、ううん。何もないよ」

それを素早く発見されて私は慌てて否定する。

特に予定というわけではないのは本当だし、その程度のことと、二人を追い返すようでは忍びない。そう思ったのに、ナルシルの首根っこ掴まえてきたル力は「ほら」とメネルにナルシルを押し付けて

「おれ買出しにいつてくる。ブラックさん、もうすぐ戻るだろう？」

「っあ、あ、うん……」

間が悪い。

ル力絶対わざとやったんだろうと確信して益々、楽しげに揺れる尻尾掴んでぶんぶん振り回したい衝動に駆られた。けれど、立ち去るル力を他所に、どういうこと？ というメネルからの視線を受け

て、ふうと一息。

「えーっと、ブラックがね、数日遠方に出たの、それで、今日、日が暮れるまでには戻るってことだったから……その」
「それでそわそわしてたの？」

くすりとメネルに笑われてしまった。うつ。恥ずかしくて顔が真っ赤になるのが鏡を見なくても分かる。

—— …… はあ。

第三話：これが私の旦那様（1）

「今、戻りました……と、なぜ喧嘩をしているのですか？」

ルカと食事の準備を私が手伝うかどうかで、激揉めしていたところにブラックがひょっこりと戻った。

「ルカが夕飯の準備を手伝わせてくれないのよっ！」

「だから、今日はおれの当番だろっ！ 邪魔するなよっ。お前が加わったら、手間が倍なんだっ！」

きゃんきゃんっと先ほどから堂々巡りのいい争いを繰り返すと、ブラックは私の肩に腕を回し背後から抱き締めつつ「なるほど」と擦り寄ってくる。

私の家に居るもう一匹の猫はこの黒いので、私の旦那様だ。ふわふわと時折触れる猫耳がくすぐりたい。その効果も合っつか直ぐに怒りは鎮火してしまう。

「では、マシロは疲れている私にお茶を淹れてください」

「え、ああ。うん、もちろん」

私が領けば、ブラックは私からそっと離れてワゴンの上に茶器を用意し促す。

上向きにされたティーカップには既にお湯が注がれていて、ふわりと湯気を上げている。新しくお茶を注ぐだけで出来るって、私が淹れる意味があるのか。

「これで、ル力は思う存分私のために腕をふるってください」

「……今、猛烈にやる気をなくした」

「ふふ、冗談が好きですね」

いつてブラックは笑ってるけど、とても分かりやすい殺気を放出中だ。

ル力は「さ」と何事もなかったように準備を再開した。子どもを脅さないでください。思っても、もうあまり口出しはしない。スキンシップの方法はそれぞれだろう。

きつと、これが二人の関係、適切な距離感なのだと、もう私は諦めた。

キッチンをあとしして、リビングのローテーブルの傍にワゴンを安定させると、私は早速お茶の準備を始めた。

「それで、大丈夫だった？」

かちやりとブラックの前にティーカップを置き、自分の分を片手に隣りへ腰掛ければ、ブラックはいつもどおり優雅な所作で一口口に運び「問題ないですよ」と微笑む。

問題ないというのは、何が問題ないのか微妙なんだけど、気にしたほうが負けなので「それなら良いけど」と私も一口。

そして、ティーカップをテーブルに載せるのを見計らって引き寄せられた。

「ちよつ、ブラックっ」

こめかみ辺りに頬を摺り寄せ、目尻に口付けられて、ぱあっと頬が赤くなり身体中が熱くなる。慌てて離れようとするけど無理。力

の差があり過ぎるし、私も本気にはなれないから。

「まだ、聞いていません。私は今、可愛い奥さんのところへ戻ったのですよ?」

いつて、はむっと耳を食まれ、尚暴れた。

「ちょ、ちょちょ、ちょっと、ブラックっ!」

「はい?」

慌てる私を無視して、耳の付け根とかに容赦なく舌を這わせ口付けてくる。

「くす、くすぐったいからやめ、やめてっ」

「マシロって本当に感じやすいですね?」

可愛い、と付け加えて頬を包まれ舐めるように、しつとりと撫でられる。そのくすぐったさに思わずきゅうっとな目を閉じると、ふふつと色香を含んだ笑い声を注がれ、ようやく解放してもらった。

私の顔は鏡を見なくても真っ赤になっていることくらい容易に想像出来る。

うつつと耳を押さえて声を殺したあと、私は一つ深呼吸。手のひらと甲を交互に頬に当てて、無駄だと分かっているけれど、頬の熱を取る努力をした。

そして、ブラックのほうへ向き直ってにこり。

「お帰りなさい」

怪我がなくて良かったと、改めて抱き付いた。
ふんわりと私を抱きとめたブラックは、優しくそつと髪を撫でる。

耳に届く鼓動はいつもどおりで本当にほっとした。

別にブラック自身が命に関わることがあると思わないけど——基本的に周りへの被害の方が大きいだろうし——やっぱり、顔を見ることが叶わない日は不安に思う。

「でも、また大聖堂が変な研究とかしてたの？」

ソファに深く腰掛けたブラックに体重を預けながら、のんびりと問い掛ける。

ブラックが遠方まで出向くということは、あまり嬉しい話ではないが基本的に大量死が待っている。その原因は色々あるけれど、一昔なら、領土同士の小競り合いが多かったらしい。今は平和協定が全域に巡らされているし、王宮からの監視も厳しいので互いに牽制しあって人が大量に死んでしまうような騒ぎは起きていない。

ということは、時折派手好きな大聖堂——魔術学校。魔術研究所完備施設——学園長が起こす、魔術実験が大きな要因であることが多いのだ。

あの人は「あーんっ、ごめんなさあい。絶対上手くいくと思ったのに」としなを作ってそういう場をあっさり切り抜ける。

いろんな意味で良い迷惑だ。

これまでのことを思い出して、やれやれと息を吐く。

台所からは、良い香りが漂ってきた。

お腹がぐうと鳴りそうだ。なんか家主がここでだらまったりとしていて、子どもに働かせているのはどうかと思うけど、手伝って怒られるのだからこちらとしても複雑だ。

「大聖堂というよりは、今回、流行り病が出たようですね」

私の肩に腕を回しゆるゆると髪を長い指で絡め取って遊びながら、そう口にするブラックに「流行り病？」と問い直した。

「ええ、原因はまだ分かってないみたいでしたけど、結構な人数消えてしまっています」

「それって、大変よね」

「海は渡っていませんし、王都までは来ませんよ」

「んー、そうじゃなくて。原因とか分かってないんでしょう？ 私
も薬師の端くれとして」

原因究明をと口に仕掛けて、ブラックの手がその口をそつと押さえる。何？ と目で問えば、困ったように微笑んだブラックに見詰められた。

「マシロは何もしなくて良いです。こういうことの調査には王宮が乗り出しますよ。マシロがもし、いつも自分でいうように『一般人』であるなら、口出しはしないことです」

につこりと人の揚げ足を取るように告げるブラックに複雑な気分になる。

違うないし、その通りだけど、手をこまねいているというのは性に合わない。そんな私の気持ちを察したのか、ブラックは話を続ける。

「私にそこまでの役目はありませんが、一応、エミルにも伝えておきました。急ぎ、原因の究明に乗り出してくれるでしょう」

そんな面倒があつたので、少しだけ戻るのが遅くなってしまったのです。と締め括って再びぎゅーっと抱き締められる。

ブラックのことだから、これからその病気に罹る人のことを思っ

てというよりは、私を大人しくさせておくためだろうけど、王宮が直接動いてくれるなら問題ないだろう。

現在この国は、三人の王様によって治められている。エミルというのはその筆頭で、私やブラック——はお互いに認めないだろうけど——の友人だ。

第四話：これが私の旦那様（2）

「片付けなんてルカにさせれば良いでしょう？」

「ダメ。一応、当番制なんだから守らないと意味ないの。もう直ぐ終わるから、ルカとでも遊んで待ってて」

夕食の後片付けを始めた私を眺めつつ、キッチンカウンターに体重を預けて、ぶつぶついつているブラックにそう告げればあっさり「嫌ですよ」と返してもらっけれど、それ以上はせつついてはこなかった。

しかし、黙ってくれたものの、次は痛い視線に眉を寄せ

「そんなに見なくても私は消えないし、気が散るし、恥ずかしいから、あっちでお茶でも飲んでるか休んでてよっ！」

私は泡々のついた手を振って、ブラックにしっしつと告げる。
ちよつとつれないことをしてしまったかなと、罪悪感。

至極残念そうに踵を返したブラックの尻尾が萎えている。でも、早く家に帰るためにもさくさく終わらせたいのが私の本心だ。

店は一応自宅兼だったのだけど、結婚してからは、一応辺境の地にある——王都に住んでいるとつくづく思う。本当に何もない田舎だ——種屋の方が私たちが寝起きする場所だ。

こちらの留守はルカに預ける形になった。

今回のように、ブラックが屋敷に居ないときは、私の店で過ごすのが通例。ブラックは常に心配性で、私を一人にしておくのが多分嫌なのだろうと思う。

図書館で学生をしていたときも、大抵は先にあげた今は国とか治めちゃってるエミルとか、そのお付の人、稀代の天才魔術師という偉大な肩書きを持った残念なお父さんカナイ——因みに残念なのは立ち位置と性格——天賦の才を持つ王宮騎士。天使の容貌を持ち不屈な消化器官を持っている——質量保存の法則とか完全に無視、底なし胃袋保持していると思えない——アルファが一緒だった。

あと、メネルとの話にも上がったシゼが居たけど、一緒にたにすると怒られそうだ。

シゼは誰よりも引き籠もり率の高かった少年だ。今は、みんな王宮勤めになってしまつて私だけ離れ離れ。図書館でわいわいやつていた頃を思うと懐かしくもあり、寂しくもある。

「やはり変わりましたか？」

「っ」

物思いに耽つていた私の背後に立ち、そこから腕を伸ばし私の手を包み込んだブラックに、びくりと肩を強張らせ息を詰めた。心臓に悪い。

「——……何か考え事ですか？」

私の肩口に顎を乗せそう囁くブラックに「ううん」と首を振つたけど無駄だろう。ブラックはそんなに鈍くないし、兎角私の機微には敏感だ。

「マシロも、王宮に入りたいですか？」

彼らと居るほうが楽しい？ と重ねられ苦笑する。

「違うよ。そういうことじゃない。私はここが良い」

「無理、していませんか？」

「してないよ。思い出に浸ることって誰にでもあると思うけど、懐かしむだけでそれを永遠に続けたいというのは違うと思う。時間は流れてるんだよ。止まらない。その中で、いっぱい選択してきたんだから、」

「間違っていないですか？」

濡れた手のままブラックは私の身体をぎゅっと抱き締めた。

間違っていない？ と不安げに重なるブラックに、胸がきゅっとする。私は手についていた泡を流して、そっとブラックの手に触れた。

「間違っていないよ。ブラックが私以外を必要としないように、私もブラック以上に大切なものなんてない」

この人は、獣族で、種屋で、世界最強だったり唯一無二の存在だったりするけれど、その内側はとても孤独でとても繊細な人だ。

そして私以外を大切に出来ない人。
自惚れでも何でもなく事実だ。

ブラックは自分すら大切には出来ない。ただ死なないようにしているだけ、それも役目だから。そして何より、私が悲しむし私の命も消えるから。

私たちはそういう関係でもある。

ふつと後ろに体重を預けブラックの腕に頬を摺り寄せて、深い息を吐く。暫し瞑目したあと、ちらと振り上げば目と目が合う。

瞳の持つ吸引力は半端ない……お互いの吐息に触れ合い唇が重な

……

—— …… バキッ

らず。家の中であつてはいけない音が響いた。

「おれがいうのもなんだけどさ。さつさと終わらせるか、おれに代わるかして、出て行けよ。あんたたち」

「ルルルルルカ！ おっおかえりなさいっ！！」

ブラックの腕を振り払って、瞬間湯沸かし器の如く赤くなった私は、微妙に意味不明な台詞を吐いてしまった。

今更だ。

今更なのは分かつてる。

分かつてるけど、やっぱり、子どもの前ですることじゃない。と、私は思ってる。

そして、普通の子どもは

「壁に拳突っ込むのやめなよ……」

そんなことはしない。

「折角お風呂から出たところなのに、汚れちゃうよ？」

仕方がないなという風に続ければ、猫が二匹黙った。あれ？ なんかズレたことをいっただろうか？ ルカは私から顔を逸らし、無言で壁から拳を引き抜きつつ、ぺっぺっと払う。

「そこ、綺麗に直して置いてくださいね。全く、自分で直すのが分かっていてどうしてやるのですか？ 私には理解出来ません」

二人揃って私を無視した。

私は、むっとしつつも作業再開。本当、さつさと終わらせよう。

「ルカ、戸締りと火の始末を」

「分かってるよっ！ うるせーな。ったく、くそーっ！ 面倒臭え！ 誰だよこんな粉碎したのっ」

片付けを終えて、さて帰ろうかなと思ったところでルカに声を掛けると、ルカはまださっき自分で壊した壁の修復に手間取っていた。床に散らばった欠片が、ふわりふわりと浮き、元の場所に戻っている。

「明日の朝食はルカが代わって下さいね」

ずっと私の隣りを通り過ぎたブラックは、そういつてにつこりと壊れた壁に手をついた。その瞬間、ぽつと壁全体が光り一瞬にして壁の穴が塞がってしまった。

「ちょっ！ 邪魔すんなよっ！」

「力を注ぐ場所を間違えています。そんなことではこんな穴程度のことで徹夜ですよ。いくら大量に力があっても、配分と使う先を間違えては時間を食うばかりです。手際、良くなってくださいね？」

にっこり……と、したり顔。

物凄く悔しそうなルカの表情——尻尾も耳も逆立ってる。膨らんでる。威嚇してる威嚇してる。ふ、ふふ——に、ブラックは満足気だ。こちらはとてつもなく大人気ない。

「さあ、余分な仕事をしたので疲れました。ゆっくり湯殿にでも浸かって愉しみましょう」

—— ……寛ぐんじゃないですか？ 愉しむって何を愉しむんですか……。

思わず一步下がりそうになった私の手首をきゅっと掴んで、ブラツクはにっこり。

つかつかと先に歩いて扉を出た。

背後で「二度と帰ってくるなっ！」とか「陰険猫ーっ！」とか叫んでる。あんたも猫だよと心の中だけで突っ込む。やっぱりこの二人は仲良しだよねと思うんだけど……なんて考えていると……

「なんでお風呂に直行なの？」

そして、どうして、自分ではなく私の服に手を掛けているのですか。旦那様。

一応いろんなところから、消えたり出てきたりはお行儀が宜しくないとい私が不機嫌になるので、扉を境目にするのだけど、玄関開けたら家のお風呂場って、ないよね。

「ちゃんと予告はしましたよ？」

「したら良いつて問題じゃなくてね」

「どつという問題ですか？」

私が激不機嫌そうな顔をしているというのに、完全に無視してブラックは鼻歌でも出てきそうな雰囲気で私の襟元のリボンを解き、背に腕を回すとワンピースのファスナーを降ろす。

悔しいから、私も目の前に来たブラックのループタイを引っ張りぬき、シャツに手を掛ける。どうせ、ぶつぶついても無駄に終わることは分かっている。

第五話：愛猫家ですが、何か？

「ねえ、私がブラックの髪洗っても良い？」

簡単に身体を流して湯船にたぶん。

正直一人では持て余すだろうと突っ込みたくなる広さのお風呂だ。黄金とかでは出来てないけど、大理石だ。うちの猫は綺麗好き。猫だけとお風呂好き……なのだろう。

「では私はマシロの身体を洗って良いですか？」

するりと私の腰に腕を回して、自分の膝の上に抱え込みながらそういったブラックに暫らく唸る。唸るけど……。

「良いよ」

そのくらいの価値がある。

仕方ない。

羞恥で頬が染まるのか、お湯の温かさで頬が染まるのか。分からないけど、後者だと思っておくことにする。私が了承すると思っていなかったのか、少しばかりブラックは驚いた顔をしていた。そんな顔をされたら私が物凄く恥ずかしいことを口にしたみたいじゃないか。

口に、した、のかな？

ま、まあ、良い。こほんっ。

そうと決まれば、即実行。

私はブラックの腕の中をすり抜けて、胸元を押さえて身を乗り出す。そして、やっと届く位置に置いておいたバスタオルを引き寄せ、上がると、さあさあと、湯船の淵にブラックを座らせた。ブラックは微妙に複雑そうな顔をしたものの、私の機嫌の良さには敵わない。

ふ……と息を吐き観念したようだ。

シャワーまでは遠いから、手桶でお湯を掬ってそつと掛ける。払ってる払ってる……ぴるるって猫耳がお湯払ってる。耳がひよこつと出ているものだから、ブラックの髪はこの耳の付け根だけ癖が強い。そこがまた、耳と一緒にぺしゃんってなって……なんだか、凄いむずむずする。テンションは直ぐにマックスです。

「はあ……」

思わずうつとり。可愛い。可愛い可愛い可愛い。アルファに動物フェチだといわれても気にしない。いや、もう認めても良い。私の負けだ。可愛すぎるのがいけない。

ああ、駄目だ耳ばかり見てたら手が止まっちゃう。

私はシャンプーを手のひらで泡立てて、ふわりとブラックの濡れた髪に載せて、そつと指を差し込んで丁寧に洗う。

「ねえ、ブラック」

ちよつと落ち着こうと深呼吸。

「……ん、はい？」

興奮気味な私を他所にぼんやりしていたのか、ブラックの返事は少し眠そうだった。

疲れているというのは本当なのだろう。ごしごしと目元を擦って振り仰ごうとするから、そのままの良いよと頭を押さえる。

「さっきの話だけどね」

「さっき？」

「うん、流行り病のこと、どんな症状なの？」

私が問い掛ければ「ああ」と頷き、一応答えてくれる。

「別に大した症状はありませんよ。眠り病なのでしょうかね？ 目が覚めないのですよ。外傷もないですし、苦悶の表情で逝くものもいたようですが、大抵は本当にただ眠っているだけに見えましたね。小さな村が丸々一つ全滅でした。獣が寄るのでそれまでに処理しないとイケなかったため、急ぎといえば急ぎ、ですかねえ」

まあ、放っておいても別に問題ないのですけど。と締め括った。恐いことをいうなど、口にする代わりに、泡のついた手で耳を擦る。

「ちょ、マシ口っ、やめてっ」

本気でくすぐったいらしく、素で嫌がるから止め^やられない。

中に泡が入らないようにするためか、ぺしゃんつと頭に張り付く耳を両手で掴んで左右に引っ張る。軟骨の感触が堪らない。

ぞくぞくする。

ル力は絶対に触らせてくれない。

はあ……可愛い。

くにくにくにくに……手の中で揉んでしまうと、ブラックが肩を強張らせ尻尾を自分の体にぴったりと寄り添わせる。負け犬——というか猫だけど——体勢だ。こうさーんってしている雰囲気、苛めている気分になる。

いや、苛めてる？

違う。断じて違う。これは可愛がっているのだ。

「やめ、て」

声が掠れてますよ。

そんな色っぽい声出されたら、止められない、よね？

耳と尻尾は比較的感觉しやすい場所らしい——私にはついてないから、当然分らない——徐々に前のめりに逃げ出そうとするのがいじらしくて、もっともつと苛めたくなるけどあまりやると反撃が恐い。だから、ブラックが耐えかねて振り返ろうとした瞬間、頭からお湯をかけた。

「マーシーロー……」

「ご、ごめん。あんまりブラックが可愛いから、つい」

冗談が過ぎました。と手を合わせれば、ふっと呆れたように笑い、お湯の滴る前髪をかき上げる。

物凄く色香の漂う図なのだけ……ああ、耳がやっぱり払うのね。ぴるぴるぴる……はあ……ふんわりした気分になる。

和む。癒される。

「ひゃっ！」

つい耳に気を取られていて油断した。

ぐいっと腕を引っ張られて、ブラックの前に膝をつく。片方の足を跨ぎ、私の方が頭一個飛び出す。え、えっと……と動揺してブラックの肩に腕を置き顔を覗き込むと、すうっと瞳を細めて綺麗に微笑まれる。

その妖艶さに、どくりと心臓が高鳴ってしまう。

「それほど、耳が好きなら堪能してください」

私はこちらを堪能するので。するりと、バスタオルの合わせ目から手を滑り込ませる。

「んっ、ちょ……」

「なんですか？」

するすると背中を手が這うと、その動きでタオルがはらりと解けてしまった。ブラックの目の前に裸が晒されて、ふわぁと身体が熱を持ち恥ずかしさに染まる。なんとか、逃げ出そうと身体を擦ったけど、もう既に固定されてしまっているから無理だ。

ブラックは、こつりと鎖骨の下辺りに額を押し付け、そのままぱくりと私の胸を頬張ってしまう。

「……つい、や……」

暖かな口内に敏感な部分を含まれ、ねっとり舌が絡み着いてくる。

お腹の奥のほうからじわじわと上がってくる熱に、声を殺し、ブラックの頭にしがみ付いて上がる息を堪えた。それを宥めるように

回されていた片手に背を撫でられ、ほんの少しだけ力が緩む。

「声、出して良いですよ」

唇を少しだけ離して、ちろりと胸の一番高いところを舐める姿が厭らしく、ざりざりとした舌が皮膚への圧覚を鋭敏にさせ、じわじわと私の目尻に生理的な涙が浮かんでしまう。

そして、視線だけが私に投げられ、見下ろしているのは私のはずなのに、見下ろされ、完全に囚われる。

心地良い拘束感私の気持ちを高ぶらせた…… —

第五話：愛猫家ですが、何か？（後書き）

続きにはR18規正部分があるページも存在します。

有りは下記アドレスです「○○○」部分をパスワードに置き換えて、指定ページにてお楽しみください^^

<http://www11.plala.or.jp/sshappy/been/mugenooo6.html>

パス請求はブログ『ちよこつと広場』の「パス請求案内」を参照ください。

<http://syouseitunarou.seesaa.net/article/184610087.html>

第六話：先に起きた朝は……。

次に目を開けたときには寢室のベッドの上だった。ゆるゆるとブラックの長い指が私の髪を梳いている。ぼんやりと窓の方へと視線を走らせれば外はまだ暗い。少しの間落ちていただけだと、思う。

「……………」

「目、覚めました？」

くすりと微笑まれて、ぱあっと羞恥に頬が染まる。私は、うつつと唸ると、もぞつと寝返りを打って、ブラックの胸に顔を埋める。

「のぼせたただけだよ」

イキ過ぎたわけではなくて、湯当たりしただけ。きつとそう。

「ええ、きつとそうですね？」

可笑しそうにそういつて、髪にふわりと口付けられる。

「マシロは本当に可愛いですね。それにとても艶っぽい瞳をする……」

いつて、少しだけ私を引き離すとそつと顎に手を添えて上向かせ

る。
ブラックの方が、余程色っぽいと思う。その瞳に見詰められると、ときどきと鼓動が早くなり胸が熱くなる。

柔らかく悪戯をするようにそこかしこに降ってくるキスに瞼を落とす、甘い吐息を漏らす。

夜着を着せてもらってなかったから、まだ、そのつもりなんだろうなーとは予想出来たけど。

「疲れてるんじゃないの？」

きっとブラックは一時でも早く戻れるように、こちらを出てからは一睡もしていないはずだ。いつもそうだから、今回だけ違うということはないだろう。

「まだ平気です。ここにはマシロが居るから」
「でも」

と、不安をそのまま口にしようとすれば、口付けで塞がれる。軽く吸って離れると、ふっと優しい目で「平気です」と重ね、見詰められ気恥ずかしくなる。そして、少し不機嫌そうな顔をして「それにしても」と続ける。

「以前はここまでしていなかったんですよ。もう、遠方まで出向くのをやめても良いですか？ やめましようか……一日でもマシロを感じられない日があるのが耐え難いのです」

子どもの駄々のように、そう真剣に口にするブラックに暖かな気持ちになる。私は愛されているのだと喜びに満たされる。

「私はどこへも行かないよ。ここに居る、ブラックが帰ってくる場所に居るんだから、ね？」

くすりと微笑んでそう告げた私に、ブラックは複雑そうな顔をし

て思案気だ。ふわふわとベッドの中で私の素足に触れる尻尾がくすぐりたい。

「マシロって、厳しいですよね」

「そう?」

「そうですよ……」

ああ、もう、しょんぼりしないで。可愛いから。

「そんなに寂しいなら、今、離れていた分取り戻せば良いでしょ?」

そつとブラックの両頬を包み込み、唇を重ねる。ちよっぴり大胆発言だけど、どのみち同じだろうからたまには良いかと、気まぐれにそう思う。

尻尾の先っぽがぱたと私の足を叩く……この、猫……。駄目だ、可愛すぎるのがいけない。

翌朝、閉め忘れた窓から陽光が差し込んでくる頃、私は目を覚ました。私の身体を抱き留めたままの、ブラックの腕をそつとずらして——繋いでいた手は離してもらえなかったけど——可愛らしく眠っている綺麗な顔を眺める。

普段なら絶対に有り得ない。

基本的にブラックは私より遅く寝て私より早く起きる。

そう、遠方に出ていて疲労困憊しているときだけ……このときだ

け、私はブラックの寝顔を堪能出来るのだ。

私の小さなお楽しみ。

遠方で離れるのが嫌だという気持ちも分かる。せめて夜くらい一緒にと思ってもらう気持ちも嬉しい。でも実のところ、一日二日居なくて戻ったとき……

「際限なく私を欲しがってくれるのも、ちょっぴり嬉しいんだよ」

そうつと頬を撫で、ちゅつと額に口付けた。

「……あれ？」

と、動けない。降ろしたはずの腕が再び私に掛かっている。

「では、朝から欲しがっても良いですか？」

ぺろりと鎖骨辺りから首筋を舐め上げられて、慌てて肩を竦め腕で突っ張り胸を押す。その程度では離れたり出来なくて、私はわたたと暴れる。

「ちよっ！　ちよっとっ！」

「おはようございます」

いわれてぐるんつと視界が回転する。

私を簡単に下にして朝から良い笑顔だ。もっとうこう気だるげな、婀娜^{あだ}っぽいところはないのだろうか？　はあと私が嘆息したのも無視して、耳朵を甘く食み、つうつと耳殻を舐める。

くす、くすぐつたいっ！！

—— ……ばきっ

「大人しく寝てなさいっ！」

全く！ 毎回毎回、流されると思うなよっ。

ほぼ八割くらいの確立で流されてるけど……と自己嫌悪に陥りつつ、ブラックをベッドに沈めることに成功した。

今度は私の代わりに枕を抱え込んでごろりと転がって「もう一回くらいしてくれても……」とぶつぶつ零しているブラックにやれやれと呆れる。

するりとベッドから足を下ろし、ふと思い出して振り返った。ブラックの肩口に掛かっているシーツに手を掛けて降ろすと、痛々しい爪痕が残っている。私がお風呂場でつけてしまったものだと思う。

「……ごめん」

肩甲骨の傍に出来た傷跡にそつと触れれば、僅かに肩を強張らせた。そりゃ、痛い、よね？

じりつとにじり寄って、唇を寄せるとくすぐったかったのか、ふつと笑いをこぼされてしまった。

「平気ですよ、っと、平気ではありませんでした」

むくりと起き上がって、がっつりと抱き締められる。

「痛いです。慰めてください、だから、もういっか……いいたい、痛い、痛いです」

懲りないブラックの傷口をぐりぐりした。私は我ながら鬼だと思

う。反射的に解かれた腕から逃れた私は立ち上がり傍にあった夜着を羽織つつ肩口からブラックを振り返る。

ああ、ぶちぶちといいながらぼすりとベッドに戻ってしまった。シーツの隙間から覗いている尻尾の先が器用に曲がって、微妙に物悲しげにばすんばすんベッドを叩いている。

「……………」

負けるな私。

大抵、ここで負けるからずるずるだらしてしまうんだ。分か
ってる、分かってるよ。それにしても小動物というわけでもないの
に、なんであんなに無駄に可愛げがあるんだろう。

可愛い、可愛い、可愛い。

飛びついて、ぎゅってして、ぱくりとしたい。したいけど、

「そ、そんなことしたって、駄目なんだからねっ！」

今日はやった。やってやった。よし。

私は心の中でガッツポーズして、我慢した自分を称える。キツパ
リいい放ったところで、ぴたりとブラックの動きが止まったから計
算だったのだろう。落ちなくて良かった。

ほふつと一息吐いて、私はシャワーを浴びるため隣接したシャワ
ー室へと足を運んだ。

それにしても……戻ったらきつと「遅い」とルカに怒られるだろ
うなー。

朝ごはん作って待ってるかなあ、いや、待ってないな。

きゅっとコックを捻って暖かなお湯を頭から浴びる。気持ち良い。シャワーは気持ち良いのに、つうつと足の間から情事のあとが流れ落ちる。

この感触だけはあまり慣れない。

気持ち悪いとまではいわないけど、気持ち良いものではないことだけは確かだ。一応、そのあとには拭うんだけど、多分奥に残ってるんだろぅなと思う。

でも、こんなここ最近だ。

それまで、こんなことなかったのに……ぼんやりと身体を泡々にしながら思索する。

私の知識不足かも知れないがこちらの避妊法はかなり充実していて、多種多様。色々なものがある。別に興味があつて知るわけではなく、授業の一環で知るだけだ。

あの日の教室での居た堪れなさにはなかった。今思い出しても恥ずかしく身体を小さくした記憶が蘇ってくる。

直ぐに身体から流れ落ちていく泡が排水溝に吸い込まれていくのを眺めつつ、うーんつと唸って、でも、結局答えは落ちてないから『まあ、良いか』で終わってしまふ。

第七話：薬師くデートく騎士

「僕は忙しいんですよ。どうして毎回毎回毎回誘いに来るんですか？」

「シゼと行きたいからに決まってるじゃん。行こうよーねえねえねえ」

月一というわけではないけれど、不定期に行っている”陽だまりの園”健康診断に行くことにした。もちろん、私の気まぐれで。そして、私は医療行為までは公に行えないので、王宮までシルゼハイトことシゼを誘いに来たのだ。

「行きません！ 医者なら王都にいくらでも居るでしょう。どうして、僕のところにわざわざ来るんですか？」

はあ、と、大仰に嘆息したシゼに眉を寄せる。
その動きに合わせて、綺麗な菫色の髪がさらさらと肩口から流れ落ちて、憂い顔を際出させる。女の私から見てもシゼは綺麗だと思う。

人形のようなだ。

黙って作業に没頭しているときなんて、人間とは思えない。アンドロイドとかそんな感じが漂っている。正直、余程の顔見知りでないとは声は掛け辛いと思う。近寄るな。声を掛けるな。オーラがびしびし出ているから。

まあ、私は微塵も気にしないけどね。

「そんなのシゼが好きだから決まってるでしょ。私はシゼと行きた

いの」

「っ！」

もう、我が儘いわないでよつとシゼの腕を掴みぐいぐい引つ張る。どんなに人間離れしたもやしっ子に見えてもシゼは男の子だ。自分で動く意思がなければ梃子でも動かない。顔を真っ赤にして「行きます」と再度断られた。

「それからっ、す、好きとか、簡単に口にしないで下さい。僕は」
「大嫌いなんだよね。分かってる。よく分かってるよ？」

どういうわけか、私は昔からシゼに嫌われている。気にしないけどねっ！ でもちよつとは傷付いている。自然と眉間が狭まり、唇を尖らせてしまうのは仕方ない。

「むー、いっとくけど、エミルには許可を取ってあるんだよ？ シゼの都合がつけば、いつ連れ出しても構わないっていわれてるんだからね」

シゼは王宮勤めの医師の中でも最上級職。陛下付きのお医者様だ。そんな彼をひよいひよい王宮から引つ張り出しているのは、怒られてはいけないと思ってエミルに話をしたら二つ返事で「良いよ」と返ってきた。エミルも引き籠もりまくりのシゼを心配しているのだと思う。

面白がっているようにも見えたけどきつと気のせい。

「つきませんっ！ 都合悪いです、回れ右して帰ってください」

「……引き籠もりめ」

「なんですか」

睨んだって恐くないよーだ。もうシゼには睨まれるのも嫌われるのも慣れっこだ。

「別にー。折角、レーズン入りのパウンドケーキ用意したんだけどなー、今からなら丁度終わったくらいがお茶の時間だよねえ」

「べ、別に僕は食べ物に釣られたりしません。アルファさんじゃないんですよ？」

「僕がどうしたの？」

二人できゃんきゃんとやっているところに、突然後ろから腕が伸び絡み付いてきたものだから、二人揃って肩を強張らせた。

「マシロちゃんっ。僕、今日非番なんですよー。デートしましょう、デート！ こんな薬品臭いところに籠っていると、シゼみたいに引き籠もりで陰気になりますよー」

「――……」

「ア、アルファ、そ、それはいい過ぎなんじゃないかなー？」

ぎゅうぎゅうと私の首筋に抱きついて頬を摺り寄せてくるアルファに、私も一応は注意する。シゼの青筋が立つてる気が、しないでもない。折角、ケーキでつれると思ったのに、これはますます臍を曲げてしまいそうだ。拗ねると面倒なんだけど、なあ。

「で、マシロちゃんは何してたんですか？」

「ええと、シゼを誘ってマリル教会、というか、陽だまりの園にいつてから、お茶でもと思って誘ってたんだけど」

「えー、シゼとデートですか？」

「違いますっ！ 大体僕は行くななんていつてません」

「って、いつてますけど、それでもシゼを運ばないといけないんですか？」

……ん？

今なんか不穏な台詞が混じっていたような気がする。

私は内心疑問符を浮かべながらも「そうなの」と頷いた。シゼが警戒心を露わに、すつと一歩下がる。けど、相手は紛い形にも王宮騎士。しかも陛下付きのアルファに敵うわけもなく、あっさり担がれる。

「ちよつ！」

「ア、アルファっ?!」

シゼが声を詰めるのと、私が驚きの声を上げるのはほぼ同時だ。それなのにアルファは、にこにこといったもと代わらない笑顔で「さあ、行きましょう」と踵を返した。

年は私やアルファよりも下ではあるけれど、シゼももう立派な青年だ。軽いわけないんだけど、アルファは体格こそ小柄に見えるのに力持ちさんだ。なんかこういう光景ずつつと前にも見たことあるような気がする。シゼって担がれ易いのかな。

研究棟を出るまでに、シゼは「行きますから」と約束させられてアルファから解放された。物凄くやつれている。シゼのほうが病氣みたいに見えなくもない。

「最初から、素直に付き合えば良いのに。白月の姫が直接お誘いに寄ってくれるのなんて光栄だよー？」

にこにここと、結局自分も着いてくることにしたのだろうアルファがそういつて「ね？」と私に微笑むけれど、王宮に出入りさせてもらってはいても、私は民間人だ。苦笑して首を振ったけどアルファ

は見てなかった。

大丈夫。慣れてますよー、アルファは人の話を基本的に聞かないお天気屋さんだ。

「嫌ですよ……マシロさんが容赦なく来るから、凄く嫌なんです」
「あ、メネルに聞いたよ。有名になってるんだってね？」

くすくすと笑えば、知ってるなら自重してくださいっ！ と物凄
い恐い顔をされた。もともと美人なだけあって、凄むと迫力がある
と思う。思うけど「嫌だ」とにこり。

シゼは私を嫌い嫌いで通すけど、私はシゼが好きだ。
構いたくて仕方ない。

だってシゼの反応は一々大げさで面白い。多分、私と同じ理由で
アルファも絡むんだと思う。

私の腕に腕を絡めていたアルファは急にその腕を引き、ぴとっ
とくっ付いてくるとにこにこたくさん通りに並んでいる露店の一
つを指差した。

「ねえ、マシロちゃん、アイス食べませんか？」

「食べ歩きは駄目だよ。お行儀悪い」

「えー、露天の食べ物なんて食べ歩くためにあるんですよー」

いってふらふらとアイスとクレープを売っている露天にアルファ
は誘われて行った。

待とうかと思ったけど、無視してシゼが歩いていくのではたばた
とそれを追い掛ける。アルファのことだから追い付くのもきつと直
ぐだ。心配はいらない。

「はい、マシロちゃん。あーん」

本当に早く戻ってきたアルファの声につられて口を開けると、スプーンで掬ったアイスが放り込まれる。ひんやりしゃりつとした食感が口内に広がって、いちご味だ。

「美味しい」

「ですよ？　僕この間あそこの話し聞いて絶対マシロちゃんと食べようと思ってたんですよ」

にこにこつとご機嫌な声でそう告げるアルファに、ありがとう、と答え隣りを見れば、アイスは三段重ねだった。お腹壊さないようにね。

「シゼもいる？」

私の反対隣りを歩いていたシゼに同じようにスプーンを向けると、いりませんっ。と赤い顔してきっぱり断られた。

シゼ甘いもの大好きなのに……。
変なの。

仕方ないので、マリル教会までの道のり——王宮から歩くと一時間以上掛かる——アルファと仲良くアイスを食べながら向った。

第八話：本当のお姫様

そして、白壁に包まれた青空に映える教会。

白月の使者、聖女マリルから与えられるという美しいときを信仰対象とするマリル教会に到着して早々。

「主っ！！」

—— …… ガバツ！

「ぐえっ」

私の目の前は真っ暗になった。

「久しいなっ。文が届いてから首を長くして待っていた！」

姿を見なくても——見る余裕もなかったが——誰かは分かる。

私と、こともあるつか主従契約を結んでしまっているハクアという白銀狼だ。通例ならば寝食を共にする仲であるべきらしいけれどわけあって——大型犬を二匹も飼うスペースはないという、リアルな理由——ハクアはマリル教会で生活している。

基本的には、犬の姿——正確には狼——で居るはずなんだけど、どういうわけか、決まって私を出迎えてくれるときには人型で熱い抱擁をしてくる。

「……しい」

うごめけば「なんだ？」といって、大きな体を屈めて私の顔を覗き込んでくる。

少しつりあがった鋭い瞳は、左右違う色をしている金銀妖瞳だが、その明るい色を曇らせて心配そうに私の顔を映している。

「苦しいっていつてるの。げほっ」

私は喉元を擦りながらそういつて苦笑する。
大きな形なりをしてそんな顔されたら怒る気が失せる。

「すまない。しかし、主が華奢なのも問題だ。しっかりと食事は取っているのか？ このようにいつまでも可愛らしい姿では、誰に食べられても」

「誰も食べないから」

ハクアは基本獣だけに、基準が微妙だ。

直ぐに人のことを食べようとする。主なのに。食用だと思われるのだろうか。

——……はあ。

「そうか？ いつも美味そうだと思っているが……」

味見をしても良いか？ と鼻先が触れ合う距離に近づいてくる。

私も下がれば良いのだけど……腰を取られ、完全に固定されている。

「死にたいの？」

もちろん。私がいったわけではない。

きらりと陽光が反射すれば私の顔が鋼に映る。綺麗に磨き上げられた片手剣は切れ味も抜群そうだ。反射的に身体を反らしたハクアは「小さな騎士も共にしていたのだな？」と喉の奥で笑う。

「あんたがデカいんだよっ！」

確かにハクアは二メートル超える長身だから、普通に考えてデカイ。

そして、アルファは私と十センチも変わらないくらいだから、騎士にしても男の子にしてもちよっと小柄だ。私からすれば、可愛らしくて長所でもあると思うのに、アルファにとっては劣等感を刺激する部分以外に他ならないらしい。

「大体、マシロさんはご主人のある身なんですよ。雑婚のようなまね」

「――……」

とても静かにしているように見えたシゼの発言に、私たちは思わず無言でシゼを見た。シゼは集まった視線に、少しばかり萎縮して「なんですか？」と強張っている。

「いや、いうにことかいて雑婚って……」

「一番まともなことってはいえると思うけど、一番恥ずかしいことってない？」

「心配しなくても良い。白銀狼は、多妻制だ。それに私と主はそのようなものより、もっと深く近い関係だ」

もう、どこを否定して良いか微妙過ぎる。

再び私との距離をゼロにして頬を摺り寄せてくるハクアにがつくりと肩を落とす。

「申し訳ないけど、私は人間で、しかも多妻制なんてものが通る身分でもないんです」

全く。

エミルのような王族は色々な見地から多妻制だ。けれど、私は民間人であるし、それに何よりそんなものを容認できるほど、心広くない。

きっと嫉妬心で死んでしまうだろう。

「主は遠慮深いのだな」

心底感心したという風に口にしたハクアを見てみると、本当に白銀狼は頭が良いのだろうか……些か疑問に感じる。

「兎に角、離れなよ。今日は僕とデート中なんだからねっ！」

そんなこと了承したつもりはなかったんだけどな。アルファは既にそのつもりだったんですね。

「連絡してあるのでしょうか？ 僕、先に陽だまりの園の方へ行きま
すから、荷物貸してください」

心底呆れたように溜息を吐いて、冷静にそういったシゼは、私の腕から診療バッグを抜き取ってさっさと建物の中へと入っていった。その後姿を見送った面々はようやくと落ち着きを取り戻した……
って、私は最初から冷静だよ。違うのは、目の前の狼さんだけです。

「ハクアもそろそろ本当に私の身体を離してもらえると嬉しいんだけど……」

「気にしなくて良い」

私が気にするんだよ。このワンコさんめっ！

因みにふさふさ尻尾と耳は残っている。今激しく振られているのはハクアの尻尾だ。とてもご機嫌らしい。

「私またシラハに射殺されそうな目で見られるのは嫌なんだけど」

シラハは、ハクアの奥さんだ。

同じ白銀狼で人型を得ると、大柄のモデルさん系の美女だ。肉感的な彼女に比べれば確かに私はお子様で、美味しそう程度のものだろう。

「大丈夫だ。あれにはちゃんといいい聞かせておこう」

いいつつも一応私の体から力を抜いてくれる。

紛い形にも私はハクアの主様なので、私の命令は基本絶対だ。聞いて貰っていない気がしないでもないが気にしない。

そして、それが出来てなくて大揉めしたのは記憶に新しい。

「レニさん奥に居るの？ 挨拶させてもらいたいんだけど」

ようやく解放されてハクアに案内を頼めば、こちらだと、踵を返した。

そのときには既に元の白銀狼の姿に戻っていた。

風になびく銀の毛並みはとても美しい。

本来住処にしているはずの雪山でその姿を見ればさぞかし、雄大で優美なものだろうなと思ひ浮かぶのだから、わざわざ出迎えに人型を取るのか疑問だけど、ハクアの心は私には計り知れない。

—— …… コンコン

木戸を叩けば、中からどうぞ。と聞き慣れた声が掛かる。
ハクアには先にシゼの手伝いを頼み、私とそれに引っ付いてきた
アルファがその扉を開いた。

「こんにちは、レニさん。お約束通り……って、メネル」

その先には、大きな平台の上に沢山の資料を山と積んで向かい合
っているレニさんと、メネルの姿があった。二人とも私たちの訪問
に、腰を上げ、にこりと迎えてくれる。

最近良く会うね、と歩み寄って机の上を見れば星図が所狭しと並
んでいた。本当に本格的に星詠みを勉強しているみたいだ。レニさ
ん意外と勤勉。

「卓上だけでなく、星見会でもすれば良いのに」

特に興味があったわけじゃないけど、何でも本物を目の前にして
やるほうが効率が良いし、頭にも入ると思う。ぺらぺらと本を捲り
つつ、何の気なしにそう口にすれば、メネルとレニさんは顔を見合
わせて肩を竦めた。

私は何か的外れなことを口にしてしまっただろうか？

まあ。的を外すのは私の十八番だ。

二人が説明してくれるよりも早く、並んだアルファが口を開いて
くれる。

「無茶いっちゃ駄目ですよ。メネル様は正真正銘のお姫様ですよ。
それがそう簡単に夜の外出を許されるはずないでしょう？ 大掛か
りになりますよ。今だって、ここまで来るのに僕の顔見知りが三人

は居ましたよ。この調子なら裏にも居るでしょうから……」

「え、ええっ?!」

素直に驚いた私に、アルファは私の背中から抱きつきながら「もう、マシロちゃんてば可愛いっ!」と茶化す。

「同じ“姫”でもマシロちゃんとは違います」

「まあ、私がするっていえば止める人いないよね」

自覚症状あります。

ブラックも良い顔はしないだろうけど駄目だとはいわないと思う。そういうところは放任主義だ。

「大人数になるという時点では、変わらないと思いますけどね」

とレニさんがくすくすと笑い、その際には是非参加させてください。と付け加えた。

でも、そっか……気軽にふらりと立ち寄ってくれるから、忘れがちだけど、この間だってきつと外には警護の人たちが居ただろうし、メネル。お姫様、なんだよね。

「それは機会があればということにして、今日もシゼを引っ張ってきたの?」

「あ、うん。もう先に診てるからって、陽だまりの園の方へいつてくれたよ。だから、私が挨拶に」

「僕はマシロちゃんとデートのために」

いや、もう、それは良いから。がつくりと頂垂れるとメネルが上品にくすくすと笑う。

「アルファは非番なのですね？ お兄様が拗ねるわよ」

「えー、でも、エミルさんのほうがよくちよく姿消してるから、絶対ずるいと思います」

ねえー。って私に話を振られても困るけど、確かにエミルはちよこちよこ私のところにも顔を出してくれている。多分、近衛兵とかついてない。王陛下は抜け出すのがお上手だ。

「では、ナルシルのことも頼もうかしら。レニ司祭、時間も過ぎていますし、今日はこのくらいで」

と微笑んだメネルに、レニさんも頷いて進み出ると扉を開いた。

第九話：小さな悪魔たち

「アルファ、手伝う気一切ないね？」

陽だまりの園の園庭に植えられている大きな木の枝に登って、高みの見物をしていたアルファに声をかければ、悪びれる風もなく大きな欠伸を一つ溢して「僕、子ども苦手なんですよ」とぼやく。

ほう、そうですか。それにしても、そんなところによく器用に乗っかってるよね。

「子どもって小さくて弱いでしょ？ 力加減が良く分からないから」

ぼんやりと、きゃあきゃあ走り回っているちびっ子たちを眺める。確かに、アルファからしたらそうかも知れない。因みにシゼも小さい子は苦手だろうなと思う。健康診断なんて、みんな元気だから直ぐに終わってしまうのだけど、そのあとの「遊ばー！」攻撃が半端ない。

そして、断れないシゼが悪い。

今現在も、女の子たちに本を読んであげていたのに、それに退屈した男の子たちに襲われている。文字通り襲われている。男の子の遊びは半端がない。その相手はどう考えてもシゼには不向きだ。気の毒に。

そのお陰で私は見物組みに入っていられるわけだ。

「ナルシル王子……いつの間にか王女になってますけど、馴染んできますね」

よいしょつと木の枝から飛び降りたアルファは、私の隣に立って小さな女の子たちと遊んでいるナルシルを見たあと、レニ司祭とメルに視線を泳がせる。二人とも子どもが好きなのだろうなと直ぐに分かる穏やかな雰囲気だ。

「かなり身分違いだとは思いますが……。司祭と姫様結婚すれば良いんですよ」

「は？」

あまりに突飛な提案に私は驚いた。

でも、アルファはそのことに気が付くこともなく、ぼつぼつと続ける。

「エミルさんが、うんとはいわないと思いますけど。そうすれば、マリル教会ももっと磐石なものになるでしょうし……そうすれば、もっと潤ってここも充実させられる」

「政略結婚っぽくない？」

「そうですね？ 僕はそんなに鋭くないですけど、嫌いあってるようには思いませんけどね」

いわれてから改めて見ると、絵になる二人だ。

この清廉として高貴な場所に溶け込んでいる。お似合いといわれれば、そうだと思うけど……ちらりと、視線を外したら、アルファがいていた警護の人たちが目に付いた。

色々とハードル高そうだ。

確かに、マリル教会は王都でも主要施設とはなっているものの、運営状況は未だに篤志家の方たち——主に陽だまりの園の出身者——からの恩恵で成り立っている。そのお陰で、以前のような大きな

事件があつたにも拘らず、ここは持ち直した。

その必要性をみんな認めてはいるけれど、不安定さは否めない。

そんなところに、大切な妹君を嫁がせる気に、エミルになるだろうか？ 本人たちの希望が強ければ、押されそうだけどそれがないと多分無理だろうな。

エミルは、彼女の妹の件があつてから、以前よりもずっとメネルを可愛がっている。もちろん、甥っ子のナルシルに対してだって伯父馬鹿だ。

あまり、王宮に行っていないハズの私が感じるくらいだから、アルファたち側近はもつと如実に感じているだろう。

あの二人、本人たちはどうなんだろう？ ナルシルはもちろんレニさんにも懐いてるけど、ね。

そんなことを考えていたから、今日の帰りはいつもより遅くなつてしまった。

お店まではメネルの馬車で送ってもらい、みんな王宮に帰るので一緒のはずなのに、シゼもアルファもうちで降りてしまった。一緒に遊んで帰ると騒ぐナルシルを宥めるのが大変だった。

「シゼは持つて帰るんだよね。今、詰めるから待つてて」

「僕は食べて帰りますー。ルカ、お茶淹れて」

どやどやと家に帰ってきた私たちにルカは本当に苛々としていたけれど、放置しても大丈夫だろう。まだ、剣だけの争いなら、アルファの方が手練だとブラックがいていた。

揉めても、適当に解決してくれるだろう。

私はさつさとキッチンの奥へと入り、シゼのお持ち帰り用のパウ
ンドケーキと、今食べる分を用意していた。そこへ、ルカがぶつく
さいいながら入ってくる。

「私やるのか？」

「んー、ああ。いや、これは良い」

ほりほりと頭を掻きながらそういつてティーセットの準備を整え
る。

ルカはポットに茶葉をいれたところで、ふと切り出した。

「おれ、暫らくここ空けて良いか？」

「ん？ もしかして、教団に帰るの？ でもこの間報告に戻ったば
かりでしょう？」

ルカの台詞に問い返す。

もともとルカは蒼月教団というところに属していて、そこで次代
の種屋になるべく教育を受けていた。閉鎖的な環境では駄目だと――
何よりブラックが早々代替わりをさせるなんて、あつてはならな
い――ということで、定期的な報告と、ブラックの監視下という約
束でルカは外に出ている身だった。

かちやりとルカがお茶を準備していたワゴンに、ケーキ皿を載せ
ながらルカの顔を覗き込めば、そうじゃなくて、とっしだけ頬を染
めて私から視線を逸らすといい洩る。

ルカにしては珍しい反応だ。

良し悪し関係なく何でも口にしてしまうのがルカなのはどうした
んだろう？

「少し、調べたいことがあるんだ。図書館に籠りたい」

「夜は帰って来るんでしょ？」

「ん、あー、でも飯は食べといて」

「う、うん」

私が曖昧に頷いたのを了承と取って、ルカは「じゃ、そういつとで」とワゴンガラガラと押してリビングへと出て行った。

「なるほど、ではルカは戻らないんですね？」

「戻るとはいつてたよ。遅くなるみたいだったけど……でも、大丈夫かな。迎えに行ったほうが……」

変な時間にケーキとか食べちゃったものだから、夕飯は簡単に済ませてブラックに今日の話をしていた。本当なら、ここから一人が出るようなことは許されていないとレムミラスさん——現在の蒼月財団の財団長——に怒られそうなところだけれど、そんなことより、子ども一人で行かせてしまったことが気になる。

「ふふ。子どもといってもルカでしょう？ 心配いりませんよ。ああ、でも、何かあったときには相手の方が心配ですね。まあ……そのくらいの頭は働くでしょう？ 何かあっても揉み消せば問題ありませんよ」

物騒なこと口にしないでください。

ブラックはのんびりとティーカップに唇を寄せながらそういって肩を揺らす。笑い事じゃないのに。

「それで、マシロは何をしているんですか？」

「サンドイッチを作ってるの。ルカの夜食。置いていけば気が付くだろうし、頭使ったならお腹もすくだろうから」

「放っておけば良いのに」

カウンターで黙々と作業していた私にブラックはそういったけれど、いっただけで実際に止めようとはしない。私のやることに、興味は示しても、余程のことがない限りブラックは止めない。

第十話：面倒なお願い

翌朝、戻ってくるとキッチンカウンターに置いておいたサンドイッチはなくなっていた。多分、一度戻ったんだろうなと思うけど、姿はなかったから確認しようがない。

私をここまで送り届けたあと、ブラックは来客があるからと種屋のある辺境に戻った。

私はそのあと日課である店内清掃と、温室の管理をしたあと店の扉に掛かっているプレートをオープンにする。店番が居ないから、暫らくはのんびりとした時間をここで潰すしかないだろう。

本を読んだり、ぼつさりお茶したり、もしかして、これを自宅警備員というのだろうか？ 午前中の来客はゼロだった。暇すぎる。

午後は…… —

「こんにちはー」

忍んでいるようで全く忍んでいない、王陛下が顔を出した。

これもいつものこと、私の日常の一部だ。いらつしゃいと迎え入れれば、目深に被っていたフードを取る。綺麗な空色の髪が室内灯に煌いて相変わらず見目にも美しい王様だ。

「抜け出して良かったの？」

「ん？ 今日の仕事は終わったから」

僕の中では……と聞こえた気がする。

大体、こんなお茶の時間に仕事終わったーといえるわけもなく。十中八九、こそりと抜けてきたのだらう。三人も実権を握っている人が居るというのに、どういうわけか、宰相閣下に愛されまくっているエミルが常に一番忙しい（らしい）私も、その宰相閣下の深いエミルへの愛情は常を感じているので、納得。あまりにも可哀想なので、お迎えが来るくらいまでは休憩させてあげることになっている。

「ここで良い？ お茶でも淹れるよ」

私は立ち上がり店の隅にある席を勧めてお茶の準備を始めた。

「何か手伝おうか？」

「うわっ」

てつきり席についているものだと思ったエミルが直ぐ隣りに居て、突然声を掛けるから持っていたティーカップを破壊してしまった。シンクの中で良かったけど、お気に入りだったのに。ちよっぴり残念。

「ご、ごめん。火傷しなかった？ 指とか切ってない？」

「うん、平気」

「驚かせるつもりはなかったんだけど。ああ、危ないから、僕がやるよ」

いつて欠片に伸ばしかけた手を掴れる。

このくらいのこといつものことだから平気なのは本当なのに、私の周りはいつも私に対してとても過保護だ。大丈夫と重ねたところで、エミルは聞きはしないだろうから、そこはお願いして私は新しいティーカップを引っ張り出す。

「これ直す？」

「うっん、鉢の底にでも敷くから良いよ」

物は壊れるものだ。どれだけ木っ端微塵になっていたとしても、ブラックに頼めば直すことは出来るだろうけど、そこまでする必要はない。

「でも、気に入ってたんじゃない？」

私の返答に申し訳なさそうな顔をしたエミルは、そういつて「本当に構わないの？」と重ねる。私はその台詞に小首を傾げた。

「まあ、そうだけど、良く分かったね？」

「え、だって、マシロこのカップで良く飲んでるよね」

につこりと微笑んでシンクの隅っこに大きな欠片を集め、細かいものは濡らした新聞紙でざっと集めながらそういったエミルに苦笑する。

相変わらず良く見ていてくれる。そして、作業も手馴れている…

…王様なのに庶民派だ。

でも、気に入っているとはいえ、最初は八客セットだったんだけど、私の不注意で既にいくつか割れてしまっているの今更一つ直したところだというのもある。

重ねるけれど、物は壊れるもの。うちの人間はこれに関してとても疎いから、私は極力そのままで良いと思っている。新しくするにも良い機会になるしね。

「それにしても、相変わらず疲れてるね？」

淹れなおしたお茶を出したところでそう告げれば、エミルはなぜか謝った。私が首を傾げれば微笑んで続けてくれる。

「見抜かれるようじゃ駄目だね。もう割りと色々慣れたんだけど、最近ちよつと、ね」

「そういえば、ここ最近あまり来てないよね」

私も頻繁とまではいわないがそこそこ王宮には出入りするるので、全く顔を見ないというわけではないけれど、以前はほぼ毎日顔を出していたのに——それもどうかと思うけど——最近は週に二度三度といったところだ。

ということは甘いものが良いかなと、お茶請けにはチョコレートを添えてみた。

一国を纏めるのだから憂うことも多いのだろう。

私には理解出来ないことの方が多いからあまり詳しくは掘り下げない。そんな私の気持ちを察したのか、エミルは優しい笑みを浮かべて、ふわりと私の頭を撫でってくれる。もう私は子どもではないから、それを求めるわけではないけれど、エミルにそうされるのは心地良い。

そして、エミルは話題を変えた。

「ルカは居ないの？」

「あーうん。ちよつと出掛けてる。夜には戻るけど、ルカに用事？」

そんなわけないと思いつつ、一応聞いてみると、エミルはまさかと首を振った。そして、ただ珍しいなと思ったただけだと続けてくれる。確かに珍しい。それに……

「ふふ、眠いなら上使って良いよ？ 今朝も早くから起こされたくち？」

話しながらも、ごしごしと目を擦り紅茶をぐくんと流し込んでも駄目なような、エミルの様子に思わず笑いが零れる。

「でも、やっと抜け出してきたのに」

やっぱり抜け出したんだね。

「ちゃんと起こしてあげるから」

結局、私はエミルを二階へと連れて行き書斎のカウチソファーに寝かせてあげた。寝室でも構いはしないけれど、まあ、妥当かと……いや、王陛下を寝かせるには不躰すぎるけど。

「あ、そうだ」

カウチの肘掛に背中を預け足をソファに投げ出したところで、エミルは何かを思い出したようで声をあげ私を見た。私は寝室からブランケットを持ち出してきて、それをエミルに掛けながら促す。

「マシロにお願いがあっただ」

そう切り出したのに、続きが告げられるまでの間が長い。私は「何？」と首を傾げ、エミルの腰辺りにちょこんと腰掛けた。

「その、えーっと、物凄く面倒だと思うんだけど」

「うん？」

「そのー……マシロに会いたって人が居るんだ」

ちらりと私の顔を見て直ぐに逡巡する。会いたい人……多分、女性なのだろう。でも、エミルつながりってことは上流階級の姫だろうから、私に、だろうか？ その疑問をそのまま投げれば、エミルは、ちょっとだけ唸って。ごによごによと答えてくれた。

「マシロは、マシロなんだけど、ご指名は“白月の姫”だよ」

「……えーっと、どこかで会ったことあるんじゃないの？ 社交界とか社交界とか社交界……私あんまり顔出さないけど、時々はあるよ？」

「うん、普通なら会っててもおかしくないんだけど、深窓の姫らしく屋敷から出ることもなく、外界と遮断されたところで生活していたらしいんだ」

それは簡単に引き籠もり生活の長いお姫様と取って良いのだろうか？ まあ、大事に大事にされてきたお姫様なら、そういうのもあるのかもしれない、しれないけど……。

「なんで？」

「う……巻き込みたくはないんだけど、ずーっとはぐらかしてきてるんだけど……うん。その、お断りをさせてもらったときにね、白月の姫の話に触れないわけに行かなくて、それで、そのお……」

「恋敵に是非会いたいと？」

「う、ん……ごめん」

本当にとばっちりだ。すっぱりきっぱり断って良い勢いで私に係ない。

「私、関係ないよね？」

「——……うん、ごめん」

俯くと長い睫毛がふると震える。大きな身体してそんなに小さくならなくても……そんなしょんぼりされてしまうと。

「良いよ」

と、いつしかないと思う。仕方ないな、そう思つて了承すれば「本当っ！」と勢い良く私の手を握り、この世の春というような表情を見せてもらった。そんなに喜ばしいことではないと思うけど……ま、まあ、良いんだけどね。

勢いに押されて苦笑すれば、エミルは握った手を額に押し付けて「ありがとう」と感謝する。別に私は、大した人間ではないのだからそこまで恐縮する必要はないと思うのだけど。大体エミルは王様なんだよ？

「絶対、迷惑が掛からないように配慮するから」

「うん、宜しくね」

「あ、出来ればブラックには」

「……嘘は吐きたくないから、聞かれたらいうけど、聞かれない限りはいわないよ」

苦笑して告げれば、エミルはそれで十分だよ。と微笑んだ。まあ、ブラックは私からいわない限り、そう突っ込んでこない。ほぼ、確実に伏せられるだろう。

「ドレスコード的な正装したほうが良いの？」

「え？ ああ、良いよ。うちで用意するから。マシロは来てくれただけで」

結局、普段着というわけにはいかないんだね？ ブラックに伏せるってことはきつと既婚者のな部分も出来れば伏せるってことだろ

うし、息苦しい時間になりそうだと思いつつも、安堵した様子を隠そうともしないエミルに微笑ましくなる。
まあ、良いか。

第十一話：宰相閣下はご機嫌斜め

起きてるとかぶつぶついつてたけど、やっぱり疲れていたのか、それとも安心したのか、横になっただけなら早いうちに眠りに落ちてしまった。

静かに眠るエミルの髪をそつと撫でてから、私は店へと戻る。ベルも鳴らないし、お客さんが来た気配もない。

今日は一人も来ないのかなーっと。

夕日がやんわりと差し込んでくるくらいになっただけ、そろそろ店仕舞い。

結局今日は一人だけだった。常連のおばあさんが眠りが浅いからとハーブティーを買いに寄ってくれただけ。まあ、薬屋なんて繁盛しないに越したことはないだろう。

私は自分をそう納得させて深く頷く。

私が扉のプレートを朝返したのと反対に返したところで「こんにちは」と聞き慣れた声が掛かった。

「……珍しいですね？ 直々にお迎えですか？」

顔を上げればラウ＝ウィルこと噂の宰相閣下の登場だった。

今日も今日とて一糸乱れることのない優しげな萌黄色の髪をゆるりと束ね、整って美しい顔——若干表情に乏しい——にはモノクルを宛がっている。

「これでもゆつくり来たんですよ？ 随分愚痴っぽくなっていらっしやったので」

くすくすと優麗な笑いを溢しているけれど確実にこの人のせいなのは分かる。

「二階で寝ているんで、起こしてきますね。ここで待っていてください」

店の中に通して、私はぱたぱたと二階へと駆け上がった。

エミルは寝返りを打っていただけでまだ静かに眠っている。起こしてしまうのは少しばかり申し訳ないような気がするけど、仕方ない。

「エミル、エミル……。起きて」

端っこに腰掛けて、そつと肩に手を掛けるとゆっくりと揺する。何度目かの声掛けでようやく「ん」と目を覚ましてくれた。

「おはよう……」

「うん、おはよう」

ぼんやりと片方の手について、身体を起こすエミルにやっぱり可哀想な気になってしまふ。と、思ったのも束の間……――

「ああ、起きて一番に聞く声がマシロの声で、見える姿がマシロなんて凄く幸せ」

そういつてふわりとエミルに抱き締められた。

「マシロー、やっぱりさ、王宮に入る気ない？」

「ごめんね、私はここが気に入ってるの」

まだ、半分くらいは夢の中なのか少しだけ夢見心地といった雰囲気の色だ。

そして、もう数え切れないくらいの王宮へのお誘い。確かに、お客さんの殆ど居ない薬屋なんてさつさと畳んでも問題ないかもしれない。かもしれないけど、それでも鼻肩筋がいてここしか頼れない人もいるわけだから、私はここを離れられない。

分かってくれているけれど、エミルは時々こうやって我が儘を溢す。

「え、えーつと何、かな？」

痛いくらいのエミルの視線を受けて、びくびくと問い掛けると、エミルは可愛らしく首を傾げて「うーん」と唸る。目は覚めたのだろうか？

「マシロ何か変わったことあった？」

「ううん、特にないと思うけど」

「そう、かな？ なんだろっ」

何か思うところがあるのか、エミルは私と向かい合ったまま、私の手を取ってそこへ頬を寄せながらマジマジと私の顔を観察する。物凄い恥ずかしいので程ほどにして下さい。

ふわふわと頬に熱が上がってきたところで、気のせいかな？ と微笑んで手にしていた私の手にそっと口付けて立ち上がる。

「マシロが可愛いのはいつものことだよね」

えーつとありがとう、で多分良いんだよね？ 思いつつそれを口にするまでに待ちきれなかったラウ先生が書斎の扉を開いた。

「そんなにお気に入りなら無理にでも連れ帰れば宜しいじゃないですか。陛下」

民は逆らいませんよ。と不穏なことをいって肩を竦める。

「気持ちが欲しいなら、その御身が欲しいなら、薬でも使えば宜しい。方法などいくらでもあるでしょう。そうすれば、私がわざわざここまで迎えに来る手間もなくなるというものです」

本人を目の前に恐いこといわないでください。

それに迎えていっても、別に毎回ラウ先生が来るわけじゃないのに。ラウ先生のおんまりな台詞にエミルは不機嫌そうに答えた。

「あんまり変なこといわないでよ。マシロが怖がる。それにそれが無理なの分かってるよね。まあ、マシロの思い人が彼でなければ考えなくもないけど、ね」

考えなくもないんだ……って、だから、本人を前にしていうことじゃないよね。

「私は貴方の憂いを一つでも減らして差し上げようと提案したまでです」

それにしても、ラウ先生は若干苛々としているような気がする。普段から物騒なことを口にするタイプの人だけど、いつもはもっと遠回し、オブラートに包みまくったいい方をする人だ。こちらが深読みしないと基本的に良く分らない。だから、彼に関しては深読みすることが基本となっているのに、こんな風にストレートに打ってくることは珍しいな。そう思った私に答えはなくて、エミルは

「ごめんね、邪魔をして」ともう一度私を抱き締めて頬に口づけると「例の話し宜しくね」と念を押して帰路についてしまった。見送ってしまった店はがらんとして、とても静かだ。

ここで生活を始めたころは常にこうだったのに、ルカがいるのが当たり前になってしまったから、凄く寂しい。

今夜も戻ってこないのかな？ ブラックも遅い気がするし、待つてたら夜が明けるかもしれない。うーん……夕飯の支度でもしようかな。

帰るかもしれないし、ね。

そのあと、エミルからの連絡は予想よりも早かった。

私は王宮から届いた手紙を閉じて、一息。仕方ないなーと苦笑して立ち上がる。一昨日前にも連絡はあつて、今日はその確認。

余程確実に、私を王宮へと招きたいらしい。というか、心配しておろおろのエミルの姿が想像出来てしまう。

残念ながらルカも居ないから、私は一人出掛ける準備を整えて、店のプレートをクローズに返した。時間に余裕はあるけれど、馬車を使ったほうが良いかな？

「良かった、マシロ。面倒掛けてごめんね」

……王陛下直々のお出迎えだ。

私は曖昧に微笑んで「暇だから良いよ」と答える。私はエミルに案内されるまま着替えも済ませて王城の一室へと招かれた。

最近、夜会にも殆ど出ないから相当久しぶりにお姫様っぽい格好をした。柔らかなオレンジ色は私の肌に良く馴染むと自分でも思う。

黄色人種だからね。

それに若干フリル過多な気がするけど、全体的に品が良く私でも清楚に見えると思う。黙っていれば。

扉口で、エミルが出す腕に手を掛ければ、両サイドにはアルファとカナイだ。

遊び以外で二人が揃っているなんて、ちょっと重々しいなと思ったけど、アルファは「マシロちゃん可愛いー」と手を振り、カナイは「馬子にも衣装」とぼそりと呟く。いつも通りだった。

気にしすぎかな？

でも、二人は室内までは付き合わなかった。後ろで扉が閉まってしまつとちよつと寂しい。

第十二話：死人に二度はない（1）

「待たせてすみません」

と穏やかにエミルが告げれば、暖かな日差しが差し込んでくる窓辺に佇んでいた女性がゆっくりと振り返った。逆光で表情はあまり見えないけれど穏やかな物腰で頷き口を開いてくれる。

「わたくしのほうが我が儘を申してすみませんでした。お噂に違いない美姫でいらっしやいますね」

……どこの噂だ。

そんな大法螺吹くのは誰だ。というか、この世界の美的感覚は全体的にやっぱりずれている。今更再確認。

こつこつと歩み寄ってくる彼女に、私は反射的に一歩引いてしまった。恐いとかそういう感じじゃないんだけど、なんだろう、失礼は承知だけど、あまり近寄らないほうが良い感じがした。

「わたくし以上に、緊張なさらずとも……」

優雅な笑みには棘が見え隠れしている。好かれているわけではないけど、なんだろうこの感じ。

それを察してくれたのかどうかは分からないけれど、エミルは椅子を勧め私たちは腰を降ろすことが出来た。服が窮屈というわけでもないのに、なんだか、胸が苦しい。

「マシロ、大丈夫？」

見たことのないメイドさんが、お茶の準備をしてくれているのを

確認してから、エミルはそつと耳打ちしてくれた。私はそれに頷くけど……なんか、変、だよな？」

「お噂どおり、仲がお宜しいのですね？」

「それを今とやかくいうために、姫に同席していただいたわけではないでしょう？」

彼女は私しか見ていない。

見ていないけれど、エミルが口を挟むと、一瞬だけ私から視線が逸らされ、その瞳はエミルを切なげに捉える。夢見ている、そんな感じで見ている瞳は恋なのだろうか？

そんなことを考えていると、私たちの前にティーカップが出された。

美味しそうなお菓子も沢山。

廊下に居るだろうアルファがみたら喜びそうだなと思つたら、やっと少しだけ緊張が解けた。

姫と、エミルが話をしていたから、私はそのカップを取ろうかと思つたら私の膝にエミルの手が乗つかう。え？　と思つて手を止めたら、その指が動いた。何？　と思つたけどどうやら文字が刻まれているみたいだ。

—— …… 飲まないで。

多分、そう綴られた。

「そついえば、折角遠方よりいらした姫に贈り物があるのですよ」

続きを綴らないまま、エミルがそう切り出せば控えていたメイドさんがどこから出したのか、両手に一杯の花束を持ち出してお姫様

に手渡した。受け取ると、一瞬顔も見えなくなる。

「エミル？」

その隙に、エミルは、ずっと私のカップと自分のものをすり替えた。そして、しっと人差し指を口元に添えて小声で「それを飲んで」と告げる。

姫は嬉しそうに花束を堪能したあと、再びメイドさんにそれを戻して丁寧にお礼を告げた。

淡々と社交辞令を述べつつ、エミルが今度は『飲んで』と綴る。少し迷ったけど、そうしたほうが良いのだろう。私はそっとカップを持ち上げて、こくんと喉を潤した。少しだけ冷めてしまっていたけれど、薫り高い紅茶は口の中でふわりとひろがり清々しい気分にしてくれた。

「……それで、……姫？ 顔色が良くありませんね？」

エミルの言葉に私も顔を上げれば、確かに良くない。緊張のあまり気分でも悪くなったのだろうか？ 私もきつとそつだ。

「え？ いえ」

でも、姫は慌ててそれを否定したけれど、次の言葉が続かなかった。

「——……懲りない人ですね」

ぎくりっ。

私は聞き慣れたその声に肩を強張らせた。それとほぼ同時にそつと、肩に手が置かれる。見上げれば、にっこりと微笑んでもらうけ

れど、少し体感温度が下がった気がした。

「今日のマシロも可愛いですね」

「ブラック、どうして？」

当然の私の問いに、ブラックは「どうしてと聞かれましても」と苦笑する。私の問いは間違っていないと思うけど？

首を傾げたのと同時に、がたんっ！と派手な音がして前を向いたら、姫が蒼白な顔をして立ち上がり震える声で「闇猫」と呟いていた。深窓の姫が、どうしてブラックの顔を知っているんだろう？私のことも知らなかったのに？

不思議に思った私とは対照的にブラックは、ふっと口角を引き上げて冷たい目で姫を見た。エミルではなく、姫を、だ……。

「一度は見逃したというのに、懲りない人ですね」
「どう、し、て」

姫が掠れる声で紡ぐ。震えてカチカチとここまで歯がかみ合わない音が聞こえる。

「どうして？ 愚問です。深窓の姫はご存じないかも知れませんが、白月の姫と私は懇意の仲なのですよ」

顔の造形が変わるのではないかというほど、驚きの表情を見せた姫に対し、エミルはとても落ち着いていて、特にそのことが露見しても問題ないようだった。

「貴女からの依頼をお断りしたとき、私の中で貴女は一度死んでいきます」

淡々と告げたブラックに、一体何を？ と口を開くと、音を発する前に喉に詰まった。

部屋の中の空気の密度がずっと重くなり、指一本動かすこと、呼吸することすら困難に感じるほどのプレッシャー。誰一人動けない。この室内全ての動きを捕えてしまうだけの力。私に直接向けられているわけじゃないのに、その重さは計り知れなくて私は無意識に身体が震えた。胃の裏側辺りが焼け付くように冷える。皮膚の表面がぴりぴりと痺れる感じがする。

ただ静かに冷静に、立っているだけに見えるブラックからの威圧感。殺気。『種屋』であること、その意味をこれほど強く感じたことはない。

それは普段ルカに向けるものは、戯れでしかないことを明らかにするほど強いものだ。

私が声も出せず、身動き一つ出来ないでいるというのに、エミルはその重圧に耐えながらも、腕を伸ばし私の肩をぐいっと引き、

「何も見ないで、聞かないで」

と無茶をいって強引に、その腕に私を抱き締め、頭を胸に抱きこんだ。

そして零れてきた声に身体を硬くする。

「……………死人に二度はありません」

そのあと直ぐ横のはずなのに、どこか遠くで

……………ガウンッ

一発の銃声が響いた。

第十三話：死人に二度はない（2）

びくりと私の肩が震えると、痛いくらいに強くエミルが抱き締め
る。

絨毯の上を靴が踏む音がして、気配が離れていく。

恐くないといえは嘘になる。

嘘になるけど、私は本当に最後まで見ないというわけにはいかな
かった。もぞりつと暴れてエミルの腕から顔を上げると、ブラック
は丁度、姫が座っていたところにいて何かを拾い上げた。もちろん、
それは……

—— …… 人差し指と親指で摘める程度の小さな種。

それを部屋に居たメイドさんに突きつけて

「今後一切、白月に関わることの無いよう、お伝えください」

につこりと微笑んで、彼女の目の前でばきんつと種を潰してしま
った。はらはらと塵と消えた種は無風にも感じられる室内に散って
しまった。

その全てが指先から零れ落ちると同時に、ふつとあたりの空気が
僅かに緩む。その隙にばたたと足音を消すことも忘れて、メイド
さんは脱兎の如く逃げ出した。

彼女は姫に付き従って来た他所の人だったのだろう。

その後姿を見送って扉が閉まってしまつと、ブラックは、ふつと
一瞬前までの雰囲気完全に捨て去り「大丈夫ですか？ すみませ
ん」と私に歩み寄る。

私はエミルの腕の中から起き上がりつつ「どうしてっ！」と声を

上げそうになったのに、エミルに遮られた。

「ブラックは、正しいよ」

「え」

ブラックの手を取りよりりと立ち上がった私を受け止めながら、ブラックの瞳に刹那安堵の色が見える。そんな頼りなさげな不安な色に苦笑しそうになったけど、今はそんなことよりも、理由が知りたい。

だから、ふらつく身体をブラックに預けてエミルを振り返る。エミルは、深い溜息をひとつ零して「間違ってない」と重ねた。

「別に私は貴方に弁護していただくようなことはしていませんけどね」

「――…別に、僕だってそんなつもりはないよ。つもりはないけど、事実だ。彼女は危険過ぎたから、今日の出方によっては、僕も同じことをするつもりだった」

エミルは、苦々しく告げて、ちらと扉の外へも視線を走らせる。だから、二人が待機していたのかと思うと恐い。ふうと、嘆息したあと、テーブルに残った紅茶を睨みつけた。

「陛下っ！ ご無事ですか！」

丁度そのとき、慌てた様子で数人の衛兵さんが流れ込んできた。

「扉の前でお二人が倒れていて」

と、口にしたところで私がブラックを見上げると、ふいっと視線を逸らされた。十中八九この人のせいだろう。エミルもそう思った

のだろう「大丈夫だよ」と告げたあとはそれ以上そのことを深追いはしない。代わりに、テーブルの上にあるカップを持ち上げて一人に手渡した。

「これ、シゼのところに運んで毒の特定をするように伝えて。あちらの出方によっては使わせてもらうから」

にっこり。

口にした内容とは全くそぐわない笑顔だ。ブラックは人のことをいえないけど、エミルも十分薄ら寒い感じを持っている。そして「残りは悪いけど出て行って」と重ねた。

私はすごすごと退室していく衛兵さんの後姿を見送りつつ、毒、か……と復唱し噛み締める。

私が死ねば良いと直接思った人が居てそれを実行しようとした人が居たのだということは少なからずショックだ。

彼女と、エミルはそれほど面識があるとは聞いていない。

大体彼女は深窓の姫なのだから、会ったことがないと思ったほうが間違いない。会ったこともない人に恋焦がれて思っただけが満ちて溢れた。

その思いはとても深くて濃くて……もう、どうしようもなかったのかもしれない。そして、その恨みの情念はまだ見ぬ白月の姫へと向けられた。お姫様は無謀にも、私の暗殺を種屋に依頼にいついたのだろう。それでも助かっていた命だったのに、私が生きていることがきつと、許せなかったんだ。

「でも、だからって……」

くらくらする。

元を断たなければ、私は何度でも狙われることになったんだと思う。きつと、自分が狙われたり自分を通した形で私が狙われたりするより、直接私が怨まれて狙われることの方が問題だったんだと思う。それは分かるけど、だからって、そこまで極端にする必要があったのか……私には分からない、私には、到底……。

「嫌なものをお見せしてすみません。ですが、今回はその必要があった」

ぽつぽつと口にするブラックを「え？」と見詰めると困ったように微笑んで続けてくれる。

「マシロの前でなら私が引き金を引くことを躊躇すると思われるはいけなかったのです。そう、思われてしまったら、又マシロは無駄に狙われる。今度は愚かな方たちの私利私欲のために……」

きゅつと私に触れている腕の力が籠る。

そう、だよな。

ブラックが私のためにならないようなこと、考えるわけない。私がショックを受けるかもしれないということを予想しないわけない。それでも尚実行しなくてはいけなかったんだ。

私はもう一度だけ大きく深呼吸した。

「マシロ、真っ青です。戻りましょう？」

それにしても、本当に別人のような変わりようだ。

私にはこんなに優しいのにと、嘆息すると、まだくらくらした、くらくらして……真っ暗になった…… —

手放す意識の端っこで、ブラックの腕の中の温かさを感じながら私は

「全く、勝手は止してください……汚れるのは私の役目でしょう」
「……………」

そんな会話を耳にして、それ以上このことに触れてはいけな
いと悟った。

みんなは“白月の姫”を守った。

美しいときを守ることはこの世界ではきつと必要悪。

その証拠のようにその後そのことで私が誰かに何かを問われるこ
ともなかったし、全てが無しになっていた。

それにみんな認めないと思うけど、お互いを守ろうとした結果だ
と私は思う。姫には申し訳ないけれどそのことに関してだけは、私
は少しだけ嬉しい気持ちが湧いていた。

第十四話：堪忍袋の緒が切れた

それから、私はちよくちよく貧血を起こすようになったのだけど、自分でもおかしいなーとは思ったものの、それ以外に特に辛いこともなかったから、あまり気にしていなかった。

そして、そんな生活が定着し始めた頃、それはブラックと結婚して、いや、シル・メシアに来て初めてといっても良い事件が起きた。

事件、うん。

私にとっては大事件。

久しぶりに、早めに戻ってきたルカと機嫌良く今日の夕食——ちよっぱり豪華——を用意していたときに封切られた。

「え……ちよっと、私聞いてない……」

「いつてねえもん」

わなわなと私が怒りにふるえていることにも気がつかず、ルカは手元の作業を平然と続けている。私にとっての大事件を、淡々と語りにわか雨程度にしか感じていないルカの様子に怒髪天を衝かれる。かたんつと手にしていたナイフを置いて、大きく深呼吸。

そこですよやく「どうした？」と重ねたルカに、大きく息を吸い込んで叫び倒した。

「ルカもブラックも最低っ！！ 大嫌いっ！！ こんな家出て行つてやるっ！！」

玄関の明り取り用の窓が割れるのではないかと思う勢いで、ウェルカムベルが吹っ飛ぶんじゃないかという勢いで、バンッ！と扉を閉めた。

許せない。

許せない。

許せないっ。

苛々が絶頂に達してしまっていた。

ブラックにしてもルカにしても、微妙にずれているところがあるのはいつものことだ。大抵のことにたいして私は鈍くなっていた。けれど、どうしても許せない。

今回ばかりは、緒が切れた。

凄じ剣幕で店を飛び出したせいか、ルカは私の後ろを追い掛けてこない。

どうせ、直ぐに私を見付けることが出来るからと、本気で心配なんてしていないのだろう。それに私の帰る場所はここしかないとかっているから。

悔しいっ！

私だって本気になれば、いつだって行方不明にくらいになれるっ！ 苛々苛々、沸々と煮えたぎった脳内は、暴言ばかりが吐いて出る。

私はいつもなら、徒歩で向かうのに、大通りに出たところで馬車を掴まえた。そのまま王宮へと走ってもらう。王宮の外門を潜って王城まで運んでもらったところで、私は降りた。にこり顔パスなの

を良いことにがつつと王城内を闊歩する。

「姫様？」

そう声を掛けられて、やっと私は足を止める。

私に声を掛けてきたのは、ここ最近見るようになったカナイの部下の人——確か名前をマリオさんといったと思う——だ。この世界通例で綺麗な人なのだけど、私はこの人が少しだけ苦手だった。別につっけんどんというわけではないし、意地の悪いことをいわれるとかそういうわけではないのだけど、他の姫とか王城での知り合いの中で唯一感情に乏しい人なのだ。

「そのようにお急ぎになって、お怪我をされたら皆が気に病みますよ」

こんな感じなのだ。

心配しているように見せて、しっかりと壁を作る。なんとなくとつつき難い。

「カナイに会いたいんだけど、部屋、かな？」

「はい、カナイ様でしたら先ほどお部屋にお戻りになったところで。お供しましょう」

一人でもいけるのだけど、断り辛い。

仕方なく「お願いします」と告げて、走るような勢いを堪えて彼女に足並みを揃える。早く早く早くカナイに会いたいのに。無駄に広い王城にすら苛々する。

—— …… コンコン

「カナイ様。失礼いたし……」――

マリオさんが最後までいうのを聞かずに、開かれた扉の隙間から私は部屋へ入り込んだ。マリオさんの呆れたような溜め息が聞こえたけど気にしない。今はそれほどそれは重要ではない。

「ん？ マシロか……久しぶり、って、なんでそんな形相してるんだよ」

「そんなつて」

「鬼みたいな顔をしてるぞ」

「……女の子掴まえてそれはない」

「いや、俺は掴まえてないけどな。で、何？ その様子なら用があつてきたってことだろ」

のんびり、手ずからお茶を淹れていたところだった。

そんなカナイが自分のために淹れたお茶を私は横から奪って一口ふうと深呼吸。疲れた。ここまでは割りと……いや、本当に遠い。

そして、キツパリ、ハツキリ、用件を告げる。

「私、家出することにしたの」

「は？」

絵に描いたようにぽかんと口を開いた。間抜けだ。男前が台無し。

「だから、家出をしたいの」

とりあえず、重ねてみた。

そこでやっとカナイは戻ってきたのか、ぴくりと肩を震わせて「あ、ああ、聞こえてる」と頷いた。

「え、えーっと、王宮に身を寄せるんなら、俺じゃなくてエミルに直接いえば良いだろう？　大歓迎されるぞ？」

「そうじゃなくて、こんなところに居たら直ぐに見付かつちゃうじゃん。ルカもそうだけど、ブラックを煙に巻くことが出来ると思う？」

出来るといえる人間はシル・メシアのどこを探しても居ないだろう。そのくらい私の環境は特殊だ。

「だから、暫らくで良いの。気配を消すこと出来ないかな？」

「んー……出来なくはないけど、喧嘩でもしたのか？　珍しいな」

いいながら、カナイは戸口で驚きを隠せない様子で立ち尽くしていたマリオさんを手招きした。

「あれ、えーっと余ってた魔法石ちよつと頼む」

「で、ですが、あれは……」

「いーよ、足りなくなったらまた俺が作るから気にするな。ほら、取ってきて」

片手ふりふりそう告げられて、刹那複雑そうな顔をしたあと、マリオさんは「分かりました」と腰を折って部屋を出て行った。

そして、出て行ったマリオさんは、三つも数えないうちに「お待たせしました」と戻ってきた。

全く待っていないと思う。

「ご苦労さん。もう出て行って構わない」

「いえ、その、姫のお帰りも」

「んー、帰らないんだってさ。俺が馬車にでも放り込むから今日は休め」

マリオさんが持ってきた魔法石は直径一センチ満たないくらいの小さなものだった。それがいくつか入ったトレイだ。カナイはそれを受け取ってソファに腰を下ろすと、膝の上で適当によりながら、伸縮性のある糸に通していく。マリオさんは私とカナイを交互に見たあと、再びずっと折り目正しく腰を折って退室した。

なんか申し訳ないことをした感が否めない。

「良かったの？」

「何で？ 仕事終わったんだし、問題ないだろう？」

就業時間超過して働くほど、今、忙しくないし。と色気の全くないことをあつさり告げてしまふ。カナイ……モテるんだからもつと他人の機微に敏感で良いと思う。

まあ、仕方ないか。カナイだし。

ふうと嘆息してカナイを見下ろす。魔力が絡んでなければ、きつと相当もたつくだろうけど、手馴れた指先は楽しげに動いている。

「マリオさんって、やっぱり優秀なの？」

作業を黙々と続けるカナイの手元を見ながら問い掛けると、カナイは、ん？ と不思議そうに口にしてから「学長のお墨付きだから」と苦笑する。

「ヴァジルさんの？」

「ああ、そう。……ってお前、もしかしてあいつ苦手なのか？」

ちらと私を見てそう凶星を突かれ、私は少し怯む。

「苦手というか、私、マリオさんには好かれている気がしないから、

なんとなく……」

そう、なんとなく、そんな感じがいつもする。嫌なことをされるわけでもなく、さつきみたいに顔を合わせば親切にしてくれるのに、なんとなく……って私の方がこれじゃ、嫌な子っぽいな。自己嫌悪。

「別に嫌いとか、好きとか。そんなもん感じてないと思うぞ？」

「なんで分かるの？」

私の当然の質問にカナイは、時折、紡ぎ合わせた魔法石の長さを見ながら答えてくれる。

「もし、マシロがあいつの無感情、無表情さを見てそう考えてるなら、の話だよ」

「？」

「あいつは魔術系の中でも呪術に長けているんだ。そういう奴はフツーにあんな感じで、極力感情を表に出さない。魔術系、特に呪術とか、各種攻撃系の素養を主に持つてる奴はとっつき難い感じのやつが、普通に考えて距離を感じるようなやつが多いよ」

「え、でも、カナイやクルニアさんヴァジルさんそんなことないじゃん」

「フツーじゃないヤツばかり持ち出しても無駄。フツーはあんなもんだ」

自分のことまで、あっさり『フツー』じゃないといってしまいうカナイには少しだけ切なくなる。

フツーだと、私は思ってるよ。

私は……。

第十五話：家出くらい出来るもん！

私は曖昧な気持ちを持て余したが、その間に、カナイは仕舞いをつけたのか「ほい」と出来上がった数珠状の魔法石を私の手首にそつと通す。

魔法石といえば赤いものが直ぐに思い浮かぶのだけど、これはもつと深くて黒に近い。でも、綺麗だ。私も一応女の子なので、綺麗なものは好き。

だから、自然と顔が綻ぶ。

そんな私の頭に大きな手がぼすりと無遠慮に載せられる。ずんつと頭が沈むが気にしてくれる素振りにはゼロだ。

「ちよっ」

「そうやって笑ってるよ。小難しい顔してるのは似合わないだろ？」

ぐしゃぐしゃっ！ と私の頭かき回す。

乱暴だ乱暴過ぎる！ でも、私がしょんぼりしたのに気が付いてくれたことは素直に嬉しい。嬉しいけど、ぱちんつとカナイの手を払い除けて「髪が乱れるっ！」と不貞腐れてしまう。

なんか私可愛くない。

カナイはそんな私を一切気にすることなく、くつくつと意地悪く笑ってから説明を続けてくれる。

「まあ、これで少しくらいは気配を消していられると思う。なんで喧嘩したのか知らねーけど、面倒くさいことにならないうちに戻れよ？」

どうしてもどこか説教臭いカナイは、やっぱり私にとってここでお父さんみたいだ。ありがとうっ！ とカナイの両手をとってお

礼を告げれば「お、おう」と僅かに動揺を見せて頷く。そして、そのまま踵を返しかけたら掴った。

「待て、待て待て、どこまで行く気だ」

「え、それいったら駄目じゃん」

「――……目星くらいいっていけ。王都から出るのか？ それなら馬車を使え」

「そんなに遠くには行かないよ。少しだけ出るけど……」

「ごによりと続けた私にカナイは納得したように頷いて、手を離してくれた。

「夫婦喧嘩は犬も食わないんだろ？ あんまり迷惑かけるなよ」

……くっ。このお父さん気質めっ！

「大きなお世話ですっ！」

カナイの言葉に、苦い思いがこみ上げつつも私はばたばたと出て行った。

馬車に揺られて辿り着いた先。

アーチ型の看板に迎え入れられる。畑がずっと続いている奥に、可愛らしい木造の家が数件寄り添うように建っている。私はその中で一番大きな建物の玄関先で、リーンリーンと呼び鈴を押す。夕時のためか、中からは賑やかな声が漏れていた。

「はいはいはい。ちょっと待ってくださいねー」

という元気な声に迎えられ、扉が開くとふわりと赤い髪を揺らし、お腹の大きなアリシアに迎えられる。

「マシロ」

驚きに目を丸めるアリシアを見た途端、ずっと我慢していた涙が溢れた。

—— …… つく、ひつく

あのおねーちゃん大丈夫？ おねーちゃん、何で泣いてるのー？
ぼそぼそと遠巻きに子どもたちの声が聞こえる。それを、しっしと追い払って、アリシアは私の前に暖かな湯気を醸らせるマグカップを置いて、重そうなお腹を片手で押さえながら、隣りに腰を降ろした。

「どうしたの？」

「ごめんね、ごめん」

「良いけど……うん。良いのよ……」

そつと背中を撫でてくれるアリシアの暖かな手に余計涙が出る。

「……今日、泊めてくれない？」

止まることのない涙を拭いながら無茶をいった私に、アリシアは視線を泳がせる。その先に居たのは、彼女のご主人だ。彼は、アリ

シアの視線にやんわりと微笑んで頷いてくれた。

理由も告げずに散々泣いたあと泊めてくれなんて、無茶振りにも悪い顔一つしない彼はとても良い人だと思う。

二人の了承を得た私は、その準備を整えてくれるアリシアや、子どもたちが落ち付く——ぐっすり眠りにつく——のを待ちながら、ぼんやり、そして時々泣いていた。そんな間に、私はうとうととしてしまった。

こくんっ！ と自分が漕いだ舟にびくんっ と肩を跳ね上げる。

寝てる場合じゃないやと、目を擦り、ふうと深呼吸。

アリシアには既に三人の子どもがいる。

そして、お兄ちゃんたちにもあまり年の変わらない子どもたちがいて、とても賑やかだ。だから私に付きっ切りになるわけにもいかなくて、時折覗きに來てくれながらも、忙しそうにしていた。

迷惑なのは分かってたけど、ここでの生活が長いとはいえ、私にはこうやって我が儘をいえるような女友達なんて他にいなくて、一人になると変なこと、余計なことばかり考えそうですそれはとても我慢出来そうにないから甘えてしまった。

でも個人的には、来て正解。

賑やかな生活音を聞いていると、少しだけ落ち着く。でも、それによつて余計に怒りは増幅される。

話なんて、聞きたくない。

話なんてしたくない。

私がいうことなんて何一つない。

勘違いばかりっ。勝手に決めて……勝手に判断して……二人とも私を、なんだと思っているの！

はらはらとまた涙が止まらなくなった。

大嫌いだ。

もう、知らない。

いつまで経っても本当の意味で分かってくれない！ 嫌い、嫌い。
もう声なんて聞きたくない。話なんてしない。

—— …… 大嫌い。

大、嫌……い…… ————

ん。

本格的に眠ってしまっていたらしい。

肩にはブラケットが掛かっていた。私はそれを手繰り寄せて、耳を済ませる。あれだけ賑やかだった生活音が何一つ聞こえない。痛いくらいの静寂。

まるで、誰も居ないようだ……でも、人の気配はするから、居るはずなんだけど。

「何があつたのか知りませんが、今夜は帰らないといっているんです。一晩くらいうちに預けてください」

予感的なものがして、私はふらりと戸口に立ち、そつと扉を開いた。

少しだけ開いた先には、アリシアのご主人が立っていて、私に気が付くと顎で室内へと促す。その所作に私が部屋の中を見ると直ぐに目に付いた。

……ブラック。

気配は消えたというのに、一日も持たないなんて……。まあ、私の行き先なんて限られてる。しらみつぶしに当たったとしても一晩掛からないだろう。

「兎に角、事情はマシロ本人から聞きます。連れて戻ります」

—— …… あれ？

「マシロ、凄く泣いてたんですよ。疚しいことがあるんじゃないですか！」

「疚しい？」

「例えば、愛妾がいたとか、手を上げたとか」

—— …… あれ？ 変だ。二人の会話が良く聞き取れない。

でも、凄い剣幕でまくし立てるアリシアに、ブラックがぎりつと唇を噛んだ。危ない！ 良くは理解出来なかったけれど、アリシアに何かされては堪らない。

その様子に慌てて私は二人の間に割って入った。

『やめてっ！』

—— …… あれ？？

私は慌てて喉を押さえる。
声が、出なかった。

気のせい？ そう、だよな？ 正面に立つブラックを見上げて、
もう一度……

『やめ……』

……音が、出ない。

けふつと力なく出た息の音に少し咳き込む。異常を察したアリシ
アが私の肩を掴み、ブラックの手が心配そうに頬を撫でる。

アリシアが何かいつてる。唇が動いている。でも、聞こえない。
音が、私に届かない。

何で？ どうして……。

きよろきよろと逡巡すれば、小さな子たちも決して静かにしてい
るという風ではない。こちらの様子は見守っているけれど、椅子を
がたがたと揺らしていたり、隣りに居る子とお喋りしたり……けれ
ど、その全て届かない。

恐る恐る耳に触れる。

……ちゃんと在るべき場所に、耳はある。けれど、音を拾わない。

ふと、私の手首に掛かっている魔法石に気が付いたブラックが、
それに触れ何か問い掛けてくれるけれど、聞こえない。私は力なく
首を振った。

そんな様子を見て、良いこと思いついた！ とばかりに一人の女
の子が立ち上がり、おもちゃ箱を漁り始める。そして、恐らく靴音
高く駆け寄ってきて、満面の笑みで私に小さな黒板を手渡した。

私は、アリシアとブラックを順番に見てから、カツカツと黒板に
文字を綴る。

『耳が聞こえない。声が出ない』

「どうしてっ！」

ニュアンス的に、理由を問われている気がして、私は首を振った。

分からない。

理由があるなら教えて欲しい。

不安になってブラックを見れば、いつものように静かに微笑んで唇が紡ぐ。

—— …… 大丈夫。

だと……。

そして、泣きすぎて腫れてしまっているだろう瞼をやりわりと撫でた。

第十六話：石が叶えた願い

結局、あのままアリシアの家に居たのではどうしようもないので、みんなに騒がせてしまったことを詫びて、私はアリシアのハーブ園をあとにした。

しょんぼりと店に戻っても、扉を開く音も床を弾く足音も何も届かない。

どうして良いのか全く見当がつかずに、促されるまま書斎のカウチソファに腰を降ろした。ブラックはそんな私の目の前に膝をついて腰を落とすと、そっと手を取り顔を覗き込んでくる。

唇が何事か紡ぐけれど聞き取れない。

分からなくて、私はふるふると首を振る。

ブラックは、すっと立ち上がると、一度その場を離れてずるずるとルカの首根っこを掴まえて戻ってきた。ルカは何か渋っていたようにだけど、さっきのブラックと同じように私の前に膝をつき私の手を取る。

何事か口にしてきているようにも思うけれど分からない。

その様子を見て、ふう……と嘆息すると、ルカは立ち上がりブラックを振り返って首を振る。

もともとこの家は静かだった。でも、ブラックもルカも今は居る。これだけ人の気配がするっていうのに何も聞こえないのは凄く変だ。

静寂が耳に痛い。

ブラックは私の手首から数珠を抜き取って、ひょいと取り出したノートに几帳面で綺麗な文字を書き綴る。

『これはカナイですか？』

私はこくこくと頷いた。

そして、ブラックからノートを取り上げると続ける。

『私が作ってと頼んだの。ブラックやルカに居場所を知られたくなかったから』

ぺらりとページを捲り新たに書き綴る。

『カナイを怒らないで』

と締め括れば、ブラックが切なげに目を伏せて、長嘆息したのが分かる。

それに胸が痛む暇もなく、すつと立ち上がったブラックは徐に窓際まで歩み寄って、ひょいと杖を出現させると壁をこつこつと、縦に二箇所叩いた。

叩かれた場所は、ぱちんぱちんと光が弾けて、直線で繋がる。

そこへブラックは、ずぼつと遠慮なく手を突っ込んだ。そして、思い切り、ぐいつと引つ張ると……。

「！！」

カナイが雪崩れ込んできた。

何かブラックに文句いつている。まあ、分からなくもない。いきなり引つ張り込まれたら普通怒る。

そして、当然のようにブラックはブラックで悪びれる風は微塵もない。つんと顎を上げ、私の手首に掛かっていた数珠をカナイの前に突き出して文句をいつてるみたいだ。
怒るなっというたのはスルーされたらしい。

ひと悶着終えたあと、私をちらと見てからカナイが近づいてくる。ぼんつと私の肩に手を置くから、カナイを見上げてとりあえず「ごめんね」と謝罪した。

「いーよ。別に。文句いわれるだろうなーってのは、最初から覚悟してたからな」

いつて、にやりと口角を引き上げた。

……え？　いつて？

「カナイっ！」

「なんだよ……」

「私の声聞こえるのっ?！」

「聞こえるよ？　音にはなっていないけどな。なんていえば分かる？　頭ん中で喋ってるのがまんま伝わってる感じ」

「で、でも……ブラックともルカとも……」

おろおろと、逡巡しそう問い掛ければカナイは珍しく意地の悪そうな笑みを浮かべる。

「話したくないからだろ？」

——　……え？

「お前が、あいつらの声を聞きたくないと、話したくはないと願い、そして、拒んだから、だろ？」

くつくつとカナイは楽しそうに笑うけれど、微塵も楽しい話ではない。

「こんなことになると思わなかったけど、あの魔法石の魔力がお前の願いを叶えたみたいだな。まあ、そんなに大した魔力は入ってなかったから、そのうち使い切ったら治るだろ」

カナイはそういつて別に病気でも何でもないと続けるけど……ブラックは私とカナイの会話が成立している様子に物凄く落ち込んだようだ。

そつと、傍まで歩み寄って私の隣に腰掛けるとまたノートを取った。

このくらいしか意思疎通の方法が今はない。

『他に痛いところとか、辛いところはありませんか？』

—— …… どうして私は責められないんだろう……。

「そりゃ、自業自得だからじゃないのか？」

「勝手に人の頭の中読まないでよっ！」

慌てて、ぱんつとカナイの手を払い除ける。その様子をちらと見てブラックは溜息を重ねた。

『マシロの願ったことなら、私にはどうすることも出来ません。ただ、時間が経つのを待つだけです。何が貴方の心を縛ったのか、分

かりませんが……』

そこまで綴って、ノートの端っこをとんとんと弾く。次の言葉が続かないようだ。

そつと、私はその手を掴まえて文字を綴る。

『ごめんなさい』

私が癇癪を起こしてしまったせいで、こんなことになってしまった。ブラックと同じようにしょんぼりと肩を落としてしまう。

「で、俺もう帰って良い？」

—— …… ぽすっ

感傷的になっていたところで、カナイに頭を抑えられる。多分、身体の一部に触れていないと会話が成り立たないのだろう。

「明日も来たほうが良いのか？ それ、まどろっこしいだろ？」

ちらとノートに目配せしてそういったカナイに苦笑する。

「良いよ。どうせ、お客さんもないだろうし、書くから……うん。暇なときにでも寄って……」

「ふーん、分かった。で、ブラックは引っぱり込んでくせに帰すつもりはないよな？ ああ、良いよ。別に、じゃあな」

そこでカナイは私から手を離してしまったから、何をいったか分からないけど、手を振って出て行ったので「さよなら」の挨拶でもしたのだろう。

それに続くようにルカまで部屋を出て行ってしまった。

う、気まずい。

『ルカに何か聞いた？』

恐る恐る書き綴れば、ブラックはゆっくりと首を振った。

『マシロを探すのが先でしたから……』

『ごめんなさい』

もう何度書き綴っただろう。

同じ台詞を綴る私をブラックはふわりと抱き締めてくれた。いつもなら心地良く聞こえる心音も全く聞こえない。

目を閉じると暗闇。

堕ちていくような感覚が恐くて身体が震える。

唯一感じることの出来る暖かさが私を救ってくれるけれど、もし、ブラックが迎えに来てくれなかったら私はもっとパニックを起こしていたかもしれない。

大丈夫は大丈夫ではなかったけれど、それでも、ここが落ち着く……。現金な話だけど、ブラックが居て良かった。

翌日も、もちろん私の耳と声は失ったままだった。

私はこれまでそんな経験はしたことがなかったから——風邪で声

が出なくなるのとはわけが違う——気が付かなかったけれど、いきなり取り上げられてしまつととても不便だった。

音のない世界は想像するよりずっと恐ろしい。

普段静かだと思つていても、何かしらの音はしているものだ。

時計の秒針の音。

風が窓を揺らす音、プリンターや温室の植物たちの葉が擦れ合う音。

とても微かなものでも確かにあつたものだ。

それらが全て“無”になる。

日常生活は王都の方が慣れているとはいつても、ルカは店に居ないことが増えてしまった。ブラックは、どこか遠慮がちに出来る限り傍に居て欲しいと書き綴り、私はもちろん了承し、いつも通り種屋に戻る。

こうなつてしまつたきつかけが、きつかけで、その上意思疎通方法が筆談以外にないということで、私たちはどこかぎくしゃくしていた。

ちゃんとした説明も筆談ではもどかしい。

それに余計な誤解を招くとも限らない。

ブラックも直接聞いてこないから、私もそのことに触れることはしなかった。

夜はブラックのぬくもりを抱いて眠ろうとしても、いつもなら心地良く響く心音も聞こえない。規則正しい寝息も届いてこない。

目を閉じてしまえば、真空の中に閉じ込められたような息苦しさ。うとうとと意識がまどろめば直ぐに無音の恐怖に引き戻される。

殆ど眠ることは出来なかった。

ブラックも同じように付き合ってくれていたのか、ずっと私の背を撫でてくれていたけど、朝方には流石にうとうとしたようで、私はこっそりとベッドを抜け出して朝食の準備に掛かることにした。

第十七話：変わらないはずの日常

種屋のダイニングもキッチンも一階。

どちらも広さだけはかなりある。

ブラック一人のときは殆ど使われていなかったのか、何もかも新品同様だった。そこへ、一つ二つと私が色々持ち込んで、なんだかちよつと雑然としている部分がある。

でも、私は今の方が好きだ。人が居るという気配は心が穏やかになる。

とりあえず、お湯を沸かして……卵とサラダと……。

冷蔵庫——一番上部に魔法石（氷系）を入れて庫内を冷やし、食べ物を保存している箱——を覗きながら、必要なものを決めて取り出す。

かちりつと火をつけてもじゅわつとポットに付いた水滴が蒸発する音も、もちろん聞こえない。

「……………」

少し寂しく思いながらも仕方ない。

もう暫らくの我慢だろう。

そう思って、野菜を洗って切る作業に取り掛かる。水がシンクを弾く音。ナイフがまな板に当たる音。昨夜から閉ざされただけだったというのに、凄く遠い昔のここのようだ。

自分の周りは本当に音で溢れていたのだと痛感。

はぁ、とシンクの隅っこに手について溜息。

胸がきりきりと痛む。

音が、ブラツクの声が凄く恋しい。自分で拒絶しておきながら、言葉を声を交わしたくて堪らない。

寂しくて哀しい。音が、声が、恋しい……恋しい……。

じわりと浮かぶ涙を拭った。

ふと、視界の隅っこに湯気が見えて顔を上げると

「っ?!」

ポットが悲鳴を上げていた。

蓋がカタカタ揺れて弾けて飛んでしまいそうだ。慌てて、手を掛けたら予想以上に熱くて、反射的に弾いたら引っくり返ってしまった。

「っ?!」

ぱんっとお湯が弾けて腕や身体に掛かる。

—— っ! 熱いつ!

悲鳴を上げたいのに私から音は出ない。

その場に座り込みそうになって、ぐいつと強い力に引き上げられた。そのまま、支えられ、袖が濡れるのも無視して流水にさらされる。

「つく……っ……」

気がついたときには私は泣いていた。

痛くて情けなくて、涙が止まらなかった。

助けてくれたのはもちろんブラックだ。

ある程度冷やしたらブラックは私を抱き抱えて、ダイニングの椅子に下ろした。

袖を上げるとお湯が掛かったところは赤くなり、じくじくと鈍く痛む。ブラックがそっと触れるにも、最初の痛みに肩を強張らせ顔を逸らした。

軽度の火傷に見えるけれど、薄く皮が剥がれ、ひりひりと痛む傷は自分のものなのに、見ていられなかった。ふいつと顔を逸らせば、ブラックが丁寧に一箇所ずつ傷を癒してくれる。

その作業の片手間に、私が涙を堪えるように睨みつけていた机上に、ふつと出てきた紙にペンが勝手に走る。

『もう大丈夫ですよ、泣かないで……』

読み終わると同時に、視線が絡む。

視界は涙で濡れてしまっていて、ブラックの表情が上手く読み取れない。

多分、とても困ったような顔をしていると思う。

私はまた困らせている。

私は空いたほうの手でペンを走らせる。

『ごめんなさい』

昨日から本当に何度この文字を書き綴っただろう。

『謝らなくて良いですよ。直ぐに機能も戻ってくると思います。どうかそれまでは……』

書きかけて止まってしまった。私にいい辛いのだろうなと思い、変わりに私が書き綴る。

『何もしないよ……』

『……お願いします』

力なく頷く。本当、情けないな。

料理の続きはブラックがやってくれて、本当に私は何もなかった。

普段なら、朝食を取って一息吐いたあとは屋敷の中のことを、適当にやるんだけど、こんな状態ではブラックが心配するし、離れたがらない。だから流れて、私も書斎で過ごした。

とりあえず、昨日の状況説明のためにアリシアには手紙を書き。

回復次第遊びに寄らせて欲しいことも伝えた。

謝罪は直ぐにでも行ったほうが良いだろうけれど、この状態では、余計に心配を掛けるだけだ。

普段からのんびり過ごしているときは、常に何か話をしているわけじゃない。無言で居るときのの方が長いくらいだ。

それでも私は満たされていたし、穏やかな気分で居られたのに、今日は無理。落ち着かなくて、椅子から立ったり座ったり、本を出したり引っ込めたり。

そんな様子を見かねたブラックが、時折作業を中断して、私を抱き締めてくれる。

何度も「大丈夫」「直ぐに戻るから」と書き記される。

その度に私は頷くけれど、胸の悶えは一向に取れることはない。

今日は既に何人か訪問客があつたけれど、そのどれも種を持ち込んだものだった。

みんな意気消沈した様子でやってきて、種をお金へと変えていく。お金を持って帰るのを忘れそうになるお客さんは居たけれど、白化した球体を忘れる人は居なかった。

そのことが少しだけ私の気分を上向かせる。

種屋の仕事場に私が居ることを不思議そうな目で見る人が殆ど。まあ、場違いなのは私にも分かる。でも、対峙した店主が全く気にしないので、誰もそのことには触れない。

お昼に近くなつた頃、窓辺でのんびりと外を眺めていたら、境界の地には不似合いな豪華な馬車が屋敷の前に止まった。中から出てきた人も使用人を従えて、多分、一般人ではないだろう。その様子を隣りで見ていたブラックは、難しい顔をして溜息を吐いた。

そして、ブラックは私を見詰めて少し思案したあと、ちゅつと頬に口付けてから、書斎机の椅子を引き私を座らせると、くるりと扉に背を向けさせた。

不思議そうにしただらう私に、にこりと微笑んで、今度は額にキスをくれる。

『どうか、このままで……』

というメモが出された。

私に頷く以外の選択肢はない。こくんと頷くと、ブラックは折った腰を上げ、苦々しく扉に声を掛ける。そして、ふわりと私の頬を撫でたあと席を外した。

種を持たないお客さん、なのだろうな、と思う。

多分見ないほうが良い商談ごと。目の前で人が種に還るのも何度か目にしてしまっているのだから今更だけど、好んで向き合う必要もない。

何よりブラックも私もそれを望んでいないのだから。

ふうと長嘆息して椅子に深く腰掛けなおせば誰かの気配がした。けれど私は振り返らない。

ぼんやりと、憎らしいくらいの晴天を仰ぐ。

白い雲が薄っすらと掛かって心地良さそうに流れていく。

空、綺麗だな。

何気なくそんなことを考えていたら、昨夜眠っていなかったせいで眠気が今頃襲ってきて、私はうとうととする。少しだけ開いていた窓から吹き込んでくる、ひんやり心地良い風が頬を、肌を撫でていく。

凄く、すごく……心地良い。

瞼を閉じてても陽光のお陰で薄っすらと明るい。これなら、少し眠れそうだ。じわじわと身体が重くなっていくのを感じた。

どのくらいそうしていたのか分からない。

私は、柔らかなキスで目を覚ました。唇の上を、つつと舌が這い優しく唇を吸う。

「……………」

唇から音を紡ぐことは出来ない。
紡がれる音を聞き取ることは出来ない。

けれど、伝わってくるものもある。

私は、とても愛されている。

沢山の好きを丁寧に注がれている。

薄っすらと瞼を持ち上げれば、口付けは終わりを告げた。名残惜しい。そう感じるほどに心地良かったのに。

「……………」

出せない音がもどかしい。

ブラックは見惚れるほど静かに微笑んでくれているけど、その瞳には、薄っすらと涙が掛かっているような気がした。

私が、ブラックを苦しめている。

堪らなくて、ブラックの頬に手を伸ばせば、ブラックはそっと目を閉じて、静かに手を重ねると私の手のひらに頬を摺り寄せてくれる。

閉じた瞳に僅かに滲んだ涙を、私は空いている手で拭くとブラックは苦笑して『少し眠くて』といい訳染みたメモを寄越した。

—— ……ブラック……。

出せない音に自業自得とはいえ、胸を痛め私はそっとペンを走らせる。

『今夜はゆっくり休もうね』

そして、苦し紛れに笑いあった。

第十八話：失くしたから伝わるもの

午後は、王都に戻った。

「ブラックが”仕事“で出なくてはいけないから、王宮か、店の選択肢を与えられ私は店を選んだ。」

店の中を一通り探したけれど、ルカは同じように図書館にいつて
いるようだ。

「一体何を調べているんだろう？ まあ、聞いても大抵私の理解の上
に行くようなことだから、構わないけど、面倒な問題に巻き込ま
れてないと良いな。って、私がいつも一番面倒だよな。情けない笑
いが零れる。」

そして、みんなに迷惑は掛けたくないという気持ちもあって店を
選んだのに、エミルたちはわざわざ様子を見に来てくれた。

「筆談だけでは大変だし、不安だよな？　せめて回復するまで、王
宮に身を寄せてはどうか？　って、伝えてカナイ」

「は？　あ、ああ……　——だってさ」

カナイを通して伝えられる好意に私は静かに首を振った。

「大丈夫だよ。そんなに長くはないよね？」

「え、ああ。まあ、そうだな。うん……　数日、だと思うけど」

「我慢するよ。私のせいだし」

「いや、そんな殊勝な態度取られたら、渡した俺が悪いみたいだろ
？　いっそ、お前の口から俺が悪いっていつてくれよ」

「……カナイ、エム？」

「もう、何もいうな」

くすくすと笑う。

笑えるのはこうしてみんなが居てくれるときだけだ。こうして、カナイが話しかけてくれるときだけだ。

僕もやってみようっ！　と私の手をぎゅぎゅーと握って（多分）念を送ってくるアルファをカナイが「魔力ゼロが出来るわけないだろっ！」と小突きまた笑った。みんなが居れば気を使うこともない。そんな様子を、壁に寄りかかり見ていたブラックが視界の隅に入ってきたけれど、今の私にはそれをどうすることも出来ない。ちりちりと痛む胸の痛みを堪えるだけだ。

ふっと姿を消す、ブラックにいつてらっしやいすら伝えることが出来なかった。

暫らくくだらだとみんな一緒に居てくれたけれど、王宮からの使いが来てしまい、まだ残っていると騒いだアルファを引っぺがして、エミルとアルファは王宮へと戻った。

カナイも帰って良いといったんだけど、王様の勅命により居残りで。私もお店のほうを開けるような暴挙はしなかったから、私たちは二階でぼんやりと過ごす。

書斎のソファに腰掛けて、どこにいても本を読んでいるカナイの隣りに座り、足をソファのほうへと投げ出して、背中を預ける。どこかが触れていないと会話が成り立たないので、私が今一番楽な体勢を維持してみた。

「重い」

「大丈夫、私気にしてないから」

「……お前な」

私の悪態にカナイは嘆息したけれど、それ以上は食って掛からなかった。実のところカナイも僅かに責任を感じているらしい。

「カナイの責任じゃないよ」

と告げれば「当たり前だろ」と返してくるけど、気にしているのは分かる。カナイは口でいうほど無責任じゃない。

「んで、喧嘩解決したのか？」

「……ううん……」

私はカナイの腕に背中を預けたまま首を振った。

「俺、お前らの間に立つのだけは嫌なんだけど……面倒臭そうだから……」

「良いよ、立たなくて。黙ってるとき、色んなこと考えちゃって憤慨してたときの気持ち、すっかり萎えちゃった。だから、声が戻ったらちゃんと話するよ……ブラックも待ってくれてるみたいだし」

「—— ……それなら良いけど」

そついったあとはただ静かに本の頁を捲った。

「そついえば、ルカと図書館で会った。そのあとはシゼの研究室で会った」

え？ と見上げててもカナイは本に視線を落としたままだ。落としたまま口にする。

「図書館ではやけに古臭い本を漁ってた。シゼのところには、即成長薬を取りにいったみたいだ」

「即成長薬って、何に使ってるんだろう？　ここにもそのくらい調剤する材料揃ってるのに」

「なんか用意している時間が惜しいとかいってたけどさ……あいつ、何やってんの？」

「私の理解範囲外」

ぼそつと告げれば「なるほど」と即答された。

感じ悪いな。

でも、ルカとシゼってあんまり仲良しなイメージなかったけど、実は仲が良かったのかな？　歳も一番近いしね。

「違うだろ。単に目的達成への一番の近道だと思ったんだろ？　あいつ種屋候補生だけあって、そういうところ抜け目ないし」

「……話し掛けてないことまで読まないでよ。プライバシーの侵害」

「ああ、はいはい」

結局私たちではルカが何を考えて動いているのかさっぱりなので、それ以上その会話に広がりはなかった。おやつの中にはカナイがお茶を淹れてくれたけど、正直、黙っていたがカナイのお茶はいまいちだ。自分で淹れるのが大抵みんな面倒臭いので、何もいわない。飲めたくない程度の中途半端な不味さだ。

「……悪かったな」

「心読まないで」

ブラックが戻ってきたのは日がとつぷりと暮れた頃だった。

カナイもブラックが戻ってくるまで居てくれたのだから、ご飯くらい食べて帰れば良いのにと誘えば、凄く良い笑顔で「嫌だ」と返してもらった。

私が作るわけじゃないから味は確かだというのに、失礼だ。

「居た堪れないんだよ、お前らのビミョーな空気。俺に呼吸困難になれっていいのか」

ぼそそつと耳元で告げてこめかみ辺りをこつんと弾かれた。う、どうもすみません。

そんな私たちのやり取りを見てブラックは溜息を重ねた。そして何かカナイに告げるとカナイは「俺、帰るから」と答えて、私の肩をぼんぽんと叩くと「じゃあな」と本当に帰ってしまった。その後姿を見送って、溜息を揃える。調子、狂うよね……。

『ルカも戻らないようですし、食事は家で取りましようか？』

その誘いに乗って私はまた種屋に戻った。

食事は美味しい。

ブラックが作るものだから外れるわけない。外れるわけないけど、なんだか苦いような気がした。

明日には、声も音も戻っていると良いな。

そんなことを考えつつ、種屋の書斎にある大きな窓からぼんやりと、夜空を仰ぐ。今日も変わらず二つ月はそこにあって柔らかな光を世界に注いでいる。私の背後ではブラックが白化を終えた球体がふわりふわりと飛んでいた。

今夜はゆっくり休もうと約束したのに、私は目を閉じると堕ちていく感覚が拭えなくて、ブラックの腕の中で目を閉じたり開いたり

を繰り返していた。

『眠れませんか？』

そつとブラックの指先が胸元で文字を綴る。同じように私もブラックの胸元に文字を綴る。

『先に休んで良いよ』

ほんの少しブラックはくすぐったそうにするので、書き辛い。私
が書き綴った文字にブラックは首を振ると続ける。

『音がないのが恐いですか？』

『うん、恐い。凄く……一人きりになってしまつような気がする』

しよぼしよぼと素直に書き綴れば、ぎゅっとブラックに抱き締め
られた。そしてそのまま背に文字を綴られる。流石に背中にくすぐ
つたい。

『触れても構いませんか？』

正確に綴られる文字に心臓がとくんつと跳ねた。

私がブラックを傷つけたのに、そう願うのは間違っているような
気がしていた。だから、自分からは伝えられなかった。あのときだ
って落ち着けば良かったのにそれすら出来なくて。

つんつと鼻の奥が熱くなりじんわりと瞳にヴェールが掛かる。

私はそれが零れてしまわないように注意を払いつつ、ブラックの
胸に額を押し付けてこくんつと頷き、顔を上げた。

ふつと降りてくる影に瞼を落とす。

柔らかに重ねられた唇から伝わる暖かさが心地良い。失くした感覚がある分、残っている感覚が鋭敏になっていて、ブラックの唇が触れる感覚や、皇かな手のひらが私の身体を伝う感覚。その一つ一つに、身体が熱くなり、鼓動が早くなる。

「……………っ、は、っ」

洩れる息は音を成さず、詰まるように苦しい。

喘ぐように口を開けば、頬に触れるブラックの唇が『大丈夫？』と綴る。私は、こくこくと頷きブラックの首に腕を、肌蹴た足はブラックの腰に絡めて引き寄せた。

触れられて落ちる闇なら、それほど恐くない。

分け合う熱が心地良くて、肌に降ってくるブラックの吐息が堪らなく艶っぽい。いつもよりももっとずっと傍で、吐息が触れる距離で、抱いてくれる腕に狂おしいくらい縋りつく。

恋愛相談所（前書き）

王宮サイド

恋愛相談所

「それで、何しに来たの？」

「仕事の帰りです。例の件調査は進んでいるのかと問いに寄っただけです」

「暇なんだねえ」

王城の執務室。

エミルは山と積まれた書類を一枚取り上げて、緻密に綴られた文字に目を走らせながら、ふらりと立ち寄ったブラックに溜息を溢す。

「――……あまり進んでいないはずだよ。一応先遣隊の調査は終わったけれど、特に原因らしい原因も……ただ、気になるものはあったみたいだから、何人かは残って調査中。そのうち分かるだろうけど……」

どうだろう。と溢して、ぱんっと大きな印を押し別の書類を新たに手にする。

「この書類の山。このところラウが苛々しっぱなしで、八つ当たりが酷いんだよね。何か知らない？」

人払いをする前に侍女に淹れてもらったお茶を、手持ち無沙汰に揺らしながらブラックは答える。

「ラウの方がとばっちりだと臍を曲げているのですよ。そのうち勝

手に空いた後宮が埋まるんじゃないですか？」

「―― …… ああ、やっぱりそのことか……」

「ええ、一番近いものが身も固めずといわれているようですよ」

くつくつと喉を鳴らしたブラックに、エミルは眉間の皺を濃して「面倒臭い」と唸る。そして、暫らく、何か思案するように黙したあと、再び口を開いた。

「まだ、マシロのほう戻っていないんだよね。マシロには断られたけど、ここに移ってもらって問題ないよ。寧ろ歓迎。大丈夫、僕は心が広いから、全て受け入れられるよ」
「お断りします」

キツパリとしたブラックの返答に、エミルは当然というように「ああ、そう」とそっけなく答えて続ける。

「ふーん…… まあ、それならそれで良いけど」

これ添付書類が足りないじゃない。ぶつぶつと問題ありの書類を脇に寄せながら、応接セットに腰掛けているブラックをちらと見た。その視線に気がついたのかどうか定かではないが、ブラックがぼつと訪ねる。

「―― …… マシロから聞いたんですか？」

「ううん。聞いてないよ」

「そう」

掠れたような声で溢したあと、長嘆息する。

その様子に、同じく嘆息したエミルはペンを置いて空いた指先でコツコツと机を弾きながら不機嫌そうに続けた。

「まあ、そういうわけだから、さっさと帰りなよ。マシロに拒絶されてショックなのは分かるけど、今はマシロだってショックを受けてるんだ」

「……………」

「マシロにとって予想外のことが起きているんだから、一人にするのは可哀想過ぎる。なんというか、説明するの凄く面倒くさいし、癪なんだけど…………先代からこんな感じみたいだし、王宮に恋愛相談持ち込んでくるのなんてブラックくらいだよ」

「王宮なんて、常に愛憎劇のネタに困らないくらいはどろどろじゃないですか。得意分野なのでしょう？」

「…………得意分野って……………」

はあ、とエミルは溜息を重ねたあと「これもマシロのためだよ」と溢して、椅子から立ち上がると机の前まで、ゆっくりと出てきてふうと一息。

「まあ、その得意分野だから見えることもあるわけだよ。だからさ、自分ひとりが傷付いている顔するのやめたら？ マシロ、きつと気がついてるよ。そして、自分が君を傷つけてると余計に傷付いてる。魔力の効果が予想よりも持続しているのはそのせいじゃないの？ カナイがそれに近いことをいつてたけど？」

「そんなこと」

「何かな？」

苛々と声を詰まらせるブラックとは対照的にエミルは悠然とした笑みを溢す。

「わ、分かっています。そんなことよりも……………」

ぶすつと口を開いたものの、いい終わるまでにブラックは、すつと立ち上がり扉を睨む。それから一息つく間もなく、派手な音を立てて扉が叩き開けられた。破壊されなくて良かった。流石、王陛下の執務室の扉は頑丈だ。

「王・宮、面倒臭えっ！」

「――……はぁ」

乱暴に入ってきたのはルカだ。

どうやら各所で足止めを食ったのだろう。最終的には全部、振り払ってきたようだ。後ろからどやどやと武装した兵士たちが集まっていた。

「陛下っ！ ご無事ですか」

「うん。平気だから下がって。彼、僕の知り合い。はいはい、下がって下がって」

雪崩れ込むように入ってきた大人数に、エミルはのんびり歩み寄りつつ、姿勢を正す兵士たちを片っ端から下がらせた。渋る兵士たちに「早く」の一言で最終的には全員引かせた。色々染み渡っているようで従順だ。

「で、何の騒ぎですか？」

「あんた、なんでこんなところで油売ってるんだよ」

犠牲者を出さなかったことを褒めるべきか、もっと冷静に行動するように寝めるべきか迷った末、ブラックはどちらも口にしなかった。

「マシロ、が……」

ルカの口からその名が拳がただけでブラックは、その場から、ふっと姿を消した。

「えーっと、それで？」

残されたエミルは、人払いもしたところだし、是非とも続きを聞きたいところだ。がしっとルカの腕を掴まえて問い掛ける。ルカはブラックが消えたところと、エミルを交互に見たあと、はあ、と嘆息。

「二回も説明するの面倒だ」

「そう？　じゃあ、マシロの店に行こう。そこだよな」

にこにこルカの腕を掴んだままそういつたエミルに、ルカはちらと机上へと視線を走らせ「無理だろ」とらしくなく咎めるような口ぶりだ。

扉は無理矢理閉めたもののその向こうのざわつきは納まっていないうだ。恐らく待機したまま、といったところだろう。もし、本気でルカが暴れたりしたら一般兵などでは役には立たないというのに、ご苦労なことだ。

「良いよ、いける」

エミルは扉の向こうを睨みつけたあと苦笑し、あっさりそう答えると、つつと耳のカフスに触れた。

「カナイ、アルファ直ぐに来て」

いい終わる前に「あれ、何の騒ぎだよ」とカナイが先に現れそれ

に続く形でアルファも現出した。ルカはその様子に、溜息を重ね「身勝手な王様」と毒づいた。

しかしそんな毒は微塵も届くことなく、エミルはにこりと笑みを浮かべて、さくさくと二人へと命令を下す。

「僕これからここ突破するから、退路を確保して。そのあといつものところで合流。ちょっとあつたみたいだから、早くね……ああ、もし、ラウに掴ったら、通さないとストライキ起こすと伝えて」「は？ ストライキって……」

動揺し問い返したカナイを無視してアルファが前に出る。

「もしかして、マシロちゃんに何かあつたんですか？」

「あつたみたいなんだ」

こくんと頷いたエミルの返答を最後まで聞くことなく、アルファはにこりと微笑んで、すらりと抜刀し扉の前で構えて

「んじゃあ、いつきまーすっ！」

蹴破った。

第十九話：夢の始まり

—— …… んー …… 気持ち良い。

枕にごろごろと頬を摺り寄せて。起きなくてはいけないという衝動と、もう少しだけ眠っていたいという狭間でたゆたう。

一番幸せな時間だ。

「—— …… ろっ！ 真白起きろ！ 起きろっつてんだろっ！ 早くしろ、起きないなら、また、置いていかれたーって騒ぐなよっ」
「うーるさいなあ、郁は。起きます。起きます。起きますよー……」

もうあと五分くらいは寝ていたかったのに。

私は、もそもそとお布団から這い出て、枕元においてある目覚まし時計をがつつりと掴む。それを顔の前でまじまじと見て跳ね起きた。

「ちよ、もつと早く起こしてよっ郁！」

「ずつと起こしてたよ。早く準備しろよー」

姉の部屋を躊躇なく開けて悪態を吐いた郁斗に、むんずと掴んだ枕を投げつけた。しかしながら、タイミングよく扉を閉められ虚しく床に転がってしまった。

我が弟ながら本当に可愛くない感じに育ってしまった。

「ふわあ〜」

ベッドから立ち上がって伸びを一つ。
カーテンを開けると今日も良い天気だ。

「――…って、あれ？」

腕を頭上に持ち上げたまま、ふと止まる。

ちよつと待って。

これ、何？

夢？

嫌だな、なんか淒く久しぶりにこんな夢。
ていうか、長くない？ リアルすぎない？ え、私の気がつかな
いうちに月でも重なつた？

いやいやいや、待て待て待て。

「あ、声戻ってる」

耳もあれだけ郁がうるさかったんだから、戻ってる。

――…夢、だから？

「真白ー？ 早くご飯食べなよー？」

「え、あつ、ああ、うん、分かったー」

臣兄の声まで聞こえる。

え、えーつと、夢、ってことは付き合わないと、駄目？ 駄目だ
よね。ということは、私の部屋だし、朝だし……って、ことは学校
に行かないといけない、の、かな？

私は困惑しつつも、身支度を整えて階下へ降りた。

何年離れていたとしても忘れることはない。

私の生まれ育った家だ。

ダイニングテーブルにはお兄ちゃんが用意してくれた朝食が並んでいる。

郁は先に食べたのか、郁斗の席には食べ終わった食器がそのままになっていた。

「郁斗、結局先にいっちゃったよ。真白も早く食べて」
「う、うん」

毎日座っていた席に、そのまま腰掛けてタイミングよく出してくれたトーストを頼張る。

綺麗に焼き色のついたトーストに、甘酸っぱいベリージャム。

私の好きな組み合わせだ。
美味しい。

なんで夢の中で普通に食事をしているんだろう。

そして、抱いた疑問は益々深まる。私はそのまま学校に普通に向い、授業を受けた。ユキやサチたちと他愛もない会話をし、帰りは寄り道をして……既に……

「数日を過ごしてしまった…… ——」

長すぎるだろ。この夢。

もちろん、シル・メシアに落ちたときに最初にやった、頬をつね

るとかそういう初歩的なことはやった。

—— …… 当然、痛かった。

今日も、平穏な日常を送り、帰宅して、がつくりと机に両手をついて頂垂れる。

おかしすぎる。

私は間違いなくシル・メシア。二つ月の浮かぶ異世界に居た。あそこが今の私のホームグラウンドだ。結婚までしたのだ。今更、これが現実ですよというように、元の世界での生活が戻ってきて違和感を感じない。

「なにより、高校生に戻ってるなんて」

私は既に二十歳は優に超えているんだから、若返って嬉しいとかそんな単純に両手放しで喜べるような状況じゃない。

何が私に起こっているんだろう。

一体、何、が……私に起こっているのか……。

『—— …… 眠り病？ とでもいうのでしょうか？』

ふと、前にブラックが口にしていたことを思い出した。

私、もしかして、例の流行り病にでも掛かったのか？
いやいやいや、ないないない。

だって、ブラックも王都まではこないっていったし。

「……私、死んだのかな？」

死んだ先がこれなら、極めて平和だ。

このまま、私はこのもうひとつの私の世界で生き続けるのだとしたら、それもあり、なの、かな……。でも

「ブラック」

夕焼けに赤く染まる空を見つめて、ほうと息を吐く。

もし、私が死んだのなら、ブラックはどうしているだろう。ちゃんと謝っておけば良かった。ちゃんと理由も聞けば良かった。お別れくらいいう時間、あると思ってたのにな。

無意識に、ぽんぽんっとお腹を叩く。太鼓腹が鳴るだけだ。いや、そんな鳴る程、出てはいないと思う。多分。

沢山、道連れにしちゃったな……。――。

こちらで目を覚ましてからカレンダーを見たら、十一月だった。通りで寒いはずだ。

シル・メシアは、凄い寒いっていう期間、凄い暑いっていう期間が短いからあまり実感することはないのだけど、ここではそういうわけにはいかない。

じわじわと深まってくる寒さはいわば元の世界特有のものだ。

「真白！　一緒に帰ろう」

「うん」

時間的な流れとして、私が推測すると一度シル・メシアから戻ったところだ。あのままブラックと一緒に帰らなかったらきつとこうして時間が流れていた。そんな雰囲気だった。

私はいつもどおり、ユキとサチ、三人で学校からの帰り途中まで一緒に歩いていた。二人は今夜のテレビ番組の話で花を咲かせてい

るようで、ちょっとこの世界に疎くなってしまうている私には着いていけない。凄くおかしい話だ。

「――……ねえ、聞いてる？」

「え？ あ、ごめん。聞いてなかった」

そんなことを考えていたものだから、呼ばれていたのにも気がつかなかった。ユキは「しっかりしてよ」と私の肩を叩き私は苦笑する。

何の話だったのかと思えば、気が早い二人はクリスマスの話題に移ってしまっていたようだ。

クリスマス、か………そういえば、昔あつちでもその行事を持ち込もうとしたら変な方向へと流れてしまったことを思い出す。

「真白は予定決まってるの？」

「今から？ まさか決まってるないよ。多分、臣兄が居ると思うから一緒に過ごすと思う。郁は薄情者だから友達と騒ぎにいつちゃうかもしれないけど……」

通例だとそうだ。

両親ともに年末も忙しいから、私のクリスマスのお相手はお兄ちゃんと郁斗がしてくれる。郁のほうはこのところまちまちだけど、一応早く帰るか、遅く出掛けるかで、少しだけ一緒に居てくれる。

「もし、暇だったら一緒にどこか行こう」

ぼんぽんと二人に両サイドから肩を叩かれて、力なく微笑む。私、そんな先まで、ここに居ないといけないのだろうか。嫌、じゃないけど……ここには、ブラックが居ない……。

それに、この二人。

絶対にこの類の約束は守らない。

しかもときめく笑顔で、ごめんねーと男の子に走るのだ。らしいといえはらしいし、それを特に責める気になれないのは二人の特権だと思う。

それじゃあね。と手を振る二人と別れて、私はもう少し先にある自宅までのんびりと歩いた。

確かにハロウィンが終わったあとは、街のオーナメントもクリスマス色が出てくる。

冬のイルミネーションはとても綺麗だと思うし、私も大好きだった。シル・メシアはそういうのあまりない。お祭りも、年に一回だし、それ以外は気が向いたら開催されるのだ。

本当に王宮の人たち——今はエミルもしくはハスミ様が、キサキ。この間は、ハスミ様のところに子どもが一人増えたからと祭りになった。それも必ずするわけじゃない——の気が向いたら。

いろんな意味で適当だ。

それにもう馴染んでしまっている自分も恐いけれど。でも、そっちが私の中で当たり前になりつつある。

第二十話：基本装備でしょう？

あゝあ……夢なんだから、ブラックとか出てきてもバチ当たらないと思うんだよね。

こつんと歩道に敷き詰められているカラフルなレンガを一つ弾く。

「マシロ」

それと同時に聞こえた声。流石夢っ！都合が良いぞっ。

「ねえ、マシロ」

重ねられた声に、私は嬉々として「ブラックっ！」と振り返る。きつと隠すことも出来ない満面の笑みだったと思う。思う、の、に……。

「あんた、誰？」

急激に冷めた。ひゅるるる……と下降していく音が聞こえそうなほど、がっつんと下向きに。

意図せず、瞳を細めて怪訝そうな顔をしてしまう。

「っ?! えっ、ええっ?! い、今、はっきり私の名前を呼んだじゃないですか!」

「いや、違う。そうかと思ったけど、ごめん。人違いです」

いって、踵を返せば慌てて腕を掴める。

「ち、違いますよ。私はブラックです」
「いーやつ、違う」

私は断固拒否した。
強く強く拒否した。

だって……だってっ！

「耳と尻尾がないっ！ そんなブラックさんに知り合いは居ません」
「ちょ……っ、そ、そこですか？ 私の判断基準って、そこですか？」

それ以外にないだろう。何を今更いつているんだ。

大体、それをとってしまつたら……ただの美形じゃないか。そんな知り合い居ない。というか、真面目に恥ずかしい。

真っ直ぐ見れない。

こっち見んな馬鹿っ。

私は意図せず赤くなる顔をぶいっつと反らした。

「マシロが、こちらでは有り得ないというから……」

その台詞にじわりと視線を戻す。

くっ、本当に無駄に美形だ。嫌というほど美形に囲まれて生活したから、もうどんな美形にも動揺しないつもりだったけど……やつぱり好みというものがあつて……残念ながらブラックは私のドストライクなのです。

でも、話を聞かないというわけにもいかないから、じわじわと若干遠巻きに顔を上げた。

「取り外し出来たの？ やっぱり」

「……やっぱりってなんですか……出来ませんよ。ちょっと見えなくただけです」

触ってみますか？ と私のほうへと腰を折ったブラックの頭へと恐る恐る手を伸ばして、ふわふわと撫でる。

あ、本当だ。

何かある。

気持ち良い。懐かしい……幸せ。

「元氣、そうですね？」

「え？」

私がしつこく触るので、ブラックはそつと私の手首を掴んで姿勢を正した。そして、そう告げた顔はどこか切なげだ。

夢の中で元氣というのも妙な話しなのだけだ。

「——……」

と、それよりも。

私はブラックの腕をぐいっと引いて歩き始めた。あつちで居るとき以上にブラックは目立っている。買い物帰りの奥様方や、学校帰りの女の子たちの視線が痛い。

本人は見られるということに慣れている人種だから気にしないみたいだけど、私は気にする一般人だ。

丁度家の近所には公園がある。

滑り台と小さな砂場だけの小規模なものだ。この時間になれば子どもは家に帰るし、人気がないに等しい。私はそこまでブラックの

腕を無言で引いて、少しだけ急いで到着した。

私が促すまま、ブラックはその内の端っこにあるベンチに腰掛け、ふ……と空を仰いだ。

一番星がもう出ている。

「月、本当に一つしかないんですね」

「うん、まあ、そうだね」

「ここが、マシロが生まれた世界、マシロを育んだ世界。空気もそこに満ちる力も全く違う……凄く、不思議ですね」

いや、私が今、不思議なのはブラックさんが異世界堪能しているところなんですけど。

「え、えーっと、夢。だよな」

「ええ、八割くらい夢です。現実に近い夢。ほぼ現実のような夢。ここで、もし命を落とすようなことがあれば、本当に死んでしまいますし、ここにずっと居続ければ、やはり同じように死んでしまうでしょうね……」

「え、ちよっと待って、この世界でブラックはイレギュラーだよな。平気なの？　というか、どうしているの？」

よく分からないけど、今のブラックの台詞ではブラックがここに居るのはおかしいような気がした。とても不自然なことのように思えた。

だから、そう訪ねた私にブラックはやっぱりと微笑んで私を見詰める。

綺麗な夜の色をした瞳に見つめられ、とくんつと心臓が跳ねた。とくとくと心地良い緊張。じわりと胸が温かくなる。

「私たちは、一緒に居なくてはいけないでしょう？　だから、入り込んだんです……貴方の夢に……」

「え」

「少し揉めたので、時間が掛かってしまいましたが、なんとかしたので、私は今こうしてここに居ます」

ほら、触れられるところに……いつて私の手を取る。

少しだけ冷たい手のひらが私の手を包み互いの温度を伝え合う。

夢なのに……温度的なものを伝え合えるのは不思議だけど、私たちの吐く息は白い。だから、ブラックがいった限りなく現実に近い夢というのはこういうこと、なのだろうなと理解した。

「じゃあ、私まだ死んだわけじゃないんだ」

「ええ、もちろん。今は、まだ……だから私はこうして迎えに……」

いいかけて、ブラックは刹那口を噤むと、ゆっくり首を振って

「共にあるために来たんです。マシロと命運を共にするために」

空いていた手がふわりと私の頬を撫で、指先がつうと輪郭をなぞる。くすぐったくて心地良い。ふっと降りてくるブラックの影に瞼を落としそうになって、はたと気がつく。

「っだ、駄目だよ。ここじゃ駄目」

「——……え」

くつと腕を突っ張った私にブラックは驚いたように瞬いた。

「誰も居ませんよ？」

「誰か通るかもしれないでしょ？　ここ、家の近所なんだよ……その、えーっと、兎に角駄目だよ」

「そこまで気にしなかったでしょう？」

可愛らしく首を傾げられても、ちよつと困る。

確かに気にしなかった。異世界では。

あそこでは家族に恥をかかせてしまつ心配もなかった。でもここではそんな勝手は違う。噂になるのも、家族に見付かるのも抵抗がある。

例え夢に近い場所であつても。

「――……そう、ですよね」

私があわあわと考え事をしている間に、ブラックは何事かに行き着いてなんだか納得しているようだ。私から手を離して、泣くように笑っていた。

どうして、そんな顔するのか測りかねるけれど、ずきりと胸が痛む。

「私はマシロに“嫌い”だと宣言されてしまっていますし」

「え」

「店に強く残っていました。私も、ルカも、嫌いだと。こんなところ出て行くと……」

ふわふわふわあつと身体中が熱くなる。

別にブラックに直接いったわけでも本気でももちろんない。けど、ブラックは素直だ。

口にしたそのままを信じてしまふのは常。
当然の反応だと思う。

あれから、声が出なかつたりしたから、説明のタイミングが全くなかった。違うと口を開くより早くブラックは「すみません」と続ける。

「知っていたのに、私は、それを知っていたのに……マシ口を探しました。気配すら消していたので、貴方の本気は分かっていたのに、それでも、どうしても……耐えられなくて、探しました」

しょぼしょぼと告げ、がりがりと足元の土を掻く。

「無理に連れ帰り、あれほど拒絶されても尚、なんとか掴まえておこつと……結局こんな遠くまで逃げられてしまいました。追い掛けてきてしまいました」

すみません。と苦しそうに重なるブラックに何もいえず、また、私は一言だけ「ごめん」と口にした。私は好きでここに居るわけじゃなくて、迎えに来てくれたというのなら、シル・メシアに、連れて帰って欲しいと思う。

そう、思うのに、それを口にするのは憚られて自分の軽率な発言にブラックを深く傷つけていたことを今更ながら、強く痛感した。

第二十一話：白猫のお手柄

「ブラック」

「あ、はい」

「あの、まだ聞きたいこといっぱいあるんだけど、あとで話すから、その、夢でも」

「今はここがマシロの現実です」

「そう、なの？ それなら、それで、ブラックの生活拠点とか、色々考えなくちゃ……」

あわあわと口にした私にブラックは「そんなこと気にしなくても」と笑う。

でも気にするよ。

私があつちに落ちたときはブラックの家に泊めてもらったし、いろいろ面倒してもらったから困ることもなかったし、だから、こっちでは私がちゃんとしないと。

「えーっと、猫になれる？」

一か八かで聞いた私にブラックは少しだけ考えるように目を閉じたあと「なんとかかなると思います」と微笑んだ。それなら話は……早くないけど、早い。元の姿でいられるよりは扱いが楽になる。

じゃあ、こっちに来ると私はブラックの袖を引き何とか道路からの死角になる位置へと引き込んだ。

「ここのなら、誰からも見えないだろうから……人が通らないうちに猫になって」

さあさあと急かす私にブラックは、誰からも見えない……と意味深に私の台詞を繰り返したあと、私の身体をぐいつと引き寄せて顎を取る。

そして、拒否出来るタイミングを逃し、上向かせられると唇が重なった。

少し乱暴なくらいの口付けだけど、凄く久しぶりな気がする。

夢のような現実。

現実のようにリアルな夢。

私の理解が及ぶところではないことは分かった。

けれど唇から伝わってくる熱は夢とは思えない。抱き締めて離さない腕に幸せを感じる。

ああ、好き、好きだよ。

あんな風に傷つけるなんて、私は酷い女だと思う。

だから、掴んだぬくもりから距離を置くのは私も辛い。辛いけれど、いつまでもここでこうしているわけには行かない。私が、少しだけ終わりの意思表示をすれば、ブラックは素直に私を解放してくれた。

離れた瞬間外気が熱を奪って酷く寂しい気がした。

反射的にもう一度といいそうになって飲み込むと、ブラックの胸に添えた手に力を込め、顔を逸らし「お願い、早く」と急かした。

「……………」

刹那落ちる沈黙が痛い。

その言葉に従って、ブラックはふわりと淡い光とともに黒猫の姿になった。そして、足元に擦り寄ってくるブラックを抱き上げて「

とりあえず、遅くなったから帰ろう」と急ぐ。

「――……真白。分かっていると思うんだけど」

「分かっている。分かっているよ。お父さんが動物アレルギーだからペットは駄目なんだよねっ！ 分かっているんだけど、お願い。私の部屋から出さないから、だから許して」

家に帰る早々、遅かったからと心配して出てきた臣兄に懇願する。強く強く。

これまで何度も諦めてきたペット問題。だからこそ、きっとこれだけ強く押せば臣兄なら……

「仕方ないな。許してもらえように僕からも頼んであげるよ」

こうなる。

「ありがとうっ！」

満面の笑みで告げれば、困ったように微笑んでいた臣兄も頷いてくれる。

「もう直ぐ夕飯だから着替えたら降りておいで」

そういつて私の背を二階へ続く階段へと促すようにそつと押してくれる。

私は二つ返事で「分かった」とブラックを腕に抱いたまま、駆け

足で自室へと入り後ろ手に扉を閉めると片手で鍵をかけた。

今まで必要ないと思っていたけれど、今日はこの鍵があつて良かったと初めて実感した。

そして、ほうと一息吐いた私はそつとブラックをベッドの上に載せて、鞆を机の上に置いた。

「マシロの部屋久しぶりです」

「そっか、そう、だよね」

ブラックは一度だけこの部屋に来たことがある。そのときは部屋がどうなんて考える余裕、お互いになかったけれど。

「シル・メシアに行くまではここで過ごしていたの」

どう？ と聞けばブラックは元の姿に戻り少し考えてから「狭いですね」と素直に口にする。

着眼点が微妙にずれているけれど、確かにお屋敷生活しかしていないブラックにしたならこの家も、この部屋もとても狭いだらう。

でも、普通。

もしくはそれよりは広いほうだと思ふのだけど。

「ですが、可愛らしいですね」

ひょいと枕元においてあつたぬいぐるみを抱き上げて微笑む。

因みに、黒猫のぬいぐるみなのに深い意味はない。意味はないよっ！ とりあえず、自己突っ込み。

「それで、えーっと私あまり状況を把握していないのだけど、何か聞いたら良いのかな？」

「なんでもどうぞ、私に答えられることなら」

なんでもというのは、とても心強いが難しい。

まあ、時間はゆっくりあるみたいだし、大丈夫、なのか、な？

私は制服のリボンを解きながらクローゼットを開き部屋着を取り出しつつ思案する。

「私、なんでここに居るのかな？ 夢ってことは身体は別なんだよね？」

「寝ています。深い深い眠りに……どこまで覚えていますか？」

問われて、うーんっと唸る。

「確かあの日、私は温室の様子を見に行ったの……見に行つて、水を上げようと思って……」

「ええ、マシロは温室で倒れていたそうです。ルカが見つけて部屋に運んでくれた。マシロは流行り病にかかってしまったのです」

「え」

というか、やっぱり。

なんだけど、どうして、私だけ？

王都で何か病気が流行っているような風はなかった。閑古鳥が鳴いているとはいえ、うちは薬屋さんだ。流行り病のようなものが出たら情報が入る。

「流行というよりはマシロが第一号で、唯一になると思いますが……」

どーいう意味だ。

あまり良い意味合いに取れなくて眉を寄せると、ブラックは苦笑して「すみません」と謝ったあと話を続けた。

「覚えていますか？ 名もなき花を」

「あ、ああ、あれ？ あれなら、そういえば咲いていたような気がする。いや、もう色が微妙すぎて開花してるのかどうか良く分からなかったけど。一応あれにも水を」

ああ、そうだ、あの茶色の地味な鉢植えにも水をとったはずだ。そこで……。と、私が行き着いたことを悟ったのか、ブラックはにっこりと微笑んで「あれは新種だったんですよ」と続ける。

「今回はルカのお手柄です。ルカが、あの花の異常にいち早く気がついてくれた。ですが、確証がなかったから色々検討していたようです」

「もしかして、それで図書館に入り浸ってたのかな？」

「だと思いますよ。そして、確実に危険なものだと分かったから戻ったら……」

「私が倒れてた、と？」

ぼつりと続ければ、そうですね。と苦笑された。

「私も突然変異で新しく出来たものまでは知識は追いつきません。ですから、気がついて差し上げることが出来なくて……」

そんなことにまでブラックは責任を感じる必要はない。

何にでも初めてというものはあって、それにまで知識が及ばないことを責めるつもりはない。そんなことといえば、ブラック以外はみんな責められてばかりになってしまふ。

筆頭はもちろん私。とはいえ、どうしても良いとまでは口には出来ないから話を勝手に進める。

「じゃあ、シル・メシアの私はどうなるの？」

「一応カナイに生命維持だけは出来るように言伝てきましたから、大丈夫ですよ」

「……ブラックも、大丈夫、なんだよね？」

「——……まあ、恐らくは」

ブラックは、困ったように微笑んだ。

「私は、こうしてマシロの声が聞きたかったんです。だから、それ以上はあまり考えていなくて……もしも、マシロが目覚めるならきっと私も覚めますよ」

「そんな……確証もないようなことで動かないで……無茶、しないでよ……」

呆れる。

いくらなんでも、後先考えなさすぎだ。

多分、きっとみんなが私を助けてくれているなら、ブラックのことも助けてくれていると思う。私はそう確信出来るけれど、ブラックは私を通してでしか他人を信用出来ない。だから、きっと本気で終わりになっても良いと思ってここに居るのだと思う。

「どうすれば、私は目が覚めるの？ 帰れるなら帰ろう？」

そういった私にブラックは切なげな顔をする。

「帰りたいのですか？」

「え、もちろん」

即答出来るくらいの勢いもある。

もう、ここで何日も過ごした。タダの夢にしてはリアル過ぎて、長過ぎて。困惑する。だから私の元の世界に帰りたいと思うのに、思っているはずなのに。

それなのに、ブラックは首を振る。

「嘘は吐かなくて構わないですよ？ マシロがここに居るということは、貴方はここで何かを望んでいるんです。何かすべきことがある。もしくは……」

「私の居場所は、ここじゃない。シル・メシアでしょう？ ブラックの隣りでしょう？」

「……私はここに居ますよ。よく、考えてみてください」

貴方の望みを…… —

第二十二話：雄です。

ブラックのいつている意味が分からない。

夢だというのなら覚めれば良い。

それだけのはずなのに、私がこの夢を見る意味を考えるといつている。

この世界はただの思い出だ。私の居場所じゃない。

そのはずなのに、ブラックにそう告げられると、胸の奥がぐらりと揺らぐ気がする。

でも、そんなことをいわれると、私がシル・メシアを選んだことを後悔しているのではと疑われているようで、面白くはない。

もう、何もかも今更なのに……。

「夢というのは捕らえるものです。悪夢にしろ良夢にしろ、見るものを捕らえて離さない。だから、自らの意思で目覚めるのは、とても……そう、とても難しいのです」

戸惑っていた私の手をとってそう告げるブラックは、私の手の甲にそつと口付けを落とす。

「私はマシロと運命を共にします。隣りに、傍に居ます。それをどうか許して……」

真っ直ぐに見上げてくる瞳に胸が熱くなる。

—— ……ドンドン！

もう一度何か口にしようとしたら乱暴に扉が叩かれた。
私はびっくりと肩を跳ね上げ、ブラックは、ずっと猫に戻る。

「おい、猫飼うことにしたって聞いたけどー？」

郁斗だ。

私は、あわあわと鍵を開けて扉を開く。郁斗は不思議そうに眉を寄せて「なんで鍵なんて閉めてんの？」と首を傾げ、私を横へ追いやって「どこどこ？」と部屋の中を見回す。

「おい、本当だ。^{マジ}黒猫かー、美人だな」

ベッドの上のブラックを発見して、郁斗は無遠慮に歩み寄るとブラックを抱き上げた。

「男かー……」

なぜ残念そうなのだ。というか、恥ずかしいから、でろーんって抱き上げるのやめて、もっと丁寧に扱って……ブラック我慢してくれてありがとう……。

「あ、そうそう、飯だつて。この猫、名前何？」

「ブラック」

「お前の名前の付け方に愛情を感じない……」

「う、うるさいなっ！ 私の猫なのっ！ 触らないでっ」

ぶすつと不貞腐れて郁斗の腕の中からブラックを奪い返す。ぎゅぎゅっと抱き締めれば、ごろごろと擦り寄る。

実に猫らしい。
完璧だ。

「んな、むきになるなよ。それに、鍵もやめとけ……猫なんだから、そんなことしなくても逃げないだろ？」

直接郁斗は口にしないけど、私が一度居なくなっただけからとても心配性になっている。

鍵の心配もきつとそういうところから来ているんだと思う。

私は「分かった」と頷いて、着替えるから出て行けと、郁斗を追い出した。

ばたんつと扉を閉めると「あれ、弟の郁斗」と腕の中のブラックに一応遅れた紹介する。

「引つ搔かないでいてくれてありがとう」

苦笑してそう付け加えれば、ふるふると私の腕の中で首を振る。
可愛いな。

さて、まだまだ話は尽きないけれど、先にやっとなんといけな
いこともある。私はそつと足元にブラックを降ろすと、途中になっ
ていた着替えに取り掛かる。

とりあえず降ろすときにこつち見るなと告げたけど、多分意味は
ない。

「んー……と、あー！」

上着を脱いで、ハンガーに引つ掛け、シャツのボタンに手を掛け
たところで声を上げる。

一番初めに訂正しておかないといけないことを、先送りにしてし

まっていた。そして、振り返るとベッドの上で丸くなっていたブラックは顔をあげ、すっと元の姿にまた戻る。

それにしても、本当に猫耳がないだけで、この破壊力はなんだろう。

もう、何度となく重なるけれどっ、エミルの比じゃない——単に好みと慣れの問題——気がする。

ぱあっと自分の顔が赤くなるのが分かる。

「あの、えーっと、その、ね……本気じゃないから、」

「ごによごによと告げた私にブラックは首を傾げる。

「だから、その、本気じゃなかったの。嫌いだなんて、その、私どうかしてて……」

あのかきは本当に頭に血が上っていてどうすることも出来なかった。

自分の口から出る暴言も押さえられなくて。ぎゅっと出したばかりの部屋着を握り締め、ブラックの顔を見ることが出来ない。

「本当ですか？」

と声を震わせるブラックに、こくこくと何度も何度も頷いた。

沢山の好きを重ねても、たった一度の『嫌い』の破壊力は半端ない。私は今、どうして？　と思うけど、もし逆だったら、私はそれを跳ね除ける勇気はなくて、やっぱり今のブラックと同じように傷付いて頼りなさ気に不安に支配されてしまふと思う。

「ごめ……」

「謝らないでください。謝らないで……」

いつの間にか歩み寄り、目の前に居たブラックの両手が私の頬を包み、愛し気に何度も撫でる。早く下に降りていかなくはいけなのだけど、ブラックの長い指が肌に触れると離れることを強く拒む。

少し肌寒いくらいの室内も暖かく感じる程、ふわふわと体温が心地良く上昇する。

恐る恐るブラックの顔を見上げると、目尻がほんのり赤らんでいて、瞳は潤んでいる。嬉しいが身体全体から滲み出ている。

良かったと心底感じたのと同時に、私は背伸びをして、瞼を静かに閉じた。

顔にブラックの影が落ちると優しい暖かさに包まれる。胸のうちから湧いてくるようなぬくもりが柔らかな部分から伝わってきて私を満たしていく。

ああ、本当に今、目の前にブラックが居る。

私のためだけに、もしかしたら嫌われたかもしれないと思いつつも、こんなところまで来てくれた。

凄く、凄く嬉しい

ぼさつと手にしていた服が床に落ちるのも気にせず、私はブラックの背に腕を回した。

「来てくれてありがとう……よく、分からないけど、少しだけ、考えてみる。それから……私もブラックに聞きたいことがあるの」

ちゅっと軽い口付けで離れてブラックの瞳を覗き込む。

「それで、私が嫌われた理由が分かりますか？」

くすりと微笑まれて、今度は私の方が眉を寄せる番だ。

「意地悪、だよね」

「大好きなんです……」

許してください。と強く抱きしめられたら許さないわけない。というか、ブラックが私に甘いと同じだけ、私だってブラックには甘いのだから当たり前のこと、なんだけどな。

第二十三話：馴染みすぎじゃないですか？

「マシロの世界は面白いですね」

「……なんかブラック馴染みすぎだよね。フツーに馴染んでるよね」

翌日は学校が終わるのが待ち遠しくて仕方なかった。

昨夜はゆっくり落ち着いて話を、ということが出来なくて、大事な話は今日に回した。

ブラックには家で大人しく待っていても良かったのだけど、それってなんだか、私が家にブラックを縛り付けるようで気が進まなくて、好きに過ごしてもらうことにした。

そして、夢なのに、テスト期間ということもあり早く終わって嬉々としてブラックと合流する。

昨日会ったときも思ったけど、顔とスタイルが良いのは置いといて、それ以外全く違和感がない。服なんて、まんま雑誌とかに出そうだ。

この辺がもつと都会的なところだったら、確実にスカウトとかされてるだろうなと思う。

他にどのくらい違和感ないかというと、車に驚いてくれたりしないし、テレビにも昨夜驚かなかったし……ちよつと面白くない。

そういうのって、異世界召喚的な雰囲気として、押さえておかないといけないような気がしたんだけど、ギャップ的なものは感じないのだろうか？ 残念すぎる。適応能力高すぎる。

「昨日と先ほどまで、マシロが学校に行っている間、暇だったので、一応書店で勉強したんです。読み書きも多分対応出来ると思います。もし、変なことといってたら教えてくださいね？」

「――……優秀なんだね」
「普通ですよ」

謙遜している風ではなく、本人的には本当にそれが普通なのだろう。ということは私より余程今現在の時勢に詳しそうだ。

「見た目も、おかしくないですね？」

今更そういつて、自分の格好を確認している。

「おかしくないよ。格好良いと思う。私なんて不釣り合いなほどに、ね」

ちょっと面白くない。

もういつそ、耳と尻尾出しっぱなしで変質者扱いでも受けければ良いのにと、可哀想なことを平気で思ってしまう。

そんな私の心内を感じたのか、ブラックは嬉しそうに微笑む。

「色々見ていて思ったんですけど、本当に皆マシロと同じように種を持たないのですね……凄く自由度が高い。そして、皆平等に学を修める。偏った知識ではなく。平均して皆が持つことが出来るようなシステムが出来上がっています」

のんびりと並んで歩きながらそんな話をする。

確かに、専門的なことを学ぶにしても、シル・メシアほど偏ってはいない。あちらは極端にいうならイチかゼロかなところがある。

「それにとっても美しい。昨夜屋根から見下ろした夜景は素晴らしかったです」

「……危ないから屋根に上らないでね」

「大丈夫ですよ、猫ですから」

にこにこ好奇心丸出しで話をするブラックは珍しい。

「そうだ、このままデートしようか？」

制服のままでけど、まあ、良いよね。

そんなブラックを見て、にこりと提案した私にブラックは「マシ口さえ良ければ」と微笑む。

—— …… うっ …… 私にだけでも猫耳見えたほうが良いです。

慣れなくて心臓に悪い。

ぱあっと、頬が赤らむのを隠すように視線を逸らせば、ブラックはくすくすと楽しそうに笑って話を続ける。

「そういえば、ふらふらしていたら、色々貰ったんですよ」

貰ったというから、ポケットティッシュとかその程度のものかと思っただけで、ブラックが私に差し出してくれたのは名刺多数だった。

よく分からない出版社とかもあったけど、裏を返したら知っている雑誌の名前とか並んでいた。そんな妖しげなものもいくつかあったけど、有名どころもちりほらり……。

「気が向いたら連絡するようにいわれたのですけれど、したほうが良いのですか？ 何かのこちらでしないといけない契約的なもの？」

「……まあ、契約といえば契約だけど、しなくて良いから」

「仕事がどうとか。私こちらの通貨は持っていないので、何かしたほうが良いですね。金銭的な問題は自分で何とかしなくては、マ

シロに何か差し上げること出来ないし」

—— ……夢の中でまで自立しようとしないうでください。

はあ、と溜息を吐いて「必要ないよ」と溢し、目に付いた一枚をひらりとブラックへと見せる。

「間違ってもこういうところへの就職とか考えないでね」

ぶすつと口にした私にブラックはそれを手に取り、首を傾げ「どうしてですか？」と質問してくる。なんと説明すれば良いだろう？ やや迷ったあと私は丁度良いことを思い出した。

「私がルージュさんのお店で働いたときのこと覚えてる？」

人差し指を立てて、くるくると回しながらそういった私にブラックはとても渋い表情をする。ちゃんと覚えてくれているようで良かった。

「それと同じ。そういう職業を否定はしないけど、ブラックには関わって欲しくない」

因みにホストクラブの名刺だった。

こんなところにもそういうお店が出来たのだな、ということにはしみじみしたけど、ブラックがホスト？ やめて嵌りすぎるから。フツーにナンバーワンとかなりそうで恐い。

「分かりました。嫉妬ですね」

「……う、うん……まあ、それで良いよ」

もつと複雑な部分もあるのだけど、ブラックが嬉しそうなのでそれだけで良いや。

そして、ブラックのもののだけど、私にくれたのだから私が好きにしても良いはずだ。ブラックが手にしていた一枚も奪い取って、私は、何の躊躇もなくびっぴつと細かく千切る。

それから、丁度通りかかったコンビニのゴミ箱へと捨ててしまった。別に私の行動にブラックは何もいわない。

ゴミはゴミ箱。

間違っていないせん。

でも、本当は名刺を簡単にあんな風にしちゃ駄目だね。ごめんねと心の中だけで謝罪する。

ふう、ブラックに就職難とか関係なさそうだ。
引く手数多で……で、本当に馴染みすぎ。

「それに、ここに長く住むわけじゃないんだから、仕事とか金銭的な心配まではしなくて良いと思うの」

「―― ……住んでも構いませんよ」
「え？」

驚いて隣を見上げれば、私の視線に気が付いたブラックは私を見ると、可愛らしく肩を竦めた。

「冗談です」

「……そう、だよな。もう！ ブラックの冗談は分かり辛いんだよ」

そついつて腕を絡めブラックの手を取る。

なんとなくどこかへいってしまいそうで恐かった。

私は夜景が綺麗だと感嘆していたブラックに、もっと高い位置から見せてあげようと展望台を目指していた。山の上にある展望台で、途中からはロープウェイが通っている。

ゆつくりと山間を登っていくロープウェイは平日ということもあり、私たちの貸切だった。

「こういうのはあちらにもありますよ」

「そうなの？ 私見たことないよ」

「ええ、王都にはありませんね。天文台に登るところにあるんですよ。私は乗ったの初めてです。随分のんびりなんですなー」

高速だったりしたら、かなり怖いと思います。

そんな話をしている間に、山頂まで到着して、がこんつと揺れると、そつと支えてくれる。そのまま手を引いてもらって降りると、展望台までの道をゆつくりと歩いた。

冬は日が暮れるのがとても早い。

さつきまで空が赤らんでいたとしても、もう暗くなる。あまり遅くならないうちに帰らないといけないけど。

ブラックは、上り詰めた展望台の柵にお腹を預けて、少しだけ身を乗り出す。

あちらで居るときよりもずっとテンションが高い。
とても楽しそうに見える。

私とその隣り並べば、にこにこ口を開いた。

「見てください、マシロ。凄いですね。光が川のようにです」
「今、季節だからね」

「季節？ 寒い頃という意味ですか？」

「冬の寒い時期はイルミネーションが映えるよね。冷たい空気が良いのかな？ それにクリスマスが近いから」

「マシロが以前サンタクロースという篤志家の話をしたアレですか？」

「……うん、そう」

もう訂正するのも面倒臭い。

私が頷くと「なるほど、これも彼の力ですか」と微妙ずれたところで一人納得したように首肯して、又階下を見下ろす。

その横顔は外灯の僅かな明かりに照らし出されてとても綺麗だ。でも、見ているとどこか切なく感じてしまうのはなぜなんだろう？ 少し怖い。

「ブラック？」

「……はい」

「何、考えてるの？」

「冷えるのでマシロを抱え込んでも怒られないかどうか思案していました」

いうのとはほぼ同時に、柵と自分の間に私を入れて抱き込んでしま

う。

暖かい……。

寒い日の平日こんなところには人っ子一人居ない。ここまで来て知り合いに会うということもないだろう。私は素直にブラックに体重を預けて暖を取る。

「さっきの……本当に冗談だよね？」

首を捻ってブラックの顔を見上げると、ちらとだけ視線を投げられて「ええ、もちろん」と答えてもらっけれど、なんだかやっぱりうそ臭い。

「ここが夢なら、覚めないと……」

真面目にそういうのに、ブラックは困ったように微笑んで「当然です」と相槌をうち、でもそれ以上何もいわせないように、ふっと顔を近づけて唇を重ねた。

「……ん」

唇の端から漏れる吐息が白い。
繋がっている触れている部分だけが暖かくて、その分相手の存在を強く感じる。

でも、はぐらかすためのキスなんて、ブラックらしくない。
いつでもブラックは私に対して真摯な態度を崩さない。崩さないはずなのに。そう思うと胸が苦しい。ちくちくと痛む。
僅かな疑問が不安に変わる。

「—— ……聞きたいこと、聞いても良いですよ」

僅かに降りた沈黙のあと、私の肩口に額を擦り付けたブラックがぼつりと口にする。

私は少しだけ悩んで、それでもそのままには出来ないから「うん」と頷いた。

第二十四話：大切なものの優先順位

大きく深呼吸。

口にする前から全身がときどきと強く脈打っている。

口の中が乾く。

何から話せば良いだろう。

順を追って、そう、思うのに結論を急ぐ。

なぜ？ が頭の中を駆け巡る。

私はもう一度深呼吸を重ねてから意を決した。

「どうして、いつてくれなかったの？」

「？」

「ルカもブラックも気が付いていたんでしょう？ どうして、私が蚊帳の外にいないといけないの？ 私は関係者で当事者でしょう？

どうして……」

ルカから聞いたときの苦い思いが蘇り、声が震える。

怒っているわけじゃない、悲しんでいる……うつん。分からない。ただ、納得がいかない。

ブラックは、細く長く息を吐き私の髪に顔を埋めつつ、すみませんと謝罪する。

謝って欲しいわけじゃない。

謝って欲しいわけじゃなくて、私は理由が知りたい。

「あの日、私は翁のところからの帰りで少し浮かれてた。不安がな

いといえば嘘だけど、でも、喜ばしいことに変わりはないでしょう？」

「……すみません。私には嬉しいかどうか喜ばしいのかどうか、分かりません。マシロが喜ぶのならそれが一番だと、そう、思います……マシロはハーブ園の……アリシアでしたか？ 彼女のときとても喜んでいましたし、それと同じくらい切なそうな顔をしていました。だから……できればと思ったのです」

「そ、それならっ！ それなら、分かったとき直ぐにでも」

ぽんつとブラックを背で弾いてくるりと振り返り、向き合って見上げる。

ブラックはとても困った顔をしていて、どうして私が怒るのか分からないという体を崩さない。

本当に不思議そうに首を傾げる。

そして、暫らく私を見詰めて「本当に……」と口火を切る。

「直ぐに駄目でしたよ？ マシロ……悲しむでしょう？ 知らないほうが良いと思ったんです。また、機会はあったし、それなら、無駄な悲しみなんてないほうが」
「ブラックだって辛いでしょうっ」

私は聞いただけで、吐きそうなほど辛かった。

苦しかった。

頭が真っ白で何も考えられなくて、どうして？ だけがぐるぐると支配していた。

「辛くないですよ？ どうして、そう思うのですか？ マシロが痛まないなら私は痛くないです。辛くないです」

「——……っ」

ブラックをとて遠くに感じる。
こんなに近くに居るのに。

暖かさも鼓動も伝わる距離に居るといふのに、とても遠い。

同じ感情を共有することが叶わない。

ブラックには私が中心で、それ以外の命なんて重くないし意味が分からない。

きっと、それが我が子でもそうなのだろう。

私なんて今だって、口にするのも躊躇する。

それなのにブラックは、きょとんとしている。本当に何も分からない子どものように不思議そうにあっさり口にする。

だから、今も私の言葉の意味が分からない。

「マシロなら知れば悲しむと思いました。だから、ルカにも口止めしました……子どもには無理だったようですけど……」

「……」

「マシロが辛くなければ、私は辛くないです。何も感じなくてすみません。マシロが傷付くだろうことは察することが出来るのに、他の事はまだ良く分かりません」

そんな風にしょんぼりとされると私もそれ以上は強くいえない。私は長く息を吐き、こつんとブラックの胸に額を押し付ける。分からなかっただけ、私にとって良かれと思ってそうした結果だ。それを気に入らないからといって私が一方的に臍を曲げてしまった。

間違っではないと思う。普通だと思う。でも、相手はブラックだ。他の誰かじゃなくて、ブラック。そう考えたら仕方のないことだったのかもしれないと思えてしまう自分に苦笑する。

あの日、体調が芳しくなくて、仕方なく用事のあった序に翁のところへいった。そして、その結果私は懐妊を告げられ心躍っていた。

それなのにル力はあっさりと「ああ、また？」と口にしたのだ。

また。

と……怪訝な顔をした私にしまったと慌てたから言及したら……、以前にも一度兆しがあったらしい。それは私が気が付けないうちに幕を閉じた。

私は私が全く知らないうちに新しい命を消してしまっていた。

『ブラックさんだって知ってた』

そういわれたとき、頭に血が昇ってしまった。

私だけ、私だけ知らない。苛々して止まらなかった。私はブラックのことが大好きだ。信用しているし、彼のことを分かりたいと思っている。でも、ブラックは違った。私だけ、わたしだけ。

私は当事者のはずなのに、偏った愛情によって知らずに安穩と過ごしていた。堪らなかった。

「私やル力は見ることが出来るんです……特にマシロは種を持たない。だから、よく見えるんです……伝えられなくて、いえなくて、すみませんでした……」

何も聞きたくないと思った、もう、私から罵るようなこともした

くないし、だから、話もしたくないと思った。

そう……私は、分かった。ブラックが、私のことしか考えられないことくらい……そして、それはとても偏った感情であることも

「マシロ……泣いているんですか？」

「——……」

私が喜ぶだろうと、子どもを望み。

私が悲しむだろうと根付くことのなかった命の存在を伏せた。

「私たちは、大切なところで擦れ違ってる。肝心なところで私は独りにされる。守られてばかりだから、こんなことに……私がもっと強ければ、その信頼に足る存在だったら」

私が心身ともに強いと認められていれば、隠されなかったかもしれない。私はとても弱くて不安定。情けないことにそれが事実なのだろう。

でも、でも…… ——

ブラックは何をいって良いか分からなくなっている。

困惑し混乱している。

それが分かるのに、私は続けた。

「あのとき、私、同じだけ貴方も傷付けば良いと思った。私サイテーだから、私が居なくなれば、自分の意思で出て行つたと知つたら傷付くと思った。それなのに、私の思惑通りに拒絶され傷付いたブラックを見て、私はまた傷付いた。もう、どこで間違つたのか分からないよ」

私も、もう分からない。

そう続けた私をブラックはただ静かに抱き寄せた。

今は、ちゃんとブラックの鼓動が聞こえる。外気に冷えた服が私の頬の熱を奪っていつてくれる。心地良くて静かに呼吸を整えた。

「今度は、無事、だよな」

「え、あ……はい。もちろん」

「そっか……じゃあ、早く戻らないと……」

ブラックと二人で…… —

静かに目を閉じて、ブラックのぬくもりを感じる。鼓動を感じる。私の居るべき場所は、もう、この場所ではない異世界だ。そしてこの人の隣りにしか私の居場所は存在しない。

それでも尚、やりのこしたこと、か。

—— …… ——

「ねえ、マシロ」

少しだけ遅くなってしまった。

家には電話を入れておいたし、大丈夫だろう。帰りはのんびりと歩いて降りた。

緩い坂道の両脇の明かりだけが頼りだけど、こちらのほうが慣れたものだ。シル・メシアの夜はこの世界ほど明るくはない。

きゅっと繋いだ手に力を込められて、私はそれに応えるように振り仰ぐ。

見上げた私と視線が絡むことなく、ブラックはぼんやりと前を見てぼつりぼつりとどこか不安そうに零した。

「私はマシロしか大切に出来る自信がありません。実感が湧かないというか、そういうレベルではなく……愛することは出来ない、そう、思います」

「——……うん」

ブラックが告げる言葉は、普通に聞けば薄情であると思うし、この世界の常識からいえば有り得ないと思われるしまっても仕方ないと思う。

けれど、私にはなんとなく分かる。私はブラックを知っているから。彼が異世界であつても異質だといわれてしまうことも、その理由も、もう、なんとなく私には沁み込んでいるから。

ブラックの腕に腕を絡め、こつりと頭を擡げる。

それでも、私はこの人が好きでこの人を選んだ。

間違つたなんて一度も思つたことないし、これからもそう思うことなく、私は愛されると思う。自惚れでも何でもなく、きっと、それだけは絶対なのだと、そう思える。

それに、欲しいと思つても、それがリアルな話しになつてきたとすれば、私だつて、分らない。

少なくとも私は大切に思うと思う。

その私をブラックが大切に思ってくれるなら、そう悪いことにはならないと、楽観的に思える。

「心配しなくても、私はブラックが大好きだよ。傾ける愛情が減ったりしないよ。大丈夫」

愛情は減るものではなく、きっと増えるものだ。そう思える。

第二十五話：スイッチオン（前書き）

R15程度（もしくは以上）の性表現が含まれます。苦手な方、該当年齢に達していない方は、この頁は飛ばしてください。多分そんな問題ないです。

読後不快感を示されてもどうにも出来ません。

第二十五話：スイッチオン

「駄目、で、す……もっと、優しく……っ」

「優しくしてるつもりだけど、あれ？ んっ、ちょ、ごめん」

「い、たい、です」

「そういえば、私、猫なんて洗ったことないや……」

「ちょ、マシ、口。げふっ」

—— ……というわけで、帰宅した私たちは大きいままお風呂は問題だろうと、猫のままお風呂に入れてあげただけで、失敗に終わった。

「……まだ、口の中に石けんが入っているような気がします……」

「ご、ごめんね？ 明日は勉強してから挑戦するよ」

「また、やるんですか……？」

いや、そんな泣きそうな目で見られても。

「な、何事も経験だよ。大丈夫、もっともつと頑張るからっ！」

ぐったりとベッドに寄りかかり、アイステイーを飲んでいたブラツクに力強く答えると「そう、ですね」と曖昧な笑みと、曖昧な返事が返ってきた。

そんなに、怯えなくても次は大丈夫だ。というか、次がある時点で問題かもしれないのかな？

「それより、マシ口」

ことりとグラスをローテーブルに載せたブラックはベッドに腰掛けると、ぽんぽんっと膝を叩いた。

私は「何？」と単語帳を片手に促されるまま横向きに腰を降ろす。テストなんて夢の中でどうでも良いかもしれないけれど、実施される以上はそれなりの準備をしないと落ち着かないというものだ。

私は基本的に小市民で小心者ですからね。

「マシロは勤勉ですね」

褒められているのかと思ったのだけど、違ったようだ。

ブラックは私の手の中から、単語帳を抜き取ると、あっさりローテーブルに放ってしまった。私の短い拒絶の言葉は無視された。

「こちらに来てから、あまり構ってもらっていません」

大きな身体で猫らしく擦り寄ってくる。

がつつりと私の肩を抱いて、顔を近づけて口角を引き上げる。なんでそんな良い顔されないといけないのか、じりつと後退したくなるのは本能的なものだ。

危機を感じた。

生命的な何か。

ねえ、マシロ。と耳に甘い声を注ぎ込まれ、ぱあっと身体が熱を持つ。空いていた手は前に流れてきていた長い髪を絡めて遊ぶ。

「ブラック、あ、あのね」

すりつと鼻先が耳の後ろを撫り「はい」とブラックが返事をする
とその吐息が掛かる。

鼓動が早くなって、あわあわするので離れてくださいという気持ちを込めて微妙にずれたけれど、もちろん徒労に終わった。

「タオル一枚で生殺しだったんですよ……」

「な、生殺しって、そんな……仕方ない、でしょ、」

うちのお風呂は狭いし、大人二人が一緒に入るわけにはいかない。
重なるけどお屋敷ではないのだ。

服を着ていては嫌だというブラックの我が儘を聞いて、タオルで妥協したのだからそこは見逃して欲しいと思う。

「それはそうと」

そのくせあつさり引いたブラックに拍子抜けする。
どうでも良いならそんな話持ち出さないでよ。

「会えなかった一年ほど……マシロはここで過ごしていたのですよね」

「——……え？ ああ、まあ、そうだよ」

「寂しく、なかったですか」

頬に鼻先を摺り寄せて、時折頬に唇が寄せられる。

くすぐつたい。でも、心地良い。

緩く頬を落として、柔らかく注がれる愛撫に身を任せる。ブラックの声も所作も性急さがなければ、とろりとして緩やかに私を甘く酔わせるには十分だ。

「寂しかったよ……とても……」

今でもそのときのことを思い出すと切ない想いが溢れてくる。
人生のうちあんなに後悔することは後にも先にも、もうないと思えるくらいは後悔した。会いたくて声が聞きたくて、触れたくて……
……ほぼ連日泣いて過ごした。

そんな私の気持ちを察したようにブラックは続ける。

「きつと、マシロの方が寂しかったですよね」

「——……え？」

「この場所では、誰も私たちのことを知らない。私には貴方を迎えに行くという目的があったけれど、マシロはそうじゃない。ただ、無為に時を過ごすのは辛いと思います」

今はこうして一緒に嬉しいと締め括り、肌に纏わりつくように首筋に舌を這わせる。濡れた部分が冷えた空気に晒されてひやりとし身の内を熱くする。

「ねえ、マシロ……その間、私を思い出すことはありませんでしたか？」

「——……つぶ、ん、ある、よ、もちろん」

生暖かな息が耳に注ぎ込まれ絡みつくように問い掛けられる。

柔らかく、私の身体をなぞっていた大きな手がいく当てのない私の手を包み込む。

「え」

「——……触れたこと、ありますか？」

予想していなかったことに驚き、思わずブラックの顔を見た。
蠱惑的な笑みを浮かべたブラックは、色めいた瞳を細めて私のこ

めかみに唇を寄せ軽く食みべろりと舐める。そのなんと艶かしい感触に私の胸の奥がきゅっと縮まり熱を持つ。

ブラックの手で固定された私の手は彼に促されるように、自分の足の付け根に触れ、ゆっくりと指先が這う。びくりと肩を強張らせ、嫌だと力を込めるけれど、全く意味を成さない。

「や、だ……」

「触れなかったんですか？　こうして……」

「、しな、いよ」

パジャマの上からでも、その奥が、じんと熱く熱を持っているのが分かる。

やめたと顔を逸らすけれど、拘束するまでには至らない程度の腕の力なはずなのに緩むことはなく、ゆるゆると蠢き確実に私を感じるようにと突き進む。

羞恥心に瞳が潤み、俯いてきゅっと瞼を硬く閉じれば、その間をブラックの舌が這い軽く眼球に触れていく。背筋から、かあっと熱が這い上がってくる。

泣かなくても、と、喉の奥で晒われて、きゅうっと身体の奥が苦しくなる。

「本当に、一度もない、ですか？」

重ねられた手に力が込められて、強い刺激が感じやすくなった部分を攻める。

短い吐息が漏れ、じわりと額に汗が滲む。

胸のドキドキが全身に伝わり、身体中が心臓になってしまっているように激しく脈打ち熱を孕み放出するときを待ちわびる。

「……いじわる、しない、で」

声が掠れる。

ないわけじゃなくても認めるのは恥ずかしすぎる。

僅かに身を擦って掴まえていない方の手で、つつとブラックの内腿を撫でる。その中心が張り詰めているのが分かり自分だけじゃないとどこかほっとする。するりと、撫でて見上げれば薄っすらと濡れた瞳と出会った。

吸い込まれるように上向いて、重ねられる唇を軽く食み、柔らかく吸う。

「んう、う……」

「……は、あっん……」

濃厚な口付けに、固定されてしまった手のひらの奥が熱い熱を発生呼吸しているように淡く湿ってくる。直に触れなくても分かるくらいに、もう、濡れてしまっていると思う。

「ねえ、ないですか？」

尚重ねられる質問に、きゅうつと閉じた瞳をあけることは出来ない。

ないといえはとうだというんだろう。あるといえはとうだというんだろう。

どちらの答えも、物凄く恥ずかしいような気がするし、沈黙は既に肯定しているような気がする。それを分かっている、私に口にさせようとしているブラックは酷い。

「ひどいよ」

はう……っ と唇の端から洩れる吐息を吸い込むように唇が重ねられ「嫌いますか？」意地悪すぎる問い掛けだ。この程度で嫌いだと明言出来る気持ちじゃないことくらい、お互いに嫌というほど分かっている。

私は苦しげに息を吐き、ブラックに触れていた手をベルトに掛ければ、その手をそっと掴まえられ自分の背中の方へと押しやられた。手持ち無沙汰にブラックの服の端を、きゅっと掴み、どうしても赤い顔のまま見上げると微かに潤んだ瞳を細められる。

「好きです。貴方の全てが……だから、私の大好きなマシロのこともつと深く知りたくないですか？」

知りたくないです。結構です。勘弁してください、やめて。

なんていつてもブラックは愉悦を浮かべるだけだろう。どの部分がスイッチだったのか分からないけれど、私はブラックのエスっ気に火を点けてしまったようだ。

じわりと身体が汗ばむ。

「っ！　ちよっ、や……っ」

私の片手を掴んだまま、パジャマのズボンに手が滑り込む。びくりと反射的に逃げ出そうとしたら空いている手で固定されてぴくりとも動けない。私はブラックに引かれるまま、つつと下着の中へと導かれる。

濡れていることは自分でも分かっていたけれど、肌から下着が離れる瞬間系を引いた気がしてきゅっと瞳を閉じた。

ふわふわわっ と身体中の汗腺から汗が噴出して、ぱいっ と顔を

背けると追い討ちを掛けるように、ふふつと息声で笑われて首筋に唇を寄せられる。

「凄く濡れてますね、気持ち良い？」

ぬるぬると私の指先を使って秘部を撫で、ぷつりと亀裂の奥へと指を滑らせる。ぞくぞくぞくと背を這い登ってくる官能は、ブラックの手で与えられているのか自分の指先なのか分からない。

「や、め……」

力ない拒絶の言葉と共に自由になる手でブラックの服を掴み、ずるずると下がり落ちる身体を支える。

ぷつりと、自分の指先に生暖かい感触が絡まりお腹の奥がじんつと疼く。

「マシロの中、暖かいでしょう？」

そう囁かれて、指先に感じる暖かさの意味を知る。

私の指は浅くしか入っていないけれど、ブラックの指はもつと深く入り込んで中でゆつくりと円を描き耳元で囁く。私の身体を掴まえていた手が、パジャマの上から胸に触れ柔らかく揉む。じわじわと体重を掛けられ、私はぐらりと後ろに倒れベッドにぼすりと堕ちた。

「……んな、ことまでしないよ……馬鹿……」

無理な姿勢により手がようやくと解放されて自分の体に密着していた手を抜き去ると、押し掛かってきたブラックから顔を反らして抗議した。

ブラックは私の喉元にキスをしながら、慣れた手つきで私の上着のボタンを外し素肌に触れる。ゆっくりと与えられる快楽に、息を殺し熱い吐息を漏らす。

「――…っ、ん、そう、ですね」

「ちよっ」

ぼんやりと熱くなってくる頭の片隅で濡れてしまった手をどうしようかと思っていたら、ブラックが指を絡めてきた。そしてそのまま顔の前まで引き上げてくると、躊躇なくぺろりと私の指を舐める。思わず慌てて手を引こうとしてもピクリとも動かせない。驚きに赤くなり目を丸くする私をブラックは悦に入った瞳でちらと見たあと、瞼を落としてワザとらしくねっとりと舐め上げる。時折ちらりと見える舌先が婀娜っぽく淫らでいやらしい。

「……ふ、っ、んう……や……」

唇の端から洩れる声を必死で抑えるのに、どこまで我慢出来るか正直自信はなかった。

第二十五話：スイッチオン（後書き）

この続きは裏R指定頁でどうぞ。

下記アドレスです「○○○」部分をパスワードに置き換えて、指定ページにてお楽しみください^^

[http://www11.plala.or.jp/ssha
ppy/been/mugen○○○7.html](http://www11.plala.or.jp/ssha
ppy/been/mugen○○○7.html)

パス請求はブログ『ちよこつと広場』の「パス請求案内」を参照ください。

<http://syousetunarou.seesaa.net/article/184610087.html>

第二十六話：デート日和

—— …… ドンドンッ！

「起きろーっ、真白、おーきろーっ！」
「ぎゃっ！」

ばさっ！ と無遠慮に布団を剥ぎ取られ、一気に覚醒した。
目の前には相変わらずカルシウム足りてないんじゃないかと思う、
我が弟が眉間に深い皺を寄せて、私の大切なお布団を持っている。

「返して」

「そうか、学校へは行かないんだな？」

「行く。でも、あと五分」

「五分程度寝るんだったら、さっさと起きろっ！」

…… 低血圧という言葉を知らないのだろうか？ 私の伸ばした腕
を無視し、郁斗は床に布団を放って「さっさと飯食えよ」と部屋を
出て行ってしまった。

多少乱暴に扉が閉まったのを見詰めて、ふわああ！ と大きな欠
伸を一つ。

「あ」

ちゃんとパジャマは着ていた。
隣りも黒猫ちゃんになっている。

形跡はちゃんと片付けてくれたようだ。それも確認せずに寝落ちする私。駄目っ子だなと苦笑してから、仕方なくベッドから抜け出した。

出かける準備を整えて、ぼふんつと鞆を机の上に置いて唸る。
そんな私の顔を覗き込むように、とんと身軽に机に上がったブラックをちらと見て、もう一度唸った。

「どうかしたのですか？」

可愛らしく黒猫の姿で訪ねてくるブラックに私は首を振ったあと、
よしっ！ と決断した。

バッグを開けて、荷物を加える。
私服だ。

なるべく皺になったりしなさそうなものを選んで、一式詰めて一息。

今度はポケットから携帯電話を取り出して、ブラックの前に置く。
ブラックは、ちらとそれを見て、私を見上げた。

「デートしよう」

「はい？」

「デート。私、授業が終わったら直ぐに出るから、ブラックもその頃に出てきて、あ、ああ、学校出る前にそれに連絡するから、」

いつてきょんとしているブラックの前に転がしたケータイをつんつと突く。

「これね、ケータイ電話って言って、こっちで主流になってる通信

手段なの。この画面……」

いいつつ私は机の上にあった、家の電話の子機を掴むと自分のケータイ番号を押す。

数秒待てば、聴きなれた着信音が鳴り、ケータイが光り始める。ブラックはしみじみとそれを見つつ、私が「鳴ったらここを押すの」と通話ボタンへと導く。

猫手では難しかったらしく——ちょっと苦戦しているのが可愛かった——ブラックは、少し警戒しつつも元の姿に戻って、ボタンを押した。

『もしもし、聞こえる?』

「え、ああ、聞こえます。なくても聞こえますよ?」

まあ、室内だからね。

隣り同士で電話してるからね。うん。

私は肩を落としてつつも子機を戻して説明を続けた。

「離れてても聞こえるから。この液晶画面に『公衆電話』って出たら私からだと思って? 学校から電話するから、そうしたら、えーっと」

私はブラックの手の中からケータイを抜き取って、ナビの設定をする。一応家から駅まで。

「この地図が案内してくれるから駅で待ち合わせしよう?」

一度帰宅したほうが確実だけど、時間が勿体無い。慣れないことをさせるのは可哀想な気がするけど、ブラックなら

大丈夫だよな？

「魔法具的なものですよね？ マニュアルとかありますか？」

「えーっと、取り扱い説明書は直ぐに出ないから」

もう一度ケータイを取って簡単マニュアルを表示させる。

「これで大まかなことは分かるよ。他所に掛けたりしなきゃ、適当に弄くって良いからね」

と押し付けた。

ブラックはにこりと楽しそうに笑って「ありがとうございます」とお礼をいつてくれる。その笑顔になんだか気恥ずかしくなったのと、階下から「置いていくぞーっ！」という郁斗の怒鳴り声を聞いて、私は慌てて外に飛び出した。

昨日は思いつきで出掛けてしまったけど、今日は行き先もちゃんと決めている。

デートといえば遊園地だろう。

そんなに大きなところではないけれど、近場にあるし、行かない手はない。

私は半日ずーっと時計と睨めっこ。

早く終われ早く終われと念じていた。いつそ、最後の授業は抜け出そうかとも思ったけど、やっぱりそういうのは良くないと自分を戒める。

「テスト勉強もはかどらないし、カラオケでも行かない？」

終業と共に私は鞆を握り、ユキの誘いが掛かったときには、扉に

手を掛けていた。

「ごめん、今日はパス」

普段は走らない廊下も突っ走る。

玄関フロアのところにある唯一の公衆電話のところで急ブレーキを掛けて、自分のケータイを鳴らす。

出るかなあ、出るよねー……どきどき。

なんか自分の電話に自分で掛けるなんて不思議。

ああでも、紛失したときは一応やるかなあ？ そんなことを考えていたら、ぷつと通話可能になった音がした。

「ブラック？」

『マシロ？』

ちゃんと出てくれたというこの異常な喜びはなんだろう。

出るといつてあるんだから出るのは当たり前だろうけど、出たよっ！ 本当に。

それも少し声が緊張してる。

ああ、きつと耳とかふわんふわんと船を漕いでいるはずだ。今すぐ見たい。目視したいっ見えないけどね？

「私、今から駅に向うからブラックも頑張つて来てね？」

『分かりました』

「ブラック、大丈夫？」

『え？ ああ、はい。平気です。迷わないと思いますよ』

なんか凄く可愛い。

こういう通信手段であっちではないから新鮮だし、ブラックにも馴染みがないはずだ。私の方が知っていることがあるなんて、ちよつとした優越感。

それになんていうか、受話器越しに聞こえるブラックの声は少しくすぐつたい。私、きっと恥ずかしいくらい浮き足立ってると思う。自覚あります。

私は馬鹿丁寧に受話器を置くと再び駆け出した。

家に寄ってからなんて面倒をすると一時間くらいロスをする。このまま向えば十五分程度だ。

走って駅まで到着すると先に来ていたなんてことないと思うけど、きよろきよろと辺りを見てからまだブラックが来ていないことを確認して、私は——本当は駄目だけど、今日だけ許して——トイレで着替えを済ませて荷物をロッカーに押し込んだ。

髪もちゃんと直したし、服は少し子どもっぽい気がするけど、でも、こっちに帰ったら高校生だったのでそれに合わせたら仕方ない選択になった。

入り口でのんびりとブラックが到着するのを待つ。

この待っている時間というのは不思議だ。

絶対にくるのがわかっていのに、本当に来るかなーとか、どきどきと心地良い緊張感がある。そわそわしすぎたら私が不審者だ。

なんとか浮き足立つ気持ちを押し留めて、ブラックが来るだろうなという方向を見詰めた。

「月見里さん？」

まだかなーと背伸びして遠くを見ていたら直ぐ隣りで名前を呼ばれて私は振り向く。見慣れない制服だけど……と、顔を見上げると、びっくりと肩を強張らせた。

「やっぱり、月見里さんだ。私服だし、もしかしたら違うかもって思ったから」

思ったなら素通りしてくれば良いのに、どうしてわざわざ声を掛けるんだろう。

私は少し苛々としながらそっけなく「そうなんだ」と返した。

「凄く久しぶりだね。俺ずっと会えないかな？ 会いたくなって思ってたんだけど」

私は二度と会いたくなかった。

折角学校も一緒じゃなくなったのに、どうして、私に拘るんだろう。

「私、待ち合わせをしているから、用事があるなら早くお願い」

テンションマックスだったのが一気に下降した。

物凄く不機嫌全開で口にした私に目の前の好青年っぽい男子生徒。名前は大崎トオヤだ。

私の初恋の相手、そして、あっさり浮気されて別れた相手だ。

今更、今更、だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7482w/>

白蒼月夢幻譚～二つ月の二つ世界（種シリーズ?）

2011年11月4日10時25分発行